

DA  
604  
1996  
HG

# 対人印象の形成過程における

## 連続行動情報の処理

1996年度

筑波大学心理学研究科博士論文

学籍番号 905059

宮本聡介

寄	贈
宮本聡介氏	平成
	年
	月
	日

98000031

## 目次

序論	1
第1部 対人認知研究における連続行動情報の意義と理論的位置づけ	5
第1章 対人情報としての連続行動の位置づけ	6
1-1 これまでの研究に見られる対人情報の整理	7
1-2 対人情報の再整理	13
1-3 本論文で問題とする連続行動情報とは	17
1-4 第1章のまとめ	19
第2章 行動情報の処理プロセスを問題にした研究の概観	20
2-1 帰属理論	21
2-2 帰属理論の問題点	27
2-3 対人記憶 (person memory)	32
2-4 対人記憶研究の問題点	42
2-5 第2章のまとめ	44
第3章 連続行動情報をもとにした対人認知研究の意義と理論的整理	45
3-1 連続行動情報を対人認知研究で取り扱う意義	46
3-2 行動知覚理論の整理	50
3-3 理論の整理と対人認知研究における位置づけ	63
3-4 第3章のまとめ	64
第2部 連続行動情報の処理プロセスの明確化	65
第4章 印象形成の手がかりとなる情報の取り込み方	66
4-1 問題の所在の明確化	67
4-2 連続行動の観察場面における処理目標の効果 (研究1)	70
目的	70
方法	71
結果	75
考察	79
4-3 対人印象の形成過程における連続行動情報の処理 -繰り返し観察の効果- (研究2)	83
目的	83
方法	83
結果	85
考察	89
4-4 第4章のまとめ	91

第5章 連続行動情報から処理される具体的な情報内容の検討： .....	92
プロトコルデータの分析を通して .....	92
5-1 内省報告データの検討（研究3） .....	94
目的 .....	94
方法 .....	94
結果と部分的考察 .....	95
考察 .....	113
5-2 オンラインプロトコルデータの分析（研究4） .....	114
目的 .....	114
方法 .....	116
結果 .....	118
考察 .....	129
5-3 第5章のまとめ .....	132
第6章 抽出行動と印象判断の関連 .....	134
6-1 実証的研究（研究5） .....	135
目的 .....	135
方法 .....	135
結果 .....	136
考察 .....	140
6-2 第6章のまとめ .....	141
第7章 第2部のまとめ .....	142
7-1 対人認知事態における連続行動情報の処理モデル .....	143
第3部 特性スクリプトと特性活性化モデルの提唱 .....	145
第8章 特性スクリプトと特性活性化モデルの概略 .....	146
8-1 特性生成におけるスキーマの役割 .....	147
8-2 特性スクリプトの存在の示唆 .....	151
8-3 特性活性化モデル (Trait activation model) .....	152
第9章 特性活性化モデルの実証的検討 .....	154
9-1 特性活性化と特性判断の反応時間（研究6） .....	155
目的 .....	155
方法 .....	160
結果 .....	163
考察 .....	163
9-2 印象形成の手がかりとして抽出されやすい行動の 記憶の残り易さについて（研究7） .....	166
目的 .....	166
方法 .....	166

結果	167
考察	169
9-3 抽出行動の動作特性の心理的評価 (研究8)	170
目的	170
方法	171
結果	171
考察	173
9-4 特性スクリプトの具体的な内容の検討 (研究9)	173
目的	173
方法	174
結果	174
考察	178
9-5 第9章のまとめ	178
第10章 特性概念の活性化が行動の抽出に与える影響	180
10-1 対人印象の形成場面で 事前情報が連続行動の抽出処理に及ぼす影響 (研究10)	181
目的	181
方法	182
結果	188
考察	197
10-2 第10章のまとめ	199
第4部 全体的総括	200
第11章 本論文の結論と意義, そして今後の展望	201
11-1 本論文の要約と結論	202
11-2 対人認知研究における本論文の研究意義	205
11-3 残された課題と今後の展望	207
論文要旨	209
引用文献	214
謝辞	225
Appendix	228

## List of tables and figures

Figure 1. Contents of this dissertation	4
Table 1-1-1 Person categories (Cited in Beach & Wertheimer, 1961)	8
Table 1-1-2 Attribute classes for person information (Cited in Fiske & Cox, 1979)	11
Figure 1-2-1. Taxonomy of person information(1)	16
Figure 1-3-1. Taxonomy of person information(2)	18
Figure 2-1-1. The analysis of noncommon effects choosing a graduate school(Cited in Jones & Davis, 1965)	23
Figure 2-2-1. Implicit assumption in attributional process of disposition and trait	29
Figure 2-2-2. Direct route from behavior to trait inference	31
Figure 2-3-1. Network model of person representation	36
Figure 2-3-2. An independent trace storage model(Cited in Klein & Loftus, 1990)	37
Figure 2-3-3. Associative network model (Cited in Hastie, 1980)	39
Figure 2-3-4. Dual representation of the person information	41
Figure 3-2-1. Structure of ongoing behavior of others	53
Figure 4-1-1. Behavior extraction	69
Table 4-2-1 Twenty video clips used in study 1	72
Table 4-2-2 Mean frequency of button pressing and mean button pressing time (in study 1)	76
Figure 4-2-1a. Transition of button pressing rate (Scene 1 - Scene 10) (in study 1)	77
Figure 4-2-1b. Transition of button pressing rate (Scene 11 - Scene 20) (in study 1)	78
Table 4-2-3 Mean scores of behavior free recall and trait description (in study 1)	80
Table 4-2-4 Correlation coefficients of FBP with behavior free recall and trait description (in study 1)	80
Table 4-3-1 Mean frequency of button pressing	86
Table 4-3-2 Mean button pressing time (seconds)	86

Figure 4-3-1a. Transition of button pressing rate (First half)	
(in study 2 )	87
Figure 4-3-1b. Transition of button pressing rate (Last half)	
(in study 2 )	88
Table 5-1-1(1)-(11) Introspective protocol data (in study 3 )	96-106
Figure 5-1-1. Ratio of trait terms in introspective report	108
Table 5-2-1 Mean frequency for total parts of speech and each part of speech	119
Figure 5-2-1. Mean appearance ratio for each part of speech in the impression group and the memory group	121
Table 5-2-2 Mean appearance ratio of trait terms in total part of speech	123
Table 5-2-3 Proportion of trait terms in each part of speech (impression group)	123
Table 5-2-4 Correlation coefficients of trait terms with each part of speech (impression group: N=23)	124
Table 5-2-5 Mean appearance ratio for each part of speech in two clusters	124
Table 5-2-6 The numbers of subjects in two clusters of the impression group and the memory group	124
Figure 5-2-2. Mean appearance ratio of each part of speech in three speech types	126
Table 5-2-7 Appearance ratio of trait terms in three speech types	127
Figure 6-1-1. Making of complete video clips and cutting video clips	137
Table 6-1-1 Impression rating of complete video group and cutting video group	138
Figure 6-1-2. Impression rating scores of complete video group and cutting video group(2)	149
Figure 7-1-1 The process model of ongoing behavior of others in impression formation	144
Figure 8-1-1. Schema between trait and behavior (Cited from Reeder, 1985)	150
Figure 8-4-1. Trait activation model	153
Figure 9-1-1. Associative network model of trait and behavior(1)	157
Figure 9-1-2. Associative network model of trait and behavior(2)	158
Table 9-1-1 Target adjective word and dummy adjective words used in study 6	162
Table 9-1-2 'Yes' response ratio to the target adjective words	164

Table 9-1-3 Means of time difference between target adjective word and dummy adjective words.....	165
Table 9-2-1 Mean recall ratio of trait relevant (irrelevant) behavior in the complete video group.....	168
Table 9-2-2 Mean recall ratio of trait irrelevant behavior in cutting video group and complete video group.....	168
Figure 9-3-1. Psychological ratings of extracted behavior and non extracted behavior.....	172
Table 9-4-1 Frequencies of total scripts and frequencies of scripts coincided by more than two of three judges.....	175
Table 9-4-2 Cross table of trait with selection items.....	177
Table 10-1-1 Mean impression scores of each scene for experimental stimuli.....	184
Table 10-1-2 Preliminary judgment scores of prior information.....	187
Figure 10-1-1. Mean frequency of button pressing in familiarity, desirability and neutral conditions.....	189
Figure 10-1-2a. Transition of button pressing rate in familiarity, desirability and neutral conditions (scene 1 - scene 6 ).....	191
Figure 10-1-2b. Transition of button pressing rate in familiarity, desirability and neutral conditions (scene 7 - scene 12 ).....	192
Table 10-1-3 Factor analysis of impression judgments item.....	193
Figure 10-1-3. Mean familiarity scores in familiarity, desirability and neutral conditions.....	195
Figure 10-1-4. Mean desirability scores in familiarity, desirability and neutral conditions.....	196
Figure 11-1-1 The process model of ongoing behavior of others in impression formation(Revised version).....	205

## 序論

---

我々は、相手の行動からその人物の印象を形成する上で手がかりとなる情報を引き出していることがある。例えば電車の中でおばあさんに席を譲る人を見ると、「親切な人だ」と感じるだろうし、会議中に居眠りをしている人を見れば「だらしない人だ」と思うだろう。では、なぜそう思うのか、それが本論文の研究を始めるきっかけとなった問いであった。電車に乗っているおばあさんに席を譲るのは「親切なこと」だから、その人物も親切だと思うのは至極当たり前のように感じる。しかしこの時、我々が当該人物の行動をどのように観察し、親切という情報を何処に求めたのかということ、直接説明している理論は、Asch (1946) に始まる対人認知研究以来、未だ見いだされていないように思う。そこで本研究では、上記の問いに対する回答を求めるために「連続行動」という対人情報に注目した。

人が他者を理解するために利用する情報を「対人情報 (person information)」と呼ぶならば、人間をとりまく社会的情報 (social information) の中で、対人情報は最も基本的な社会的情報の一つである。対人情報を、人がどのように処理しているのかという問いは、社会心理学の中の、特に対人認知 (person perception) という研究領域で現在でも盛んに検証が行われている。特に、これまでの対人認知研究では、主に得られた対人情報から、最終的にどのような印象が形成されるかを予測することに、研究の関心が向いていた。

しかし本論文では、そうした最終的に形成される対人印象 (person impression) の内容よりも、我々が対人情報をどのように取り込み、解



積しているのかという点を明らかにすることに研究の焦点を当てた。これは本研究で問題とする対人情報が「連続行動」だからに他ならない。連続行動という対人情報は、視覚的な情報であると同時に時系列的に変化する情報でもある。従って情報の受け手である行動の観察者は、連続行動を視覚的に受け取るという知覚的過程と、受け取った情報を何らかの形で社会的に解釈するという認知的過程を経ることによって、はじめて連続行動から当該人物の対人印象の手がかりとなる情報を獲得しているのではないかと考えられ、こうした知覚的過程と認知的過程の双方を視点におくことによって、対人認知事態における連続行動情報の処理過程を明らかにすることが、本研究の目的となる。こうした知覚的過程と認知的過程での、受け手の処理の特徴を、本論文では次のような観点から検証することを試みた。

連続行動情報は時系列的な変化を伴った情報である。そのため、受け手は時間の流れに沿って、常に情報に接触することになる。こうした状況では、単に情報を受動的に受け取るだけでは他者を知るための適切な情報を得ることは難しいと考えられる。そのため受け手は他者を知るための情報を主体的・積極的に選択し、取り込んでいるのではないかというのが、知覚的過程における中心的な論点であり、この論点を検証するためのデータを提出することを試みた。

また連続行動情報は視覚的な情報である。そのため受け手は取り込んだ情報を解釈することによって始めて〇〇さんに関する情報として、対人表象 (person representation) に組み込んでいるだろうというのが、認知的過程における中心的な論点である。

上記の論点を明らかにする概念的な枠組みとして、本研究では主に Newtonson や Lassiter を中心とする研究者らによって提唱された「行動知

覚理論」と、1970年代後半から盛んに論じられるようになった「スキーマ理論」の観点を取り入れた。

なお本研究はこれまで先陣たちが残した多くの研究にみられるようなモデル検証、仮説検証の研究スタイルよりも、探索的でモデル提唱的な色彩の強い論文となっている。そのため、今後の対人認知研究の礎となるような、基本的知見の提出を念頭に置いた研究の進め方を心がけた。

### 本論文の構成

本論文は4部構成をとった。

第1部ではこれまでの対人認知研究で扱われてきた対人情報を概観するとともに、行動情報に関するこれまでの研究を整理することを試みた。

第2部では実証的な研究をもとに、対人認知事態での連続行動の基本的な処理プロセスを明らかにした。

第3部では第2部で得られた実証データをもとに、連続行動の処理プロセスの背後に潜む認知的なメカニズムに関する仮設的なモデルを提唱し、その実証的な検討を行った。

第4部では第2部、第3部で提出された実証データをもとに、対人認知事態における連続行動の処理に関する基本的なモデルを提出した。

なお本論文はさらに12章の章立てがなされている。各章の構成内容の概略はFigure 1に示した。

<p><b>第1部</b> 対人認知研究における連続行動の意義と理論的位置づけ</p>		
<p><b>第1章</b> 対人情報としての連続行動の位置づけ</p>	<p><b>第2章</b> 行動情報の処理プロセスを問題にした研究の概観</p>	<p><b>第3章</b> 連続行動情報をもとにした対人認知研究の意義と理論的整理</p>
<p><b>第2部</b> 連続行動情報の処理プロセスの明確化</p>		
<p><b>第4章</b> 印象形成の手がかりとなる情報の取り込み方</p> <p>研究1 連続行動の観察場面における処理目標の効果</p> <p>研究2 対人印象の形成過程における連続行動情報の処理—繰り返し観察の効果—</p>	<p><b>第5章</b> 連続行動情報から処理される具体的な情報内容の検討：プロトコルデータの分析を通して</p> <p>研究3 内省報告データの検討</p> <p>研究4 オンラインプロトコルデータの分析</p>	<p><b>第6章</b> 抽出行動と印象判断の関連</p>
<p><b>第7章</b> 第2部のまとめ</p>		
<p><b>第3部</b> 特性スクリプトと特性活性化モデルの提唱</p>		
<p><b>第8章</b> 特性スクリプトと特性活性化モデルの概略</p>		
<p><b>第9章</b> 特性活性化モデルの実証的検討</p> <p>研究6 特性活性化と特性判断の反応時間</p> <p>研究7 印象形成の手がかりとして抽出されやすい行動の記憶の残りやすさについて</p> <p>研究8 抽出行動の動作特性の心理的評価</p> <p>研究9 特性スクリプトの具体的な内容の検討</p>	<p><b>第10章</b> 特性概念の活性化が行動の知覚に与える影響</p> <p>研究10 対人印象の形成場面で事前情報が連続行動の抽出処理に及ぼす影響</p>	
<p><b>第4部</b> 全体的総括</p> <p><b>第11章</b> 本論文の結論と意義、そして今後の展望</p>		

Figure 1 Contents of this dissertation

---

## 第 1 部

対人認知研究における

連続行動情報の意義と理論的位置づけ

---

## 第1章 対人情報としての連続行動の位置づけ

我々は日常場面で、様々な対人情報に接触する。例えば容貌や身長、体格などの身体的特徴、服装などの外見的特徴をはじめ、話し方、声のトーン、日頃の振る舞い、第三者からの評判、当人自身の自己紹介の内容など実に多種多様である。

そこでまず本章では、これまでの対人認知研究で、どのような対人情報が取り上げられ、問題にされていたのかを探ることとする。そして最終的に、本論文で問題とする連続行動情報が対人情報の中で、どのように位置づけられるのかを明確にしたい。

## 第1章

---

### 対人情報としての連続行動の位置づけ

#### 1-1 これまでの研究に見られる対人情報の整理

これまでの対人認知研究では、どのような対人情報が取り上げられていたのかという問題に取り組んだ研究として、Beach & Wertheimer (1961), Carlston (1994), Dornbusch, Hastorf, Richardson, Muzzy, & Vreeland (1965), Fiske & Cox (1979), Livesley & Bromley (1973)などを挙げる事ができる。このうちDornbuschら (1965)とLivesley & Bromley (1973)は、子どもの対人認知や、青年期の対人認知など、特定の発達段階に限定した対人情報を取り上げており、やや領域特定の内容であったり、取り上げられた情報の内容が細分化され過ぎている。またCarlston (1994)の研究では、他者情報の分類というよりも、知覚者自身の表象の構造を分類するという視点から対人情報を分類しており、例えば、知覚者自身の他者に対する感情反応や、行動反応など、やや特殊な対人情報も含まれている。それに対してBeach & WertheimerやFiske & Coxの研究はこうした制限がなく、非常に一般性の高い情報分類を設けることによって、対人情報を整理している。ここではじめに、これら2つの研究を取り上げ概観する。

#### Beach & Wertheimer (1961)による対人情報の整理

Table 1-1-1は、Beach & Wertheimerが対人情報を整理したものである。彼らは対人情報を大きく4つの次元 (dimension) とその中に含まれるカテゴリー (category) の観点から捉えている。

Table 1-1-1

Person Categories (Cited in Beach & Wertheimer, 1961)

---

1. Objective Information.	
O 's appearance	category 1
O 's background	category 2
General information	category 3
2. Social Interaction.	
O 's behavior toward S	category 4
O 's behavior toward other people	category 5
Other's reaction to O	category 6
S 's reaction to O	category 7
3. Behavioral Consistencies.	
O 's enduring personal characteristics	category 8
O 's emotional adjustment and self-concept	category 9
O 's values and ideals	category 10
4. Performance and Activities.	
O 's abilities	category 11
O 's aspirations, ambition, and motivation	category 12
O 's interests	category 13

S is a perceiver (self) and O is a target person (others).

【客観的情報】の次元には、「相手の外見」「相手の背景的情報」「一般的情報」の3つの下位カテゴリーがある。「相手の外見」には体つき、服装、容貌、声など、視覚的で具体的な情報が含まれている。「相手の社会的背景」とは、親の職業、家の社会的地位、生育歴など、その人物に関する間接的な情報と考えることができるだろう。また「一般的情報」とは、未既婚、学歴、職業、学年など、その人物がどのような社会的カテゴリーに所属しているのかを表現した情報と考えられる。

【社会的相互作用】の次元には4つの下位カテゴリーがある。いずれのカテゴリーも、相手と自分、あるいは相手と第三者との相互作用から生じる行為を中心とした情報である。これらの情報は、知覚者自身が観察可能な情報であり、その意味では具体的な情報といえるだろう。ただし「相手に対する自分の反応」は、対人情報の分類という基準の中では、やや特殊な情報である。なぜならこの情報は直接相手から入手される情報ではなく、相手との相互作用の中で、自分自身が相手に対してとった反応であり、当該人物に直接関連した情報というよりも、自分自身に関連した情報と考えられるからである。

【行動の一貫性】の次元には、3つの下位カテゴリーがある。ここでは、行動そのものを問題にした情報ではなく、日頃よく観察される行動傾向から読みとれる、その人物の性格や性質、評価といった概念的な側面が問題にされていると考えられる。例えば「相手の持続的な性格特性」では、物静かだったり、ユーモアがあるなど性格特性そのものに焦点が当てられている。「相手の情緒的適応や自己概念」では、落胆している、怒っている、劣等感を抱いているなど、当該人物の感情反応に関連した情報が該当するであろう。【行動の一貫性】に含まれる各カテゴリーは、【客観的情報】や【社会的相互作用】に比べて、抽象的で概念的である。



これらの情報は、先の【社会的相互作用】に見られる情報を、言語的に表現することによって理解可能になる情報と考えることができるかもしれない。

最後に【行為や活動】の次元がある。ここには、「相手の能力」「相手の要求・野心・動機」「相手の興味」の3つのカテゴリーが含まれている。先に取り上げたの3つの次元の情報は、情報の性質という点では具体的か抽象的か、視覚的に観察可能か観察不可能かといった点から、比較的容易に区別が可能であったが、【行為や活動】は具体的・抽象的という分類上に、明確に位置づけることがやや難しいように思われる。例えば相手の能力では、能力そのものの高低は概念的なレベルの情報であるが、スポーツの成績が良いか悪いかという事はその人物の運動技能を参照にすればよい点では具体的な情報といえるかもしれない。ただし Beach & Wertheimerが【行為や活動】を対人情報に含めた意図が、対人情報の最終的な表現形態を問題にしていると考えられることから、能力の高低という抽象レベルの表現形態が【行為や活動】には当てはまるように思われる。

#### Fiske & Cox (1979) による対人情報の整理

Table 1-1-2は、Fiske & Cox (1979)が対人情報を分類・整理したものである。Beach & Wertheimer (1961)による対人情報の整理では、基本的な4次元の情報と、各次元から構成される13のカテゴリーが取り上げられていたが、Fiske & Cox (1979)では分類・整理の基準がやや細分化されており、6つの基本的な分類次元と、その中に含まれるいくつかの分類カテゴリーが取り上げられている。ただし、Fiske & Coxの分類基準をBeach & Wertheimer (1961)のものと比較すると、非常に共通し

Table 1-1-2

Attribute classes for person information (Cited in Fiske & Cox, 1979)

<i>Appearance:</i>	<i>Behavior:</i>	<i>Origins:</i>
<i>How they appear</i>	<i>What they do</i>	<i>How they got this way</i>
Body	Chronic nonverbal	Nationality and ethnicity
physique	speech	Class
height	facial behavior	Family
weight	eye contact	Educational and occupational background
posture	gestures	Drastic events
specific parts	movement	<i>Properties:</i>
Face	Activities	<i>What makes them up</i>
feature	habits	Traits
eyes	hobbies	Causality
skin	Occupation	Attitudes
hair	Scripts	Interests
Grooming	<i>Relationship:</i>	
clothing	<i>What one does with them</i>	
make-up	Role	
glasses	History	
other grooming cues	Social network	
Overall attractiveness	Perceiver's reaction	
Age	<i>Context:</i>	
Sex	<i>Where one finds them</i>	
Race	Situation	
	Location	

た特徴が見られることが予想される。そこでここでは、Fiske & Coxが分類・整理したものをBeach & Wertheimerの分類と比較しながら見ていくことにする。

【外見 (Appearance)】では、体つき・顔・洋服・全体的魅力の4つの下位情報がある。体つき、顔、洋服はBeach & Wertheimerの客観的情報の「相手の外見 (カテゴリー1)」に該当しており、これは視覚的で具体的な情報と考えることができるだろう。一方「全体的魅力」は年齢、性別、人種などがそれに該当しており、Beach & Wertheimerでは「一般的情報 (カテゴリー3)」に対応すると考えられる。

【行動 (Behavior)】では「ノンバーバル行動」「行為」「職業」「スクリプト」が取り上げられている。このうち「職業」は、Beach & Wertheimerの「一般的情報 (カテゴリー3)」に該当するが、それ以外の情報は、Beach & Wertheimerの分類の中には見られない。例えば「スクリプト」は本人自身の日常生活に見られるある一定の行動パターンを指しているが、かなり特殊な情報の1つである。ただし共通点を見出すとすると、いずれも当該人物の行為を表現した情報であると言える。

次に挙げられているのが【関係性 (Relationship)】である。ここには「役割」「歴史」「社会的ネットワーク」「知覚者の反応」が含まれている。「役割」とは相手と自分との長期的な関係の中で形成される役割分担に関する情報である。また「歴史」とは当該人物と、その人物をとりまく社会的環境との関わり形成に関する情報である。「社会的ネットワーク」は本人の対人関係の広がりを示す情報であり、交友関係などに関する情報が含まれている。この「歴史」と「社会的ネットワーク」は、本人に直接関係した情報というよりも、その人物の社会的な背景を表現した情報と考えられる点でBeach & Wertheimerの相手の「背景的

情報（カテゴリー2）」に該当するかもしれない。また、「役割」「知覚者の反応」は、2者間の関係という観点からとらえた時にみられる情報であることから、Beach & Wertheimerの【社会的相互作用】に関連するかもしれない。

【文脈(context)】は、相手との相互作用場面の具体的な状況に関する情報を含んでいる。例えば、いつ、どこで会ったのか、またその時の場所はどのような様子だったのか、といった時間、場所、状況に関する情報がそれに該当する。ただしこれらの情報は当該人物に直接関連した情報ではないと考えられる。もちろんこうした文脈情報が対人情報の解釈に影響を与えることは予想されるが、今回の目的である、対人情報の整理という点から見ると多少性質が異なっている。

【起源(origin)】とは、その人物の「国民性」や「民族性」「学歴」「職業」などを含んだ情報である。これらの情報の多くはBeach & Wertheimerの「一般的情報（カテゴリー3）」に該当すると考えられる。

【特徴(property)】の中には「特性(trait)」「因果性(causality)」「態度」「興味」などが挙げられており、これらはBeach & Wertheimerの行動の【一貫性】、あるいは【行為や活動】に該当する情報と考えられる。

## 1-2 対人情報の再整理

Beach & Wertheimer(1961)とFiske & Cox(1979)との分類・整理をみると、分類の細分化のされ方に多少の差異は認められるものの、両者には何らかの形で分類の仕方に共通性が見いだせるように思う。例えば、いずれの分類も、外見情報を必ず取り上げていたり、またBeach & Wertheimerの「一般的情報」がカテゴリー情報に近いことから、Fiske

& Coxの「起源」と類似しているなど、この2つのモデルはより包括的な観点からの体系的な分類が可能なのように思われる。そこでここでは、本論文独自の対人情報の分類基準を設け、その基準に従って対人情報を再整理する事を試みる。

なお、Beach & WertheimerもFiske & Coxも直接他者に関連する情報とは別に、間接的に他者に関連する情報も含まれていた。例えばBeach & Wertheimerの、相手に対する自分の行動や、Fiske & Coxの「文脈」情報などがそれに該当する。もちろんこれらの情報も対人的な相互作用の中では非常に重要であると考えられるが、今回は直接当該の人物に関連する情報に焦点を絞り、分類・整理を試みた。

#### 対人情報の4分類

本研究ではBeach & Wertheimer(1961)やFiske & Cox(1979)で取り上げられた対人情報のうち、当該人物自身に直接関連したものを取り上げ、【外見情報】 【行動情報】 【カテゴリー情報】 【特性情報】という4つの対人情報に包括的に整理した。

【外見情報】はBeach & Wertheimerの相手の外見、Fiske & Coxの身体、顔、服装が該当する。もう少し詳細に見ると体格、身長、体重、姿勢、肌の色、髪型、洋服、化粧、眼鏡の有無、容貌などがここに含まれる。

【カテゴリー情報】は当該人物をある社会的カテゴリーに位置づける情報である。Beach & Wertheimerでは一般的情報（カテゴリー3）が、またFiske & Coxでは年齢、性別、人種、国民性、学歴、職歴などがこの分類に該当する。

【特性情報】は当該人物がどのような性格や性質、能力を持っている

かを表す情報であり Beach & Wertheimer の相手の持続的な性格特性（カテゴリー 8），相手の情緒的適応や自己概念（カテゴリー 9），また Fiske & Cox の特性，因果性，態度，興味などこれに該当する。

【行動情報】は Beach & Wertheimer の自分に対する相手の行動（カテゴリー 4）や他の人たちに対する相手の行動（カテゴリー 5）が，また Fiske & Cox ではノンバーバル行動，行為がこの分類に該当する。また本人自身の振る舞いである，表情の変化，アイコンタクト，ジェスチャーと，対人相互作用場面に見られる行為の両方をここでは行動情報としてまとめることにする。

ここでは，さらにこれら 4 種の情報を具体性と抽象性という基準軸をもとに位置づけを試みた (Figure 1-2-1)。

【外見情報】や【行動情報】は，対人情報の中では極めて具体的な情報であるといえる。【カテゴリー情報】は，ある情報源に対するラベル付けによって派生する情報であると考えられるが，その情報源は具体的情報を手がかりにしたものもあれば，もう少し抽象的な情報にラベル付けしたものもあるだろう。例えば黒人，白人というカテゴリー情報は皮膚の色によって判別できるという点でかなり具体性の高いカテゴリー情報である。一方学歴，職歴などの情報は，観察可能な情報源を持っているわけではなく，やや抽象的なレベルでの概念理解を必要とする情報であると考えられる。【特性情報】は他の 3 情報に比べて抽象度が高い。なぜなら，【特性情報】は，それ自体が観察可能な情報ではなく，きわめて概念的な情報だからである。

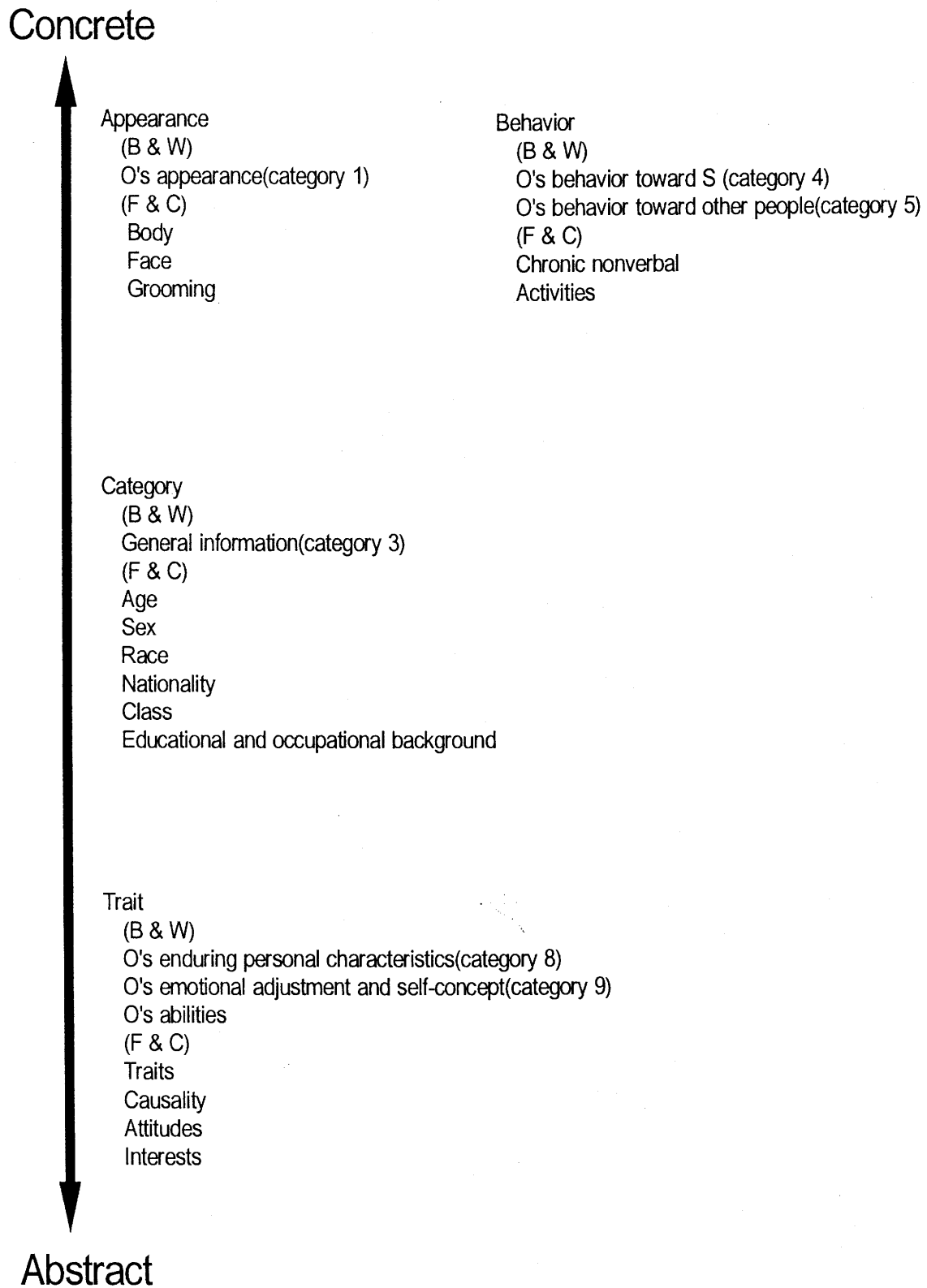


Figure 1-2-1. Taxonomy of person information(1)

### 1-3 本論文で問題とする連続行動情報とは

前節では、Beach & Wertheimer(1961)とFiske & Cox(1979)を参考に、対人情報を【外見情報】【カテゴリー情報】【特性情報】【行動情報】の4種類の情報に整理した。

ただし、【外見情報】と【行動情報】という分類について、ここにはまだ1つの問題が残されているように思う。それはエピソードとして記述される情報をどのように扱うかという問題である。【カテゴリー情報】や【特性情報】は、情報自身がすでに概念的な要素を持っているため、記述によって表現する以外にはない。しかし【外見情報】や【行動情報】は視覚的な特徴を持っていると同時に、記述的な表現が可能な情報でもある。例えば「〇〇さんは美人だ」という情報は明らかに【外見情報】に属するが、この情報自身は視覚的な特徴は兼ね備えていない。また「〇〇さんは昨日デパートで買い物をした」という情報は、明らかに〇〇さんに関する情報であり、さらにデパートで買い物をするということは行動に関連した情報であるが、ここには情報自体に視覚的な特徴は無い。

そこで【外見情報】や【行動情報】を視覚的な要素をもった情報と記述的な要素を持った情報に分類すると、対人情報を分類する上でさらにもう1つの基準を設定することが必要になってくる。それは情報自体が時間軸に沿った時系列的な変化という特徴を持っているかどうかという点である(Figure 1-3-1)。外見情報はもともとの情報(視覚的な情報)の性質が静止的である。そのため記述情報と本来の情報との間に時間軸による情報の変化をさほど考慮する必要はないように思う。ところが行動情報の場合には、記述情報によって表現される行動情報と、実際の行動では性質がまったく異なってしまふ。そしてこれは、記述情報と視覚





情報という単なるモダリティーの違いだけではなく、視覚情報は時系列的な変化を伴っているという点で、極めて性質の異なる情報であると言えるだろう。こうした極めて大きな違いがあるにもかかわらず、これまでの対人認知研究では、この2つの情報が何れも【行動情報】として1つの枠組みに収められていたように思う。しかし、本論文ではこれら2つの行動情報を明確に区別しておきたい。特に「視覚的で時系列的な変化を伴う他者の動きに関する情報」を、本論文では「連続行動 (ongoing behavior)」情報と呼び、記述による行動情報と区別する<sup>1)</sup>。

#### 1-4 第1章のまとめ

本章では対人情報の中で、特に「連続行動」情報がどのように位置づけられるかを整理した。その結果、連続行動情報は「行動情報」の範疇にはいるものであったが、記述による行動情報との違いは明確であり、この2者の区別を行った。

---

<sup>1)</sup> 本来ならば、時系列的な変化を伴う情報として、当該人物の「会話」などの音声情報も対人情報として重要な情報であると考えられるが、こうした音声情報には、声のトーン、会話の速度、会話の内容、言い回しなど極めて複雑な要因が入り込むことが考えられ、同時に情報の抽象性・具象性の軸上での同定が極めて難しい。もちろん、これまでも音声情報が対人情報の中で重要であることは指摘されているが（廣兼・吉田，1994；大坪・吉田，1990），本章では音声情報を対人情報として積極的に位置づけることはしなかった。

## 第2章 行動情報の処理プロセスを問題にした研究の概観

我々が行動からその人物の印象をどのように形成していくかという問題は、対人認知研究の主要な研究テーマの1つであったことは間違いない。従来の対人認知研究では、印象形成を行動から当該人物の特性を推測するプロセスとしてとらえていた。その代表となる研究が、「属性帰属」研究と「対人記憶」研究である。本章ではこれらの研究の内容を概観し、行動情報から特性が引き出されるまでのプロセスがどこまで説明されているのかを明らかにすることを試みる。

ただしこれらの研究の多くは、前章で示されたような「記述された行動」情報と「連続行動」情報の明確な区別を行っているわけではない。そのため研究の紹介にあたっては「行動」情報というひとくくりの表現を用いる。

## 第2章

---

### 行動情報の処理プロセスを問題にした研究の概観

#### 2-1 帰属理論

「僕の彼女は どうして最近、僕に冷たく接するのだろう」「先生は授業中私の意見を どうして無視したんだろう」という状況に接したとき、我々はその事象や行動に対する説明を求めたがるものである。この時、その事象や行動に現れた結果の背後にある「原因(cause)」を、因果的に説明する時の説明原理を明らかにすることが、帰属理論の求めるものである。ただし帰属理論で求める「原因」とは、真の原因や理由が何であったかを問題にするのではない。例えば上記の例で、彼女に冷たくされている理由として、彼女は自分のことを好きでなくなったと考えるかもしれない。しかし本当は、昨晚自分のために作ってくれた料理に失敗してしまい、自分に対して八つ当たりをしているのだとしても、ここではそのことは問題とはならない。つまり、帰属理論の真の目的は、ある出来事や行動の生じた原因や理由を、自分を取り囲む周囲の環境の中にある、種々の情報をもとに推測していく過程を明らかにすることにある。そして推測された原因こそが重要になってくる。なぜなら、推測された原因や理由こそが、当該人物の感情や行動を規定する重要な要因となるからである。

帰属理論の先駆者であるHeider(1958)は帰属の本質を次のように指摘している。

(帰属とは)「一時的で変わりやすい行動や出来事を、その背後にある比較的变化

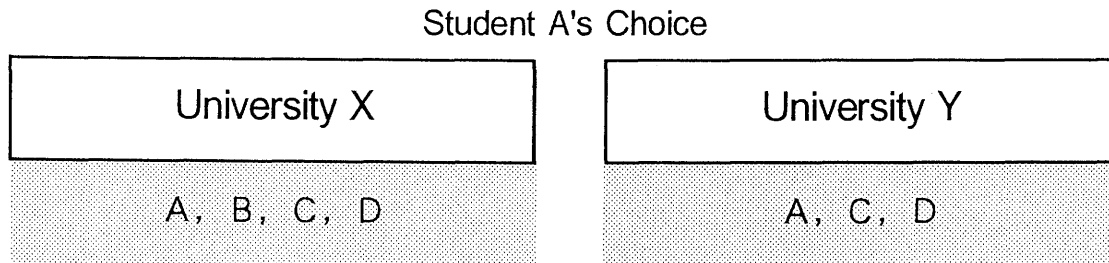
しない条件，すなわちその人の世界の属性的な性質によって生じたものであると解釈することによって現実を把握し，それを予測・統制することである」(p. 79:筆者訳)

つまり我々はある人物の様々な行動から，その行動の背後にあってその行動を生じさせているその人物の属性・特性や，環境内にあってその行動を外的に規定している何らかの安定的な要因を推測することを通じて，環境への適応を図ろうとする。こうした推測は，社会一般に起こる事象の原因に対して行われることになるが，このうち，特に人の属性・特性を推測する過程に焦点を当て理論化したものに，「属性帰属」研究がある。そこでここでは属性帰属に焦点を当てた幾つかのモデルを取り上げ検討する。

### Jones & Davis (1965) の対応推論モデル

ある大学院生 A が X 大学と Y 大学という 2 つの選択肢の中から，最終的にどちらかの大学を選択し受験したとする (Figure 2-1-1)。この時 X 大学には，「大学の名声」「臨床プログラムがある」「立地条件がいい」「課題が多い」という 4 つの特徴がある。一方 Y 大学には，この 4 つの特徴のうち，「臨床プログラムがある」という特徴だけが欠けていたとする。もし我々が，X 大学と Y 大学に対するこれらの特徴を知ったとしたら，A さんが X 大学を選択したのは，その大学に臨床プログラムがあったからだと推測するだろう。そしてここでの属性とは，例えば「将来臨床家になって困っている人のために役立ちたいと望んでいる心優しい人」というようなことを意味することになるかもしれない。

Jones & Davis の帰属理論ではその人物の行動と，その行動が意味する属性が，どの程度明瞭であるかを対応 (corespondent) という概念で捉



- A. Prestigious school
- B. Clinical program
- C. Desirable location
- D. Lots of requirements

Result: Student chooses University X.

Conclusion: University X has the noncommon effects of a clinical program

Inference: The student wants the clinical training.

Figure 2-1-1. The analysis of noncommon effects on choosing a graduate school. (Cited in Jones & Davis, 1965)

えたモデルを提出している。対応とは具体的には、「ある行為とその行為の背後にある特性・属性とが推測によって同じように記述される程度」(Jones & Davis, 1965, p. 223)と定義される。

Jones & Davisによると、このような特性・属性の推測の前には必ず行為者自身の「意図 (intention) の帰属」が行われるはずだという。つまり、ある行為が何らかの明確な意図のもとに行われたという帰属があって初めて、その意図の生じた原因を特性・属性に求めることになる。そしてJones & Davisは、行動から意図を推測し、意図から属性へと続く帰属過程について非共通性効果の果たす役割を強調している。先のFigure 2-1-1では、X大学とY大学で「大学の名声」「立地条件」「課題の多さ」は共通しているのですが、ここからAさんがX大学を受験校に選んだ理由を推測することはできない。しかし「臨床プログラム」についてはX大学だけが持っているものであり、この非共通情報に注目することで、Aさんの属性を推測することになる。もちろんこの非共通性効果は非共通項目の数が少ないほど対応は高くなる。

### KellyのANOVAモデル

Kellyの初期の理論では、ある現象についての原因帰属を行う際、人は複数の事態を検討し、その現象が生じたときには存在し、その現象が生じないときには存在しない要因を探ることによって現象の原因を推測しているとするANOVAモデルを提唱している(Kelly, 1967)。

Kellyは「ある映画に感動する」という特定の対象に対する反応の原因を推測する過程を取り上げ、その感動が

- (1) 「実体 (entity)」 (ここでは映画そのもの) の質
- (2) 「人々 (person)」 の反応

(3) 人が実体に対して反応を示した「時(time)」

(4) 実体と人との接触の様式である「様態(modalities)」

の4側面のいずれが共変するかによって、原因の所在が決定されるとした。この時の共変関係には次の4種類があるとされている。

弁別性(distinctiveness)

ある実体に接したときのみその反応が見られ、他の実体に接したときにはそれと同じ反応が見られないこと。これは人物Xが映画Aをみたときにのみ感動し、映画A以外の映画を見たときには感動しないことが該当する。

時を通じての一貫性(consistency over time)

ある実体にいつ接触しても同じ反応が生じること。たとえば映画Aをいつみても人物Xが感動するという状況がこれに当てはまる。

様態を通じての一貫性(consistency over modality)

実体と人がどのような形態で接しても同じ反応が生じること。これは人物Xが映画Aを映画館でも、テレビで見ても同じように感動するとすると、様態を通じての一貫性が高いことになる。

合意性(consensus)

ある実体に接触した人は誰でも同じ反応を示すこと。ここでは誰がみても映画Aに感動するとするとそれは合意性が高いことになる。

上記の4つの基準をすべて満たすと、人は当該の反応の原因が実体そ



のものにあると推論する。つまり「人物Xが映画Aに感動したのは映画Aが感動できる映画だったからだ」ということになる。

ANOVAモデルは人の行動を規定する外的な要因、つまり実体の特性の推測(あるいは帰属)に重点を置いているが、共変関係の組み合わせによっては、知覚者自身の属性の推測が行われる可能性がある。例えば弁別性が低く(人物Xは映画Aを観ても映画Bを観ても感動する)、時を通じての一貫性が高く、様態を通じての一貫性が高く、合意性が低い(人物X以外の人あまり感動しない)場合には、人物Xが特に映画に感動しやすい人であるというように人物X自身の内的な特性・属性の推測が行われる。

ANOVAモデルはJones & Davis (1965)の対応推論モデルのように、選択された行動と選択されなかった行動の双方についての情報が必要であるモデルと違い、選択された行動をもとにした情報探索が行われることを前提としている点で、より日常的な推論プロセスに対応していると考えられる。しかし日常場面では、必ずしもANOVAモデルが主張するような4種の情報と、共変性に関する4条件のすべてが満たされるわけではない。それよりも我々の推測プロセスは不完全なデータに基づいた処理が行われていると考えるほうがより現実場面に近い。そこで、こうした不完全なデータをもとに行われる推論の過程を説明するモデルとしてKelly (1972)は因果スキーマモデルを提唱している。

### 因果スキーマモデル

日常場面では、ある事象を1度観察しただけでその原因に対する判断を下さなくてはならない場合が多い。例えば「人物Yが今朝会社に遅刻した」とき、周囲の人は人物Yの合意性や弁別性などに関する情報探索

を行うことによって、その原因を判断するだろうか。おそらくそうした合理的な判断をせずに、「だらしない人」「いい加減な人」といった特性・属性の推測をすることが多いだろう。これは、「遅刻する人はいい加減・だらしない人だ」ということを、これまでの経験を通して学習しているからだと考える。こうした状況における因果判断を説明するために利用される知識を、Kelly (1972) は因果スキーマ (causal schemata) モデルとして概念化している。

ANOVAモデルによると、合意性・弁別性・一貫性共に高い場合（因果パターン1）、原因は実体に、また合意性と弁別性が低く、一貫性が高い場合（因果パターン2）には、原因は人の属性に、また合意性が低く、弁別性が高く、一貫性が低い場合（因果パターン3）には環境に原因が帰属される。こうした因果のパターンを我々が経験から学習しているとすると、データが不十分なときにも次のような推論は成立することになる。例えば「合意性だけが高い」場合というのは、上記の例では因果パターン1だけが該当する。そこで人はその事象の原因を実体に求めることになる。同様に、弁別性だけが高いというデータだけの時には、人はその事象の原因を人に求めることになる。これが因果スキーマモデルの基本的な考え方になる。

## 2-2 帰属理論の問題点

対応推論モデルも、ANOVAモデルもHeider (1958) の素朴心理学 (naive psychology) の影響を受けており、人間が現実に行う帰属過程をモデル化したものというよりも、論理的な推論過程を経るとこうなるはずだという規範理論 (normative theory) であったといえるだろう (Taylor & Fiske, 1991)。その後の実証的な研究では、理論の予測と一致するかど

うかに関する膨大な研究が行われているが、その中には理論との一致が見られず、各種のエラーやバイアスがあることが報告されている。帰属理論の多くの研究は、結果に対する原因の帰属という広範な問題が取り上げられているので、属性・特性の帰属に関するエラーやバイアスにどのようなものがあるか、ということに関する整理は未だ行われていない。但し「過度の内的帰属」の問題は、特に属性帰属に関するエラーやバイアスに関するものであると考えられる。

例えば対応推論モデルによると、社会的役割を遂行しているときは、それが状況制約的なものであるから行動と属性との対応は起こらないとしているが、いったん表明された意見や態度は、例えそれが社会的役割などの制約を受けていても、過度に内的に帰属される傾向があることが報告されている (Jones & Harris, 1967; Jones, Worchel, Goethals & Grumet, 1971; Snyder & Jones, 1974; Yandrell & Insko, 1977)。こうした過度の内的帰属の現象は、人が他者の行動から特性・属性を推測する過程は、近年ではJones & DavisやKellyが主張するような、論理的な帰属プロセスを踏んでいないのではないか、という議論に発展していく。

対応推論モデルにおいても、ANOVAモデルにおいても行為者の行動の原因の帰属と、そこからその人物の特性・属性を推測することが属性帰属の中心的な過程であるという暗黙の仮定があるが、何れのモデルも、【原因の帰属】と【特性・属性の推測（属性帰属）】との関係は明確に論じられていない (外山, 1991)。

Figure 2-2-1は上記の暗黙の仮定を、外山(1991)を参考に描いたものであるが、前述のとおり、近年の研究では行動から属性・特性を推測するまでに【原因の帰属】→【属性・特性の推測】という2段階のプロセ

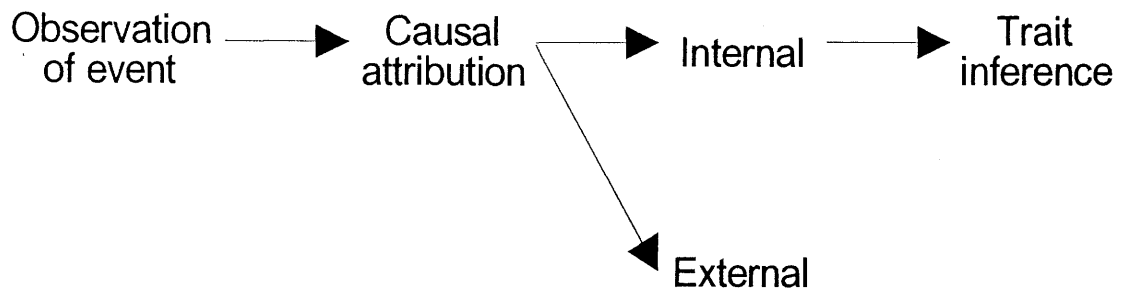


Figure 2-2-1. Implicit assumption in attributional process of disposition and trait

スを踏まないのではないかと指摘がなされている。つまり、過度の内的帰属が起こる理由として、内的帰属が行われる前に必ずしも原因の帰属が起こっているわけではないのではないかとということになる (Figure 2-2-2)。

例えば、Smith & Miller (1983) は行動を記述した幾つかの短文を提示した後に、行動の原因に関する質問や、行為者の特性に関する質問、行為者の意図などに関連する質問に「はい—いいえ」で回答させ、その反応時間を測定している。その結果、行為者の特性に関する質問への回答時間よりも、行動の原因に関する質問への回答時間の方が、有意に長いことが示されている。これは少なくとも特性・属性の推測が行動の原因帰属を媒介しないことを示す結果であると考えられるが、Hamilton (1988) などは特性・属性の推測が原因帰属に媒介されず、符号化 (encoding) の段階で自動的に起こると主張することで、原因帰属と特性・属性推測とを情報処理過程の別のプロセスであると述べている。

属性帰属と特性・属性の推測がまったく別の情報処理過程であるという Hamilton の主張はともかく、少なくとも特性・属性の推測が原因帰属を媒介とせず、Figure 2-2-2 のように行動から特性推測への直接ルートがあるのではないかと指摘は、対応推論モデルや ANOVA モデル、因果スキーマモデルのような規範モデルでは、他者の属性・特性を推測する過程を十分に説明できないことを示唆している。

以上のように、帰属理論の中では行動情報がどのように処理されているかについて概観してきた。特にここでは、行動から属性・特性がどのように推測されるのかという問題に焦点を当てて研究を整理した。その結果、行動の原因に関する帰属が行われ、原因が行為者自身の内的要因に帰属されたとき、初めて属性・特性の推測が行われるのではなく、行

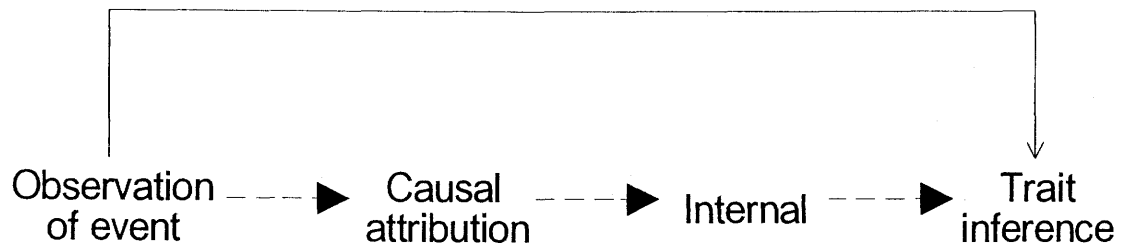


Figure 2-2-2. Direct route from behavior to trait inference

動から属性・特性の推測が直接行われているのではないかという指摘がなされるようになってきたことを報告した。またHamilton (1988) の指摘にもあるように、こうした推測は、少なくとも符号化の段階で起きているのではないかということが指摘された。しかし帰属理論の現段階では未だこうした指摘に対する回答は得られていない。

### 2-3 対人記憶 (person memory)

我々が頭の中で行っている社会的情報の処理をコンピュータに例え、情報の入力からアウトプットまでの間に、符号化、貯蔵、検索などの過程を設ける事によって、人間の内的プロセスを説明しようと試みる研究が1970年代後半から盛んに行われるようになった。こうした研究を総称して「社会的認知 (social cognition)」と呼んでいる (Taylor & Fiske, 1984)。その中で、当該人物に関する対人情報がどのように記憶内で表象されているかを明らかにすることによって、その人物に対する印象がどのように形成されているかを明らかにしようとする研究がある。これは「対人記憶 (person memory)」という呼び名で括られた研究分野である。この研究分野では「社会的スキーマ (schema)」が対人情報の処理に及ぼす効果に、研究の関心が向けられている。つまり、対人記憶研究の基本的な立場は、対人表象 (person representation) の形成過程を明らかにする構成概念として、社会的スキーマの役割を強調していると言える。そこで以下ではまず、社会的スキーマの概念を整理すると同時に、対人表象の形成過程を説明するモデルを幾つか検討し、行動から対人印象の手がかりとなる情報を、人間がどのように引き出しているのかを検討する。

### 社会的スキーマの基本的な考え方

スキーマとは「属性 (attributes) と属性間の関係を含む、概念あるいは刺激タイプに関する知識を表象した認知的構造」と定義される (Brewer & Nakamura, 1984; Fiske & Linville, 1980; Hastie, 1981; Rumelhart & Ortony, 1977; Taylor & Croker, 1981; Taylor & Fiske, 1991). さらにスキーマは「体制化された知識をもとにしたTop-down, 概念駆動型, 理論駆動型の処理を促進させる」という機能を持っていると考えられている (Ableson, 1981; Bobrow & Norman, 1975; Rumelhart & Ortony, 1977; Taylor & Fiske, 1991).

その中で、特に社会的情報の処理に関係するスキーマは社会的スキーマと呼ばれ、人スキーマ (person schema), 自己スキーマ (self schema), 役割スキーマ (role schema), 出来事スキーマ・スクリプト (event schema or script), コンテントフリースキーマ (content free schema) の5つが指摘されている (Taylor & Fiske, 1991).

人スキーマとは、ある特定の他者について、その人物の特性や目標に焦点を当てたときに得られた情報の表象を含んだスキーマである。自己スキーマは、自分自身に関する情報を表象したスキーマ、役割スキーマは、ある特定の社会的立場の中で遂行されると期待される社会的な役割に関するスキーマであり、職業に関するスキーマや人種、性別などの社会的カテゴリーに関するステレオタイプなどが該当する。出来事スキーマは、日常一般的な状況に関する典型的な一連の行動 (Schank & Ableson, 1977) などがこれに該当する。コンテントフリースキーマは、上記の4つのスキーマとは異なり、属性同志の結びつきに関するルールのスキーマであり、前節の因果スキーマ (Kelly, 1972) がこれに該当す



る。但し因果スキーマは、ある特定の内容に関する情報の表象というよりも、事象の因果関係に関するルールの体系のようなものであり、これをスキーマには含めないと主張する研究者もいる。そのためここではコンテンツフリースキーマを除く4つのスキーマを社会的スキーマに位置づけることにする。

社会的スキーマは、社会的情報の処理に関する機能を持っていると考えられている。例えばスキーマが入力情報に構造を与えたり (Hamilton, Katz, & Leire, 1980), 入力情報のうち、どの情報を符号化するかを決定したり (Cantor & Mischel, 1977; Cohen, 1981a), 入力情報では不足している情報を埋め合わせたりする (Schank & Ableson, 1977)。そして他者の行動情報を処理する場合にも、社会的スキーマの働きが機能することが多くの研究で指摘されている。そこで次節では他者情報がどのように表象されているかを明らかにしようとした研究を取り上げ、そこでは行動情報と特性がどのようなプロセスによって処理されているのかに関するモデルを検討する。

### 特性-行動クラスターモデル

このモデルの基本的な仮定は「印象形成事態では、人は他者の行動を特性概念をもとに符号化している」という点に要約できる。

Hamilton, Katz, & Leire (1980) は、刺激人物に関する15の行動を記述した短文を被験者に呈示する際、一方の被験者にはこれらの行動を記憶するように (記憶群), もう一方の被験者にはこれらの行動からその刺激人物の印象を形成するように (印象群) 教示した。妨害課題の後に行動記述文の再生を求めた結果 (a) 印象群の被験者の方が記憶群の被験者よりも行動を多く再生し, (b) 印象群で再生された行動の順序を見ると,

ある特定のパーソナリティ特性に結びつきやすい行動同志がまとまって再生される傾向が見られた，という2つの結果を報告している．印象群が記憶群よりも多くの行動を再生した理由として，印象群の被験者は刺激人物についてまとまりのある印象を形成しようとし，個別の行動を特性概念と関連づけしようとしたため，結果的にFigure 2-3-1にみられるような特性-行動クラスターを形成し，再生の際パーソナリティ特性が記憶検索の1つの手がかりとして用いられたからだと説明されている．

### 独立痕跡保持モデル

Hamiltonら(1980)の特性行動クラスターモデルは，行動情報が入力されると，それぞれの情報は特性をもとにしたクラスターが形成されることを示したが，このモデルに反する結果も報告されている．それがKlein & Loftus(1990)の独立痕跡保持モデルである．

Kelin & Loftusは確かに印象群のほうが記憶群よりも行動を多く再生するが，印象群の再生順序はHamiltonらの研究で示されたような群化が起きていないこと，先に特性語を提示してから行動情報がどの特性語に該当するかを判断させた群（カテゴリー配列群）の方が，群化が促進されていたにもかかわらず，印象群の再生量との間に有意な差が見出せなかったこと，刺激人物の行動のそれぞれが全て異なった特性と対応しているときでも印象群の方が記憶群よりも再生量が多いことなどを示して，Hamiltonらの主張する特性-行動クラスターの形成はおきず，むしろ行動と特性は1つずつ対になった形で表象されていると主張した(Figure 2-3-2)．Hamiltonらのモデルでは，特性をもとにした行動の群化が記憶を促進させたと考えられているが，Klein & Loftusらのモデルでは，個々の情報（行動）と，それに関連した特殊な情報（特性）とを結びつける

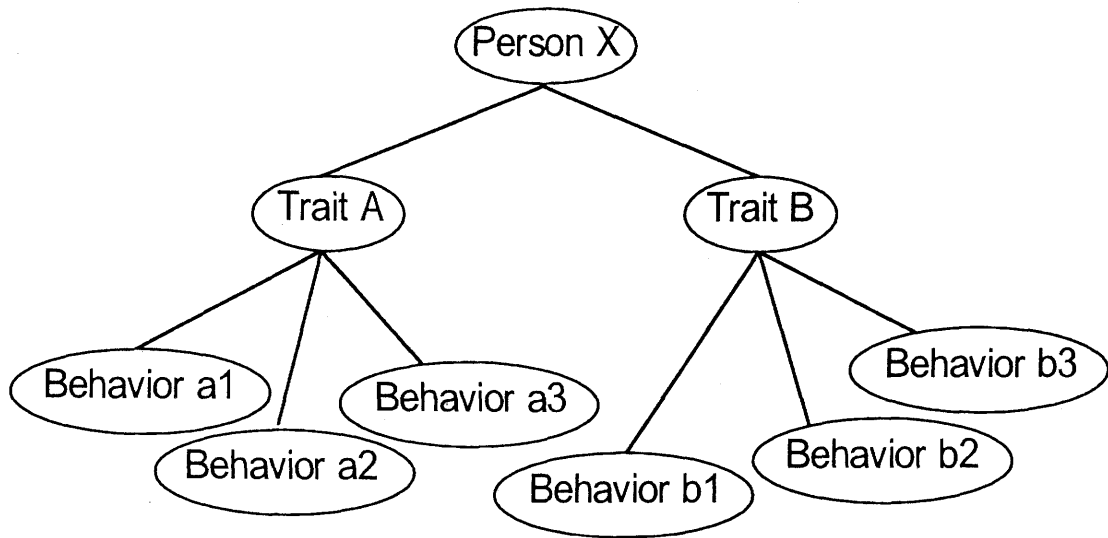


Figure 2-3-1 Network model of person representation

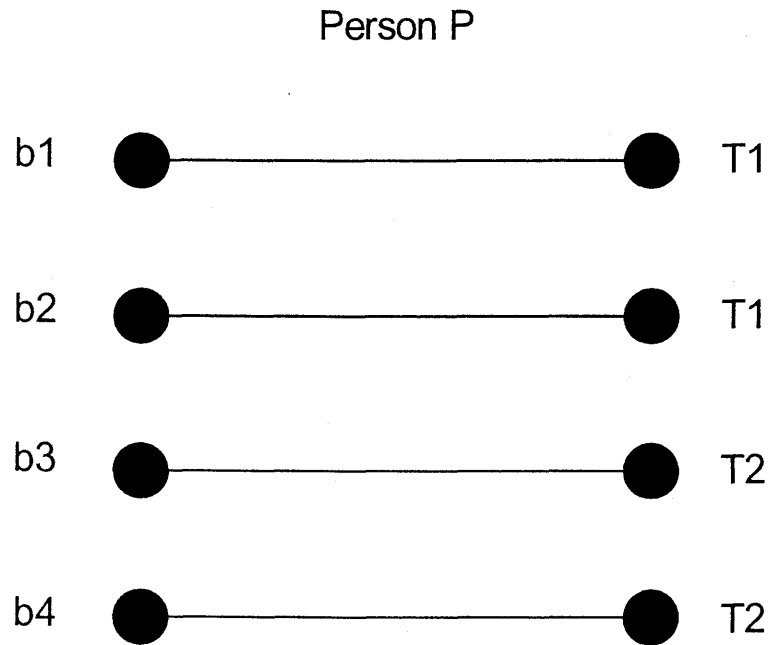


Figure 2-3-2 An independent trace storage model (cited in Klein & Loftus, 1990).  
note: Person(P) was described by two behaviors(b1 and b2) exemplifying trait T1 and two behaviors(b3 and b4) exemplifying trait T2

ことが精緻化処理を高め、表象内で強い記憶痕跡を残すので、印象群は記憶群よりも行動の再生が高まるのだと説明している。

### 連合ネットワークモデル

特性-行動クラスターモデルも、独立痕跡保持モデルも、知覚者はあらかじめターゲットに対する予備知識がなく、まさに初対面の相手に関する情報の表象モデルに焦点を当てている。しかしその一方で我々は他者に関する情報を第三者などから伝え聞いている場合もある。そうした場合には、Hastie (1980) が指摘するような連合ネットワークモデルからの説明が有効になる。

Hastie & Kumer (1979) は、刺激人物があらかじめどのような特性を有しているかを知らせた上で、行動情報を呈示した場合、特性とは一致しない行動情報の再生率が、特性と一致する行動情報の再生率よりも高くなることを報告している。Hastie (1980) は、特性に一致する行動情報よりも特性に一致しない行動情報が再生されやすい理由として、Figure 2-3-3にみられるような連合ネットワークモデルを提出し、説明を試みている。これによると、特性に一致する情報は、特性と結びつきやすいためそれ以上の処理を必要としないが、特性に一致しない情報は、いわば特性とは矛盾する情報であり、その矛盾を解消しようとして他の行動情報との積極的な関連づけが行われることにより、特性だけでなく他の情報とより多くのリンクが結ばれることになる。その結果、他の情報と結びついたリンクの数が多い情報ほど再生されやすくなると説明される。ただしHastie (1980) の連合ネットワークモデルでは、先に提示された特性自身が評価的にポジティブであったのに対して、特性に一致しない行動情報がネガティブな評価値を持っていることが知られている (Wyer &

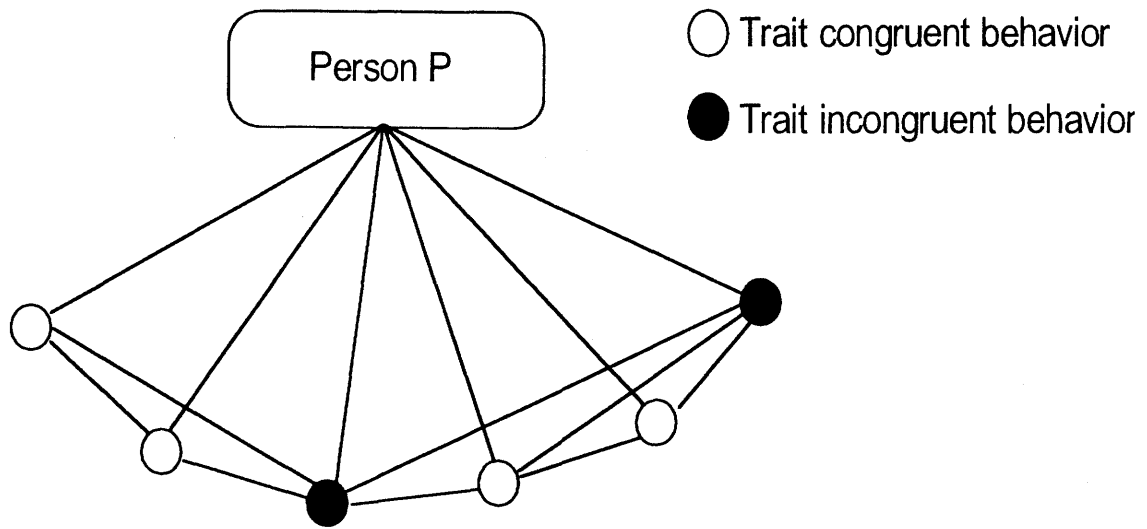


Figure 2-3-3 Associative network model (Cited in Hastie, 1980)

Gordon, 1982). そのため、特性に一致しない行動情報が再生されやすかったのは、特性の内容（「記述的」）との矛盾というよりも、「評価的」な矛盾が記憶を促進させたという報告がその後多く出され、現在では次のような2重表象モデル(Wyer & Srull, 1989; Taylor & Fiske, 1991)への変更がみられる.

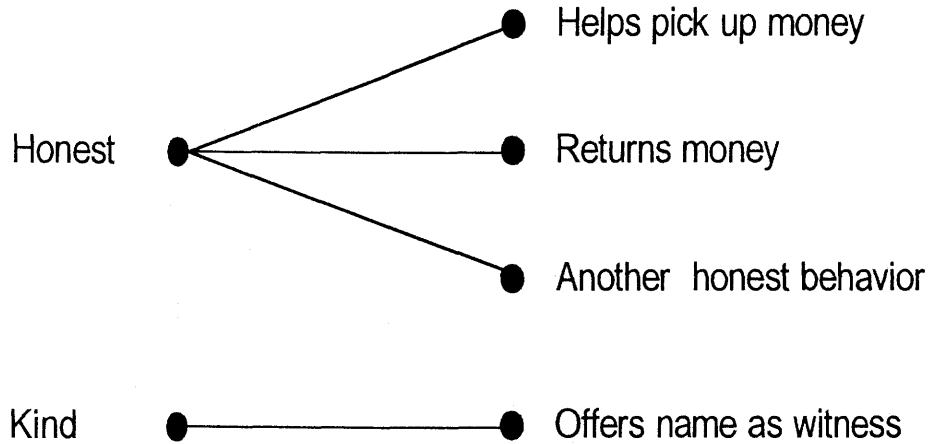
## 2重表象モデル

このモデルの特徴は、他者の行動と特性がその情報の「記述的」な側面と「評価的」な側面に関して、別々に記憶に保持され表象されるという点にある(Wyer & Srull, 1989) (Figure 2-3-4).

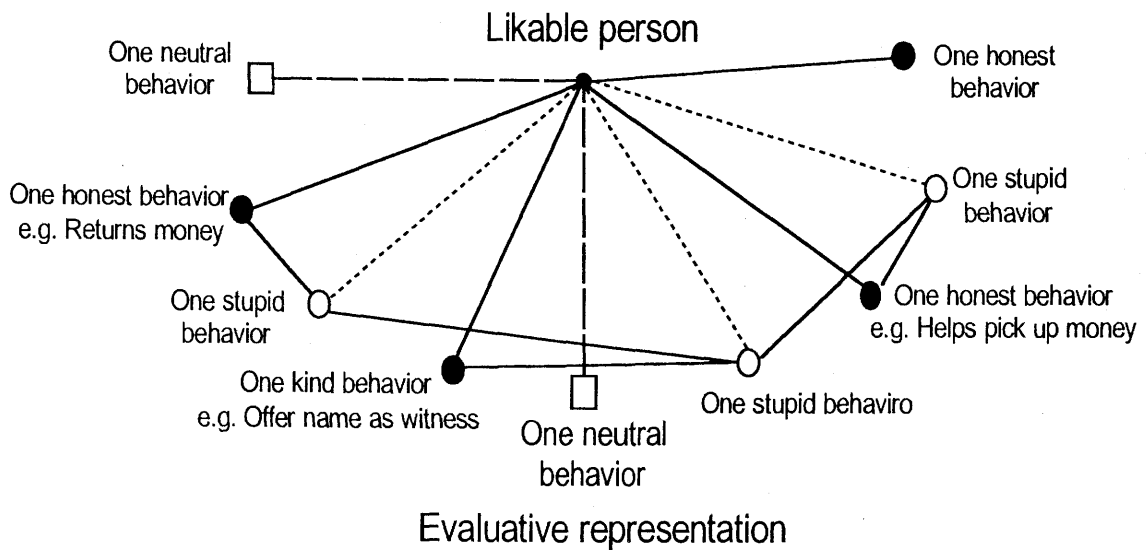
このモデルによると、知覚者は「お金を拾うのを手伝った」「お金を返した」などの他者の行動を、「正直」という特性とリンクさせて表象する。同様に、「目撃者として名乗り出る」という行動と、「親切」という特性とリンクさせて表象する。こうした特性-行動クラスターが、特性の数だけ形成される。但しここでは、特性同志のリンクは仮定しない。その理由として、Hamiltonら(1980)の研究のように印象群は記憶群よりも行動の再生量が多いが、特性の場合にはそうした傾向がみられないこと、またGordon & Wyer(1987)でも同様の結果を得ていることなどをあげている(Wyer & Srull, 1989).

このように特性をもとにした記述的な表象が形成されると同時に、知覚者は評価的な表象も形成する。まず知覚者は、初めに入力した他者情報から、その評価的な成分(positive or negative)を取り出し、それをもとに中心概念を形成する。後続情報は、最初に形成された中心概念の評価的成分との照合によって、表象に組み込まれていく。この時、後続情報が中心概念と評価的に一貫する場合には、その情報は中心概念と

- =Evaluatively consistent behaviors      ————— Strong associations
- =Evaluatively inconsistent behaviors      - - - - - Weak associations
- =Evaluatively neutral behaviors      ······· Weak associations



Trait(descriptive) representation



Evaluative representation

Figure 2-3-4 Dual representation of the person information



のリンクだけが形成される。後続情報が中心概念と評価的に一貫しない場合には、その行動は中心概念だけでなく他の情報とのリンクも形成される (Hastie, 1980)。このモデルでは中心概念と記述的に一貫している情報は、一貫していない情報よりも良く再生されると同時に、中心概念と評価的に一貫しない情報は一貫する情報よりも良く再生されると考えられるが、Wyer & Gordon (1982) ではこの事を支持する結果が得られている。

#### 2-4 対人記憶研究の問題点

対人記憶研究の中心的な研究テーマは、他者の行動情報と特性が、どのように対人表象に組み込まれていくかというものであった。しかしここでは次の2点の問題を指摘する。

第1に、行動情報が入力されると特性をもとにした、情報の符号化が行われ、対人表象に組み込まれると仮定しているが、特性がどのようなメカニズムによって行動情報と結びつけられるのかを、何れのモデルも記述していない。多くの場合、先に指摘した社会的スキーマの機能からの説明の援用を受け、例えば特性をもとにした符号化は自発的 (spontaneous) である、などの議論もみられるが (Winter & Uleman, 1984)、実証的なデータは得られていない。前節でみた属性帰属の幾つかのモデルは、この問題に積極的に取り組んでいるが、モデルとデータに整合性がみられないのが現状である。

第2に、対人記憶のほとんどの研究の典型的な実験の手続きは、被験者にある刺激人物に関する情報 (特性あるいは行動) を提示し、印象を形成させた後に、それらの情報を再生させるものであった。こうした実験刺激が、どれだけ現実の対人認知を説明しているのかに対して疑問を

抱く研究者もいる。例えばCohen (1981b) は次のような3つの問題点を指摘している。

1. 記述によって提示される情報は、ある種の視覚的情報を完全に排除してしまっている。対面状況では言語情報よりも視覚情報に依存した情報処理を行っている可能性があり、こうした場合には既有知識（例えば特性）などの影響を受けない、より正確な行動の想起があるのではないか。
2. ターゲット人物に関して記述された特性や行動は、その人物のある1側面を表現しているにすぎない。実験室外では、知覚者はデモグラフィック特性や、パーソナリティー、社会的カテゴリーなど様々な情報を対人情報として利用しているはずである。
3. 現実場面におけるターゲットの一連の行動 (stream of behavior) を構造化する時の知覚者の柔軟さ (flexibility) を、記述によって表現した行動情報では制限してしまっている可能性がある。

これらの批判は1980年代初頭のものであるにもかかわらず、未だに当てはまる批判として無視するわけにはいかないと考える。特にCohenの3番目の指摘は、対人記憶研究だけでなく、前節の帰属研究にもあてはまるものであり、また本論文が連続行動情報を研究対象として取り上げた理由の1つでもある。現実の状況を無視した「卓上の空論 (paper-and-pencil theory)」に対する批判は、現在特に盛んに論じられるようになってきた。特に記述された行動情報ではなく、他者の生の行動で

ある連続行動情報を研究の中に積極的に取り入れようとする動きは、徐々に増え始めている (Wyer & Carlston, 1994; 坂元, in press)。

## 2-5 第2章のまとめ

本章では、行動をもとに相手がどのような特性を有した人物かを明らかにする過程を説明しようと試みた対人認知研究を概観した。主にここでは、行動から他者の属性・特性がどのように推論されるのかを説明しようとした「属性帰属研究」と、行動と他者のパーソナリティ情報がどのように記憶されているのか、その構造を明らかにしようとした「対人記憶研究」をとりあげた。しかし何れの研究も、現実の対人認知事態を視点においていないことが指摘された。例えば属性帰属研究は、理論先行型の研究だったために、実際のデータとの整合性が弱いことを指摘した。また対人記憶研究では、理論とデータの整合性はあるものの、多くの研究が、主に「記述情報」をもとに整理された理論であることから、現実の対人認知とどれだけ対応しているのかが十分に検討されていないことを指摘した。

特に本章で指摘したかったことは、現実の対人認知過程を説明する時、理論先行型の研究や、記述情報のような代替刺激を用いた研究では十分な回答が得られないのではないかという点である。そこで次章では、こうした批判を考慮に入れ、より日常性の高い対人認知事態を取り上げ検証するための概念的な整理を試みる。

### 第3章 連続行動情報をもとにした

#### 対人認知研究の意義と理論的整理

本章では連続行動情報をもとにした対人認知研究の意義を論じると同時に、これまでに連続行動情報に焦点を当てた研究を取り上げ、どのようなことが説明されて来たのか、その理論的整理を行うことを目的とする。

## 第3章

---

### 連続行動情報をもとにした対人認知研究の意義と理論的整理

#### 3-1 連続行動情報を対人認知研究で取り扱う意義

これまで対人認知研究の中で連続行動を正面から取り上げ、検証を試みたものは少ない。特に対人印象の形成事態に限るならば、おそらく Cohen & Ebbesen (1979) のみであろう。しかし Cohen & Ebbesen においても、連続行動情報を印象形成事態に取り入れることの意義を積極的に論じているわけではない。そこで本章ではまず始めに、連続行動情報を対人認知研究で取り扱うことの意義を明確にしておきたい。

##### (1) 現実の対人認知事態との対応度

先の章（第2章）において、帰属理論も対人記憶研究も現実の対人認知事態との対応関係について十分な検証を行っていないのではないかと、いうことを指摘した。いずれの研究にも共通するのは、実験室あるいは理論上の問題を、現実の対人認知事態と対応させる努力を欠いていたのではないかということが考えられる。

本研究で連続行動情報を問題にする意義の1つとして、連続行動は日常場面で我々が直接接触可能な生の情報であり、より現実場面に近い対人情報を直接問題にし、知覚者の反応を検証できるという点にあると考えられる。

##### (2) 知覚的過程への視点の拡大

連続行動情報は、特性情報やカテゴリー情報に比べて具体的であると

同時に、動きを伴った情報である。こうした情報では、帰属過程における意図の所在の認知や、記憶過程における符号化や情報の体制化のような高次の認知以前に、知覚者が情報をどのように知覚しているかという、知覚的な過程に焦点を当てることができる。知覚的な過程を取り入れることについて、帰属理論研究の立場から外山(1991)は次のように述べている

「・・・帰属における知覚的(perceptual)な過程と、より高次の認知的(cognitive)な過程とを厳密に区別することは難しい。しかしあらかじめ要約された言語情報を用いた実験ではなく、現実の動的な社会的場面での帰属を考えるならば、複雑な手順をふんだ認知的推論過程も、刺激情報をまずどのように取り入れ、符号化するかということから出発するわけであるから、知覚的な側面の重要性は否定することができないだろう。」(p. 53)

この指摘は、対人認知事態における知覚的過程を検証することの重要性を端的に表現している。そして、対人認知の知覚的過程を検証する上で、連続行動情報は有益な研究材料であると考えられる。なぜなら連続行動情報は、動的で視覚的な情報であり、知覚者は情報を知覚的に処理することなしに、入力、加工することはできないと考えられるからである。

### (3) 知覚者の主体的な処理過程の強調

帰属理論では、ある事象の生起から結果までの事態をひとまとまりの情報とし、そのひとまとまりを被験者に提示して帰属判断を求めている。同様に対人記憶研究では、ある1つのセンテンス(行動情報)に、すでに何らかの特性が付与されるような対応関係がみられ、一定の形式で要

約された情報を想定している。このように帰属理論で操作された実験事態も、対人記憶研究で操作されている実験事態も現実の対人認知事態にかなりの制約をかけていることが予想される。しかし現実の対人認知場面では、あらかじめひとくくりにまとめられた情報を、その場で受け取っているとは考えにくい。そのため時系列的な変化の中から情報のまとまりを知覚者自身が主体的に構成するような処理があるのではないかと考える。そして時系列的な変化を伴う情報の中から知覚者の積極的な情報選択過程を明らかにする上で、連続行動情報を研究対象することは有益であると考えられる。

#### (4) 逐次的処理の視点の導入

連続行動が時系列的な変化の情報であるとする、知覚者は知覚された情報を、どの時点でより高度な認知的過程へと移行させていくのかという問題を検証する必要があると考える。ここでのより高度な認知的過程とは、当該人物の特徴の推測や、将来の行動の予測、その行動の原因の推測、あるいは次に自分がその人物にどのような反応をするかなどである。

こうした高度な認知過程がいつ生起するかという問題についてHastie & Pennington(1988)は【オンライン処理 (on-line processing)】と【記憶ベース処理 (memory base processing)】という2つのモデルを区別して提出している。

オンライン処理とは、情報の入力段階で当該人物に関する何らかの判断が要請されている状況で起こる処理で、刺激から得られる直接的な情報と、より高度な認知的過程を経ることによって知覚者内部で生成される情報が同時に処理され対人表象に組み込まれるモデルである。それに

対して記憶ベース処理では、情報の入力段階では刺激から得られる直接的な情報は表象へ組み込まれるが、より高度な認知的処理はここでは起こらない。そのため対人表象には刺激からの直接的な情報だけが組み込まれることになる。記憶ベースモデルでは、一端、対人表象に直接的な情報が組み込まれた後に、何らかの判断の要請があると初めて高度な認知的処理によって記憶表象からの情報検索が起こり、対人判断に必要な情報が生成されると考えられている。

こうした2つの処理モデルを直接実験的に検証する試みは帰属研究においても対人記憶研究においてもなされていない。その最大の理由は、何れの研究も、知覚者の反応をもとにしたデータからの予測を行っており、逐次的処理を直接検証することが実験パラダイム上難しいということが考えられる。しかし本論文では連続行動情報を研究対象とし、行動の入力時の処理に注目することで、知覚的な処理とより高次の認知的な処理の両方を検証することができるのではないかと考える。

但し、Hastieらの指摘するオンライン処理と記憶ベース処理を操作的に明確に区別することは難しい。またHastieらは情報の逐次的な処理の中で特性概念のような概念情報が同時に処理されることを指してオンライン処理と呼んでいるが、認知心理学やコンピュータ情報処理の分野では、情報の逐次的処理とオンライン処理をほぼ同義に用いている。そこでここでは用語の混乱を避けるために、入力される情報を、同時に何らかのかたちに変換する処理全般をさして、これを逐次的処理と呼ぶことにする。

以上のように、連続行動情報を対人認知研究に取り込む意義として(1) 現実の対人認知との対応度、(2) 知覚的過程への視点の拡大、(3) 知覚者



の主体的な処理過程の強調、(4) 逐次的処理の視点の導入の4つを指摘した。もちろんこうした視点を指摘する試みは、これまでも幾つかあったことは確かである。にもかかわらずこれまでに未だ十分な回答が得られていないことも事実であり、その意味でも、本研究で改めてこれら4点を取り上げることは対人認知研究にとって有益であると考えられる。

しかしこうした観点をもとに実証的な研究を行うにあたっては、まだもう1つ大きな壁があるように思われる。連続行動が視覚的で動的な情報であるということはこれまで指摘してきたとおりであるが、そうした動的な情報を知覚者がどのように処理しているかという、知覚者内部の問題に対する基本的な視点が必要であろう。と同時にこうした基本的な視点の問題は、実験パラダイムの整理にもつながるものである。こうした回答を得るために、本研究ではNewtsonを中心とする行動知覚理論を概観し、本研究にどういった観点を提供してくれるのかを検討したい。

### 3-2 行動知覚理論の整理

連続行動情報の処理プロセスはある意味で言語理解のプロセス、特に聴覚情報の処理プロセスと似ているかもしれない。対人情報を聴覚的に伝達する場合、情報は空気の振動を通して伝達される。この時知覚者はそれらの聴覚的な情報を意味単位の情報にチャンキング(Chunking)して理解していると考えられる。意味として理解する場合の最も基本的な単位は「単語(word)」であるだろう。こうした基本的な情報単位は相互に組織化され、より高次の情報単位(節、文章、段落)へと構成されていく。

連続行動情報の処理過程を、上記の聴覚情報の理解過程の観点から捉え、興味深い実験パラダイムを用いることによって検証しようと試みた

ものに、行動知覚理論 (Newtson, 1976) がある。Newtsonは「行動分割課題」を用いて被験者に行動を分割させる事によって、行動知覚のメカニズムの理論化を試みている (Newtson, 1973; Newtson, Hairfield, Bloomingdale, and Cutino, 1987)。そこでまずNewtsonの研究パラダイムである行動分割課題について概観する。

### 行動分割課題

Newtson (1973) は連続行動を観察者がどのように処理しているのかを明らかにするために、下記のような手続きと実験教示を用いて被験者に行動の分割をさせている (Newtson, 1973, p. 30, l. 23より引用)。

「これからあなたに、別の実験に参加した1人の被験者に関する5分間のビデオをお見せします。ここでは他者の行動を分類するとき人間が利用するユニットに興味があります。つまりこれは、人は他者の行動を様々なレベルで分割することができることを意味しているのです。例えば私が振り向いて、(ドアに向かって) 歩いて、ドアを閉めて、振り向いて、歩いて戻ってきたとします(実験者が実際にこの動作を遂行する)。これらそれぞれの出来事は別々の出来事かもしれません。あるいはこれらは「ドアを閉める」のような1つの大きなユニットに分類されるかもしれません。」

中略

被験者は「あなたの判断で、1つのユニットが終わり、別のユニットが始まったら」イベントレコーダーのボタンを押すことによってユニットの判断を記録するように告げられた。(筆者訳)

被験者はこのような実験操作を受け、そのあと、様々な従属変数の測定を受けることになる。この教示でもわかるように、被験者はターゲットの行動を1つ1つの意味ある行動の単位に分割するよう要請される。一般には、被験者に行動の区切れでボタンを押させることによって、連続行動の処理の仕方を検証しようとしたNewtsonの手法を「ボタン押し

課題 (button pressing task)」と呼んでいる。ただし本研究では、被験者に行動を分割させているという点に着目し、またこれ以後の本書の議論が、観察者にボタンを押させるということに注目するのではなく、行動を分割させるということに焦点を置くことになるため、ここでは便宜上「行動分割課題」と呼ぶことにする。

行動分割課題によって得られるデータは大きく次の3つの特徴がある (Newtson, 1976)。これら3つの指標によって表現されるものが Newtsonが仮定する連続行動の仮説的な構造であると言い換えることもできるだろう (Figure 3-2-1)。

まず1つめはボタンが押されてから次のボタンが押されるまでの間隔で、これをNewtsonはユニット (unit) と呼んでいる。ユニットは知覚された1つの行為 (action) の出現時間を表している。

2つめはブレークポイント (break point) と呼ばれるもので、観察者がボタンを押した部分、つまり1つの行為と次に出現する行為の境界を表している。

3つめはノンブレークポイント (nonbreak point) と呼ばれるもので、これは1つの行為の途中で、行動の分割点とはならない箇所を指している。Figure 3-2-1ではノンブレークポイントは示していないが、ユニット内でブレークポイントには該当しない部分と考えればよいだろう。ただしノンブレークポイントは仮設的に設定することはさほど難しくないが、実験的にデータ化された形で表現するのは難しい。多くの場合、Newtsonらは複数の観察者のボタン押しデータをもとに、相対的にボタン押しの対象とならない箇所をさして、これをノンブレークポイントと呼んでいる。

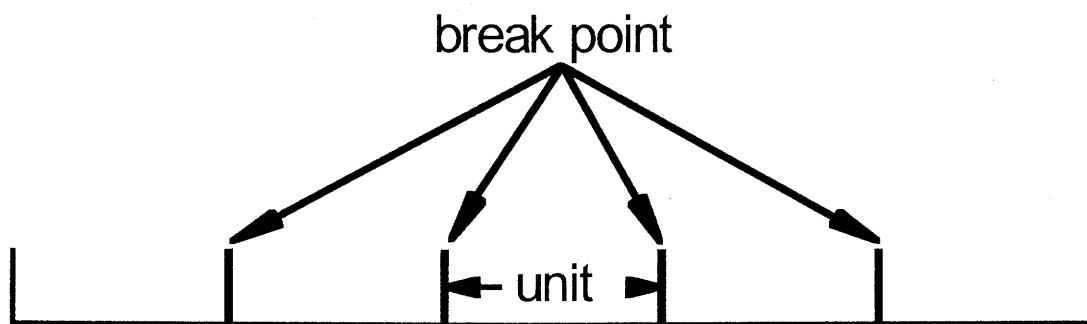


Figure 3-2-1. Structure of ongoing behavior of others

## 行動知覚理論

こうした実験パラダイムをもとに、Newtson (1976) は人が他者の行動を知覚するメカニズムを理論化している。特にNewtsonの行動知覚理論は、以下の3つの観点から整理することが可能である(詳細は Ebbesen, 1980)。

まず第1に、行動知覚理論の最も中心的な論点として、知覚者の連続行動の処理は受動的ではなく、主体的・積極的な情報の選択と構成の過程だということが挙げられる。こうした背景には、Newtson以前の対人認知研究が、人間の認知活動の主体的・積極的な処理を見過ごし、受動的な処理を強調していたことに対する批判も含まれていると考えられる(Newtson, 1973)。

Jones & Davisの対応推論モデルでは、行為の結果を知覚者が受け取り、そこからその行為の意図を推測するという過程については説明しているが、その行為の結果に至るまでに、知覚者が行っているだろう推論過程を軽視しているとNewtsonは指摘している。例えば、1人の男性が椅子を離れて、部屋を横切り、ドアを閉めると、雑音が無くなったとする。こうした場合、対応推論モデルでは、雑音が無くなったという結果から、その男性には雑音を遮りたいという意図があったと説明する。このモデルに対してNewtsonは、例えば男が椅子から立ち上がったとき、知覚者はドアに向かって歩くのか、それとも窓に向かって歩くのかなどの予測をしているはずであり、また男がドアを閉めるときには、激しくしめるのか、それともゆっくりとしめるのかを予測しているだろうと考え、Jones & Davisの対応推論モデルや、Kelly (1967) のANOVAモデルなどに反論している。対応推論モデルも、ANOVAモデルも行為の結果を知覚者が受け取ることによって初めて推論が発生すると仮定されているが、

Newtsonは、行為の途中でも、知覚者は積極的に行為者の次の行為を予想しているはずであり、そこには、知覚者が情報を主体的に受け取ろうとする処理があるはずだと述べてる。

第2に、観察者は一連の行動の流れを1つ1つの行為 (action) に分割し、そこから行為の意味を推論しているとNewtsonは仮定している。この仮定はHeider (1958) の因果帰属に対する視点から端を発したものであり、Heider自身は他者の属性の帰属を次のように捉えている (Heider, 1958, pp. 33-34)。

$p$ は行動に対する一貫性と意味を付与する心理的実体を遠刺激から知覚する。つまり  $p$  の反応は顕在的な行動から直接導かれるものではなく、その内部にある意味から導かれるのである。(中略) 一般に  $o$  に対する  $p$  の知覚は  $o$  の心理的気質的特徴に調和したものであり、こうした特徴に媒介する手がかりに調和したものではないのである。(筆者訳)

Heiderは、ある1つの行為に対する知覚者の反応は、行為そのものに対する反応ではなく、行為の意味への反応だということを強調している。そしてNewtsonは、行為の意味を推測するプロセスが帰属プロセスそのものであり、因果帰属は行動の幾つかのレベルから生じることが可能であると考えている。例えばそれが巨視的な視点から行為を観察する場合もあれば、微視的な視点からの行為の観察によることもあるとされている。そして行動から知覚される情報は、行為の終わりが次の行為の始まりとなった、時間的に重複しない情報形態をとっていると仮定されている。巨視的な視点から行動を観察するか、微視的な視点から行動を観察するかは観察者の構えと行動の内容によって違ってくる。

第3にある1つの行為は、その行為が終わって、次の新しい行為が始まるまではその行為の内容は分からないだろうとNewtsonは述べている。

従って1つの行為から次の行為への転移 (transition) 点が、それ以前の行為の性質を観察者に知らせるのだと考えられているようである。つまり行動分割課題に見られるブレイクポイントが、それ以前に生起していた行為の定義情報を含んでいるのである。しかしこうした仮定は Newtonが1976年に論文を発表した時点から、多少論点が変化し、後にはブレイクポイントは先に生起した行為の定義点であるという論点は薄れ、ブレイクポイントは観察者がユニットを構築し解釈するために必要となる情報を含んだ点、すなわち、1つのユニットの定義情報点 (defining point) であるという点を強調するようになった (Newton, Rinder, Miller, & LaCross, 1978)。

Newtonの指摘した上記の3つの基本的な仮定をもとに、行動分割課題を用いた幾つかの研究が行われている。そこで次に連続行動の処理を検証しようと試みた幾つかの研究を紹介し、連続行動情報を扱った研究でこれまでに明らかにされていることを概観、整理する。

### 行動の分割が印象評定に与える影響

行動分割課題を初めて実験的に実施し、連続行動の処理メカニズムを明らかにしようとしたのは Newton (1973) の研究である。この実験では、観察者の構えによって連続行動の分割の仕方が異なり、その結果、行為者に対する印象が異なってくるのではないかとということ調べた。彼は、連続行動から意味的に解釈できる範囲で行動をできるだけ大きく分割するように教示した群 (大ユニット群) と、反対に行動をできるだけ小さく分割するよう教示した群 (小ユニット群) の2群を操作した。

1人の男性 (Dave) の行動を、約5分間のビデオに収録したものを被験者に見せ、その後、印象評定とその評定への確信度を求める質問を実施し

た。

実験の結果、小ユニット群の被験者は、大ユニット群の被験者よりもボタンを押す回数が多かった。さらに小ユニット群の被験者のほうが印象評定の確信度が高く、また印象評定項目のうち社会性次元の評定と知性次元の評定の相関を見ると、大ユニット群の方が小ユニット群よりも次元間の相関が高かった。従って小ユニット群の方が2次元がより直交し、刺激人物について形成された印象が分化していたとされている。

行動を多く分割した方が、印象評定への確信度が増した理由として、Newtson (1973) は、入力された情報量の問題を挙げている。すなわち、行動を多く分割した方が、観察者が取り入れる情報が多くなるわけであり、そのぶん印象評定の際、印象判断の手がかりとなる材料を多く持っていることになると考えられる。そのため、印象判断の材料となる情報をたくさん入力した小ユニット群の方が、大ユニット群よりも印象判断の確信度が増したのであろうとした。印象判断が分化した理由についても同様の説明を行っている。Newtsonの実験では社会性次元と知性次元の相関が小ユニット群の方が低かったが、一般的にこの2次元は社会的望ましさ (social desirability) という1つの上位次元に含まれることが報告されている (林, 1976)。にもかかわらず小ユニット群でこの2次元の相関が低かったということは、情報を多く入力した結果、社会性次元に関連する情報と、知性次元に関連する情報を個別の手がかりとして利用することが可能だったからだと言われている。

#### 行動分割が記憶に与える影響

先の印象評定の結果から、行動を多く分割するということはそれだけ行為者の情報を多く入力していることが予想できるだろう。Lassiter,



Stone, & Rogers (1987)はこの点を問題にし、行動分割数が多くなると行動の記憶量が増加することを検証した。

まず、実験1ではNewtsonと同じように大ユニット群と小ユニット群の2つの実験条件を操作し、ビデオ観察後に9項目の多枝選択法による行動の再認課題を実施している。同様に実験3では行動の自由再生課題を実施している。両実験とも小ユニット群の方が記憶成績が良かったのに加えて、実験3ではパス解析を用いて、ユニット化教示、ボタン押し回数、再生成績の3者のパス係数を算出している。それによると、行動を大きく分割するか、小さく分割するかという教示と行動再生量との間には有意なパス係数は見られなかったのに対して、教示からボタン押し回数へ、またボタン押し回数から行動再生量への有意なパス係数が見られた。

小ユニット群の方が再認成績が良かったということは、行動を細かく分割しながら観察する方が、行動をより正確に記憶しているということを示していると考えられる。同時に再生成績がよかったということは、それだけ多くの行動を符号化していたと考えられる。つまり、行動を細かく分割しながら観察するほうが、行動の記憶が促進されるということがLassiterらによって示唆されている。

### ブレイクポイントの記憶の残り易さ

行動をできるだけ細かく分割すれば、行動の記憶が促進されるというLassiterらの結果は一見もっともであるが、この結果は行動をできるだけ分割すればするほど行動は記憶されるという逆説的な結果を導きかねない。しかし人間の情報処理容量には限界があると指摘する研究者もいるように(Kahneman, 1973; Norman & Bobrow, 1975など)、単に行動

を細分化して知覚するほうが、行動の記憶が促進されるという議論を受け入れることはできないだろう。Lassiterらの研究ではこうした問題には触れていないが、それ以前の研究において行動を細分化しながら知覚すると、行動の詳細情報の記憶が増すことをブレイクポイントに存在する情報の性質から論じた研究がある。例えば Newton & Engquist (1976) はブレイクポイントの方がノンブレイクポイントよりも行動の解釈に必要な情報が含まれており、また記憶されやすいだろうということを、3つの実験によって示している。

第1実験では被験者は連続フィルム内からフレームの削除部分を示すように求められた。フィルムの中にはブレイクポイントとノンブレイクポイントが削除されており、削除されたフィルムの長さは1/6から1/2秒の間隔で異なっていた。フィルムは切りとられた後、またつなぎ合わせられていたので区切れ（ブレイク）は出てこない。結果はブレイクポイントで切りとられたものをノンブレイクポイントで切りとられたものよりも正確に指摘した。さらに、削除されたセグメントの長さが長くなるほどブレイクポイントでの削除部分の発見は正確になり、1/2秒では78%の被験者が正答した。それに対してノンブレイクポイントでの削除部分の発見は長さにかかわらず平均して35%であった。

実験2では、3組の連続的なブレイクポイントとノンブレイクポイントのスライドが正確な順序と正確でない順序で被験者に提示され、被験者は (a) 提示されたスライドを記述し、(b) 提示されたスライドの順序を判断し、(c) 示されたスライドが分かりやすい行為かあるいはわかりにくい行為かを評定させられた。ブレイクポイントから抽出されたスライドはノンブレイクポイントから抽出されたスライドよりも有意に正確な記述がなされ、またブレイクポイントの順序判断は80%の正確さであった。

のに対して、ノンブレイクポイントでの順序判断は42%の正確さであった。そして、ブレイクポイントに関連する3組のスライドはノンブレイクポイントの3組のスライドよりもより分かりやすいと評定された。事実、ブレイクポイントの行為は連続行動内でより分かりやすく記述される行為であった。このことからブレイクポイントが行為の解釈に強く関連していた一方、ノンブレイクポイントは行為の解釈とは関連していないことが示された。

第3実験では、被験者は一連の短いフィルムを見せられ、ブレイクポイントとノンブレイクポイントの再認テストがなされた。半分の被験者にはフィルムを見ながらブレイクポイントを確認させ、残り半分の被験者にはただ単にフィルムを見せた。その結果ブレイクポイントはノンブレイクポイントよりも正確に再認され、ブレイクポイントを確認しながら見せた被験者と、ただ単にフィルムを見た被験者の間には有意な差はなかった。

以上の結果を先のLassiter, et al. (1988)の結果と併せて考えると、行動を多く分割するほど行動が記憶に残りやすくなるのは、ブレイクポイントに記憶に残りやすい情報が含まれているからだということが指摘できるだろう。

### 行動知覚に与えるスキーマの影響

Markus, Smith & Moreland (1985)では、行動分割課題を従属変数にして、スキーマが行動知覚に与える影響を検証している。ここで用いたのは、男性性に関する自己スキーマである。

実験1では初めに男性的な自己スキーマに当てはまるスキーマ保有群(26人)と、男性的な自己スキーマを持っていないスキーマ非保有群

(24人) (何れも男性) を500人の大学生の中から選択し、男性性スキーマに関連した情報を取り込んだスキーマ関連ビデオと、男性性スキーマの入っていないスキーマ無関連ビデオをこれらの被験者に視聴させ、行動分割課題を実施した。行動分割課題の教示では、ターゲットの行動を被験者の判断で自由に分割するよう教示している。またビデオ視聴後に印象評定課題と行動の再生課題および、ターゲットと自己との類似性の評定を実施した。分析の結果スキーマ無関連ビデオではスキーマ保有群とスキーマ非保有群の行動分割数に有意な差はみられなかったが、スキーマ関連ビデオではスキーマ非保有群の方が行動分割数が多いという結果がみられた。他の従属変数ではスキーマ保有群の方がスキーマ関連ビデオの刺激人物を男性的であるとみなしていた。行動再生量には2群に有意な差はみられなかった。スキーマ保有者の方がターゲットが自分と類似していると評定したなどの結果が見いだされている。

実験1では被験者に行動分割を自由にやらせているが、第2実験では実験1と同じように行動を自由に分割させる群（非教示群：15人がスキーマ保有者・15人がスキーマ非保有者）と、行動をより詳細に観察するよう要請される群（詳細観察群：15人がスキーマ保有者・15人がスキーマ非保有者）とターゲットの印象を形成するよう教示される群（印象群：5人がスキーマ保有者・5人がスキーマ非保有者）の合計3条件を設定しスキーマ関連ビデオを視聴させ行動分割課題を実施した。

分析の結果、スキーマ非保有者は3条件とも行動分割数に有意な差はみられなかったが、スキーマ保有者では詳細観察群が行動を最も多く分割し、非教示群と印象群の間には有意な差は認められなかった。

こうした理由としてMarkusら(1985)は、ある領域に特定のスキーマを持っているということは、そのスキーマに関連する情報を、様々な情報

単位から知覚することのできる、情報処理のエキスパートなのだと述べている。このことはLassiterら(1988)の結果に見られるように、行動を多く分割するほうが記憶が促進されるだろうとする知見と併せて考えるならば、ある領域に特定のスキーマを持った観察者は、そうしたスキーマを持たない観察者よりも、スキーマに関連する行動から、より多くの情報を主体的に入力し処理することが出来ることを示していると考えられる。

### 処理目標が行動知覚に与える影響

Cohen & Ebbesen(1979)は連続行動の知覚の仕方が、知覚者の処理目標によってどのように変わってくるのかということを検討している。

ここではHamilton, et al(1980)と同様の手続きを用いて、印象群と記憶群を設定し、この2群の被験者にビデオを視聴させ、ビデオに登場するターゲットの行動を分割するように教示した。行動分割課題の一般的な説明の後、各群の被験者は具体的に次のような教示を受けている。

「我々はあなたがこれから行動を記憶するとき(印象を形成するとき)どのようにして情報を得ているのかに関心があります。そこであなたには行動を思い出すときに(印象を形成するときに)最も助けになる(helpful)場所で行動を分割してユニットあるいはチャンクを作ってほしいのです」

ビデオ観察後被験者は行動の再認課題とターゲットに対する印象評定課題を求められた。

その結果、印象群は記憶群より行動分割回数が少なかったこと、再認課題の成績は記憶群の方が高かったこと、印象群では暗黙の性格観に沿った印象評定パターンがみられたが、記憶群ではそうした傾向がみられな

かったことを報告している。

こうした一連の結果に対して、Cohen & Ebbesen (1979) は、各処理目標下で活性化されたスキーマの働きを指摘している。例えば記憶群では出来事スキーマあるいはスクリプトなどの既有知識が活性化したことによって、行動の再認成績が高められたこと、また印象群では印象形成に関連した暗黙の性格観スキーマが活性化したため、安定した印象評定パターンが得られたのだと説明している。

### 3-3 理論の整理と対人認知研究における位置づけ

以上のように、行動分割課題とその理論的支柱となる行動知覚理論について概観した。行動知覚研究によってこれまでに指摘された点を整理すると次のようになる。

- 1) 知覚者は連続行動を1つ1つの意味ある行動に分割し知覚している。
- 2) 行動分割課題はこうした知覚的過程を検証する上で説明力がある。
- 3) ブレークポイントは連続行動の記憶や行為者の印象形成に影響を与えている。
- 4) 連続行動の知覚的過程には、知覚者が処理の地点で活性化させているスキーマの影響などがある。
- 5) 行動知覚理論は行動の知覚の側面を強調したものであるが、印象形成事態のような高次の処理目標を持ったときの知覚的過程を説明した研究が幾つかみられた。

上記の5点は連続行動情報を対人認知研究に取り込むときに次のことを示唆していると考えられる。

- ・第1点目の指摘は連続行動に対する知覚者自身の積極的な処理を示唆するものであり、「知覚者の主体的・積極的な処理」の観点を検証することができる。
- ・第2点目は知覚者の知覚的な側面を検証する上で、行動分割課題のような従属変数が有効であることを示すものである。
- ・第3点目は行動の知覚的な処理と同時に、より高次の認知的処理が働いていることを示唆するものであり、連続行動情報の逐次的処理の中にある、知覚的過程と認知的過程を同時に検証できる可能性を示唆している。
- ・第4点目はスキーマ概念を連続行動の研究に取り入れることの可能性を示唆するものである。
- ・第5点目は、行動知覚理論の視点を印象形成事態における連続行動情報の研究に取り込めることを示唆するものである。

### 3-4 第3章のまとめ

本章では、連続行動情報を対人認知研究に取り入れる意義を指摘すると同時に、連続行動情報を対人認知研究に取り込むための概念的な整理を行った。これをもとに、第2部以降では実証的な研究を行うことになるが、行動知覚理論の視点をそのまま実証的な研究に取り入れるには、さらにもう1段階の概念的な整理が必要なように思われる。

そこで実証研究にはいる第4章では、はじめに行動知覚理論を対人認知研究に取り込む上での問題点を指摘し、その問題点に従って検証を進めていくことにする。

---

## 第2部

### 連続行動情報の処理プロセスの明確化

---



#### 第4章 印象形成の手がかりとなる情報の取り込み方

第3章において、Newtsonを中心とする行動知覚研究と、その中で従属変数として利用されている行動分割課題に関する概略を見てきた。その結果、行動知覚理論の観点を本研究に持ち込むことの有効性が示唆された。これをもとに本章では、連続行動の知覚的過程に関する実証的な検討を行う。特にここでは、知覚者が連続行動から印象形成の手がかりとなる情報をどのように取り込んでいるのかという点を中心に検討する。

## 第4章

---

### 印象形成の手がかりとなる情報の取り込み方

#### 4-1 問題の所在の明確化

Cohen & Ebbesen (1979) は、知覚者が行動を観察する際に持っている処理目標によって、連続行動を観察中に知覚者が形成するユニットの数やブレイクポイントが変わってくることを示した。具体的には他者の印象を形成する事態（印象群）で行動を観察させた方が、他者の行動を記憶する事態（記憶群）で行動を観察させるより、ユニットの数が少なく、ユニットが大きい事が示されていた。これはNewtson (1973) のように、行動を細かく分割するほうが、行為者の印象評定に対する確信度が増したり、印象の内容が分化することと対立していると考えられる。この理由として、Newtson (1973) は、行動を多く分割するほうがそれだけ多くの情報を入力することができたからであると述べているが、このこととCohen & Ebbesenの結果とを整合させるためには、この両者の研究で示されているユニットの概念をより明確にする必要があるだろう。

Cohen & Ebbesen (1979) は、印象群の方が記憶群に比べて大きなユニットを用いて情報の判断を行っていると述べているが、なぜ印象群の方が大きなユニットになるのか、またその大きなユニットが1単位の情報だけから構成されていると考えて良いのか、ということについては明確な議論をしていない。1つの行為と次の行為の境界でボタンを押させるという方法でユニットの分割点を測定すれば、ボタンを押す回数が少なければ必然的にユニットの大きさは大きくなる。しかし、ブレイクポイントから次のブレイクポイントまでが、単一のユニットとしてまとめられて処理されていると一概に考えることはできない。なぜなら時系列的に

変化する情報は目立つ情報と目立たない情報が交互に出現する形で構成されており、目立たない情報は他者判断の手がかりとして用いられていない可能性があるからである (McArthur, 1980)。連続行動は時系列的に変化する情報の代表であり、他者判断に有効な情報だけから構成されているのではなく、印象形成に関連する行動と関連しない行動が交互に出現している可能性があるといえる。そしてCohen & Ebbesen (1979) の印象群が分割した単一のユニットの中にも、印象形成に関連する行動と関連しない行動が同時に含まれている可能性を否定できない。

Newtson (1973) の研究では、行動を多く分割した結果、印象判断の材料となる情報が多く入力されたから印象評定に確信度が持てたり、印象が分化したと考えられているが、Cohen & Ebbesen (1979) の印象群は、連続行動から情報を選択的に知覚する時点で、行為者の印象を形成する上で手がかりとなる情報を主体的に取り込んでおり、この時取り込まれた情報は、連続行動の中に常に出現しているのではなく、ある特定の時間帯にのみ出現したためにボタン押し回数が少なかったのではないかとということが考えられる。つまりNewtsonの研究では知覚者が行動を分割するという点に焦点を当てていたが、Cohen & Ebbesenの研究では、単に行動を分割するというだけではなく、知覚者が観察目標に必要な情報を選択的に処理していたのではないかと考えられる。

上記の点を確認するためには、これまでのようにブレイクポイントでボタンを押させるという方法を用いているのでは適切な回答は得られないだろう。事実Cohen (1981a) 及びEbbesen (1980) も、行動分割課題は処理目標に関連する行動が出現したときの知覚者の反応を測定することはできるが、処理目標に関連しない行動を知覚者がどのように処理しているかということは明らかにしていないと自ら指摘している。そのため連

続行動を処理する場面で、処理目標に関連する行動と関連しない行動を知覚者に区別させ、関連する行動だけを選択的に報告させる方法を検討する必要がある。

その方法の1つとして、本研究では、これまでの行動分割課題のように新しい行動が出現するたびにボタンを押すという方法に代えて、1つの行動が出現したらボタンを押す、その行動が出現している間はボタンを押し続け、その行動が終わったらボタンを離すという方法が有効であると考えた。この方法を用いることで、他者判断の際に手がかりとして用いている行動とそうでない行動が区別でき、処理目標に関連してどの行動を知覚者が選択しているかを示すことが出来ると考えた。このように処理目標の有効な手がかりとなっている行動を知覚者が選択することをここでは特に「抽出(extraction)」と呼び、以後こうした行動抽出を、ボタン押し反応を用いて行うことを「行動抽出課題 (behavior extraction task)」と呼ぶことにする (Figure 4-1-1)。

そこで本章では、知覚者が処理目標に沿った情報を連続行動から選択的に抽出しているのではないかという「行動抽出」の点から、Cohen & Ebbesen (1979) の研究を追試し基礎的なデータを提出することから始める。

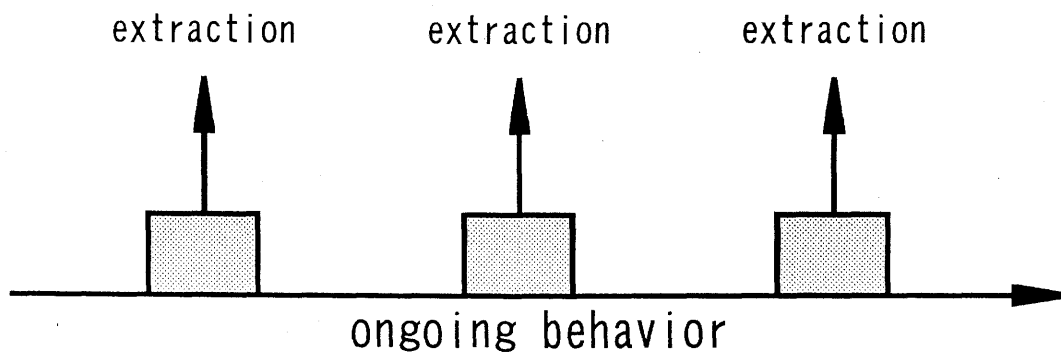


Figure 4-1-1. Behavior extraction

4-2 連続行動の観察場面における処理目標の効果(研究1)<sup>2)</sup>

## 目 的

研究1では行動抽出に関して次の点を中心に検討を行う。

まず行動抽出回数はCohen & Ebbesen(1979)同様, 記憶群の方が印象群よりも多いことが予想される。なぜならば, Cohen & Ebbesenの行動分割課題も本章の行動抽出課題も処理目標に関連した特徴への反応という点では同一の知覚的処理であると考えられるからである。一方抽出される1ユニットの大きさはここでは明確に予測することはできない。なぜなら, 行動抽出課題では処理目標に関連した行動の時系列的な変化の終点の反応も追加されているが, Cohen & Ebbesenの行動分割課題では知覚者は行動の終点を意図的に判断するような要請は受けていない。従ってNewtsonの指摘するように1つの行動の始まりから次の行動の始まりまでを1つの情報単位と考えることが妥当であるならば, 行動抽出課題でもCohen & Ebbesenの結果と一致してくるはずであるが, 抽出対象となる行動をNewtsonの指摘するユニットと同一と考えることはここでは未だ早急であろう。そのためCohen & Ebbesenが示すように, はたして印象群の方が記憶群よりも抽出する1単位の行動が大きいのかどうかという点を中心に検討する。

次に連続行動から抽出される行動が処理目標によって異なってくるとすると, 抽出された行動から, 知覚者によって解釈され, 人物表象に組み込まれる情報にも違いが生じることが予想される。Lassiter et al. (1988)の研究では, あらかじめ行動を大きく分割するか小さく分割

<sup>2)</sup> 宮本聡介・山本真理子 1994 連続行動の観察場面における観察目標の効果 心理学研究, 65, 371-376.

宮本聡介 1991 連続行動の観察場面における観察目標の効果 -印象形成事態と記憶事態の比較- 日本心理学会第56回大会発表論文集, p. 230.

するかを教示しておく、行動を分割する量と再生される行動内容の量との間に、有意な正の相関があることが示されていた。またCohen & Ebbesen (1979)の研究では、記憶群の方が行動を正確に記憶しているが、印象群では暗黙の性格観に沿った印象を形成するなど、処理目標によって連続行動から得る情報の処理内容に違いがあることが示唆されている。そこで本研究では処理目標によって連続行動から得る情報の量や内容の違いについても併せて検討する。

## 方 法

**刺激材料** 1人の男子大学生が大学構内でとった行動を各場面約30秒のビデオに収めたものを合計20シーン作成し実験刺激とした。これは4人の実験者が事前にシーン作成について協議し、あらかじめ想定された約40のシーンの中から、印象形成の手がかりとなる情報が散在すること、極端に目立つ行動でないこと、知覚者にとって不自然だと思われる行動にならないことを配慮して、最終的に20のシーンを選択した。20シーンの具体的な内容はTable 4-2-1に示す。

1つのシーンの終わりから次のシーンの開始までの間には約5秒間のブランクを挿入し、それぞれの場面が時間的に連続していないことが被験者にわかるようにした。

**被験者** 大学生56名を印象群と記憶群にランダムに割り当てた。但し記録装置の誤作動により正確に記録されなかった7名（印象群2名、記憶群5名）の被験者を分析から除外し、印象群26名、記憶群23名を分析の対象とした。

**実験条件と教示** 本研究では印象群と記憶群という2つの実験条件を設定した。印象群と記憶群への教示の概略は以下に示す通りである。

Table 4-2-1. Twenty video clips used in study 1

Scene No	Situation
1	本屋で1冊の雑誌を買い、お金を払っておつりをもらいそれを確認する
2	教室に入り、窓を開ける
3	書籍部で専門書を読む
4	講義が終わり、黒板を消して、電気を消して退出する
5	階段からおりてきて、自転車に自分の荷物を入れて乗る
6	教室に入り、椅子に座ってバッグから財布を出して、また教室を出ていく
7	友人の荷物を自分の自転車の籠に入れて2人で一緒に歩いていく
8	エレベータに乗り、ドアを閉めるが、かけ込んできた人のためにドアを再び開ける
9	3人の女学生に挨拶をして、短い時間立ち話をして歩いていく
10	見知らぬ人の倒れていた自転車を起こしてから、建物の中に入っていく
11	キャッシュコーナーで自分の順番がなかなかまわってこないでいらいらした素振りを見せる
12	食堂で食事をしているとき、友人がソースを探し始めたので、とってくる
13	空き缶を遠くからごみ箱に投げ入れる。入らないがそのまま歩いていく。
14	電話がかかってきたので、電話に出てメモを取る
15	食堂で食事をする前に、手を洗いハンカチを取り出して手を拭く
16	机に座って、ワープロを打つ
17	食堂の前でメニューを見て迷う
18	大学の事務で掲示板を見て、メモを取る
19	友人と待ち合わせていたらしく、階段を急いで駆け上がってきてその友人を捜す
20	大学の食堂で英文の雑誌を開いて勉強している

**印象群**：この実験ではビデオに登場する男性の行動からどのような印象が形成されるかを実験的に検討することに関心があります。例えば、芝生で本を読んでいる人物にあなたがどのような印象を持つかを想像していただければ結構です。ビデオの中にはその男性がどのような人物なのかその手がかりになる行動が含まれていると考えられます。その男性のとった行動からその人物がどのような人物であるかをイメージして下さい。

**記憶群**：この実験ではビデオに登場する男性の行動をどれだけ記憶することができるかを実験的に検討することに関心があります。ビデオに登場する男性の行動はいくつかのまとまりに分けられると考えられます。例えば歩くという動作、ジュースを飲んでいるという動作などがそれに該当するかもしれません。そこでその男性のとった行動の1つ1つをできるだけ記憶して下さい。

**手続き** 各群の操作のための教示を行った後、行動抽出課題について説明し、1分程度の練習用ビデオを用いて行動抽出課題の練習を行った。練習用のビデオには実際の刺激人物とは別の男性がアパートに帰宅し、靴を玄関に揃えて部屋に上がり、洋服を脱いでハンガーに掛けるまでのシーンが収められていた。教示内容を誤解していないことを確認後、実験を実施した。教示内容を同一にするため、教示はすべてカセットテープレコーダーで行った。ビデオ観察終了後、ディストラクション課題（カタカナでかかれた200字程度の文章の逆唱課題）を実施し、その後被験者を別室に移動させ、行動自由再生課題と特性自由記述課題を行った。実験は個別に行い、実験時間は1セッション約40分であった。

**行動抽出課題** 印象群の被験者には「ビデオ観察中、刺激人物の印象を形成するうえで手がかりとなる行動が出現したらボタンを押し、その



行動が終わったらボタンを離す」ように教示した。さらにビデオ観察終了後、刺激人物がどのような人物だったかを報告させる旨の教示を行った。記憶群の被験者には「ビデオ観察中刺激人物の行動について、1つの行動のまとまりが始まったらボタンを押し、その行動が終わったらボタンを離す」ように教示した。ビデオ観察終了後、刺激人物の行った行動を報告させる旨の教示を行った。ボタン押し反応の測定にはパーソナルコンピュータ (NEC PC9801VM21) を用い、ボタン押し反応の箇所が1/24秒単位で記録された。

行動抽出課題の計測結果からは以下の2つの指標をもとめた。

- ・ **ボタン押し回数** (frequency of button pressing (以下FBPと略す)) : ビデオ観察中被験者がボタンを押した回数の20シーンの合計値をFBPとした。
- ・ **ボタン押し時間** (button pressing time (以下BPTと略す)) : ボタンを押してから離すまでの時間を測定し、ボタン押し1回あたりの平均値をもとめ、これをBPTとした。

**行動自由再生課題と特性自由記述課題** 本研究ではこれら2つの課題から以下の2つの指標を用いた。

- ・ **行動自由再生量** : ビデオに登場した人物がどのような行動をとったかを具体的に箇条書きさせ、そのセンテンス数を行動自由再生量とした。回答時間は最大10分とした。
- ・ **特性自由記述量** : ビデオに登場した人物がどのような人物であったかを、形容詞で箇条書きさせ、その数を特性自由記述量とした。回答時間は最大5分とした。

## 結 果

**行動抽出課題** 行動抽出課題における各測定指標を印象群と記憶群で比較した結果を Table 4-2-2に示す。t検定の結果、印象群ではFBP（ボタン押し回数）が有意に少なく( $t(24.1)=7.62, p<.001$ )、BPT（ボタン押し時間）も有意に短かった( $t(29.2)=5.11, p<.001$ )。

Figure 4-2-1a および Figure 4-2-1b は横軸を時間に、縦軸をボタン押し反応率にとり、印象群、記憶群毎に被験者のボタン押し反応の割合（パーセンテージ）を示したグラフである。20シーン全体についてみると、平均反応率は印象群が12.5%、記憶群が71.3%であった。角変換後の検定の結果、ボタン押し反応率は記憶群の方が有意に高かった( $t=48.4, p<.001$ )。ボタン押し反応率に相対的な差があるものの、グラフを見てもわかるように、記憶群は全般にわたって高いボタン押し反応率を示している一方で、印象群ではボタン押し反応率が特定の短い時間帯に集中するのが特徴的である。すなわち印象群では記憶群の平均ボタン押し反応率である71.3%をこえる時間帯が20シーン中3箇所、また50%を越えるシーンが合計10箇所認められる。しかしそれ以外の大部分の時間帯ではボタン押し反応率が極めて低かった。

**行動自由再生課題・特性自由記述課題** 再生された行動の正誤判断は、内容が刺激人物のとった行動と一致しているかどうかを、条件をブラインドにして4人の判定者が独立に行った。この時、大きな行動単位と、その中に含まれる小さな行動の両方を再生していないかどうかについても確認を行った<sup>3)</sup>。その結果4人の判定者のうち1人でも誤再生だと判断した記述が記憶群では489センテンス中11センテンス、印象群では

<sup>3)</sup> 実際には、こうした記述は見られなかった。

Table 4-2-2

Mean frequency of button pressing and mean button pressing time (in study 1)

	Impression Group ( <i>S.D.</i> ) <i>N</i> =26	Memory Group ( <i>S.D.</i> ) <i>N</i> =23	<i>t</i> ( <i>df</i> )
FBP	13.8 (4.55)	45.5 (19.5)	7.62(24.1) ***
BPT	5.1 (4.60)	10.6 (7.46)	5.11(29.2) ***

\*\*\*  $p < .001$

FBP: frequency of button pressing

BPT: button pressing time (seconds)

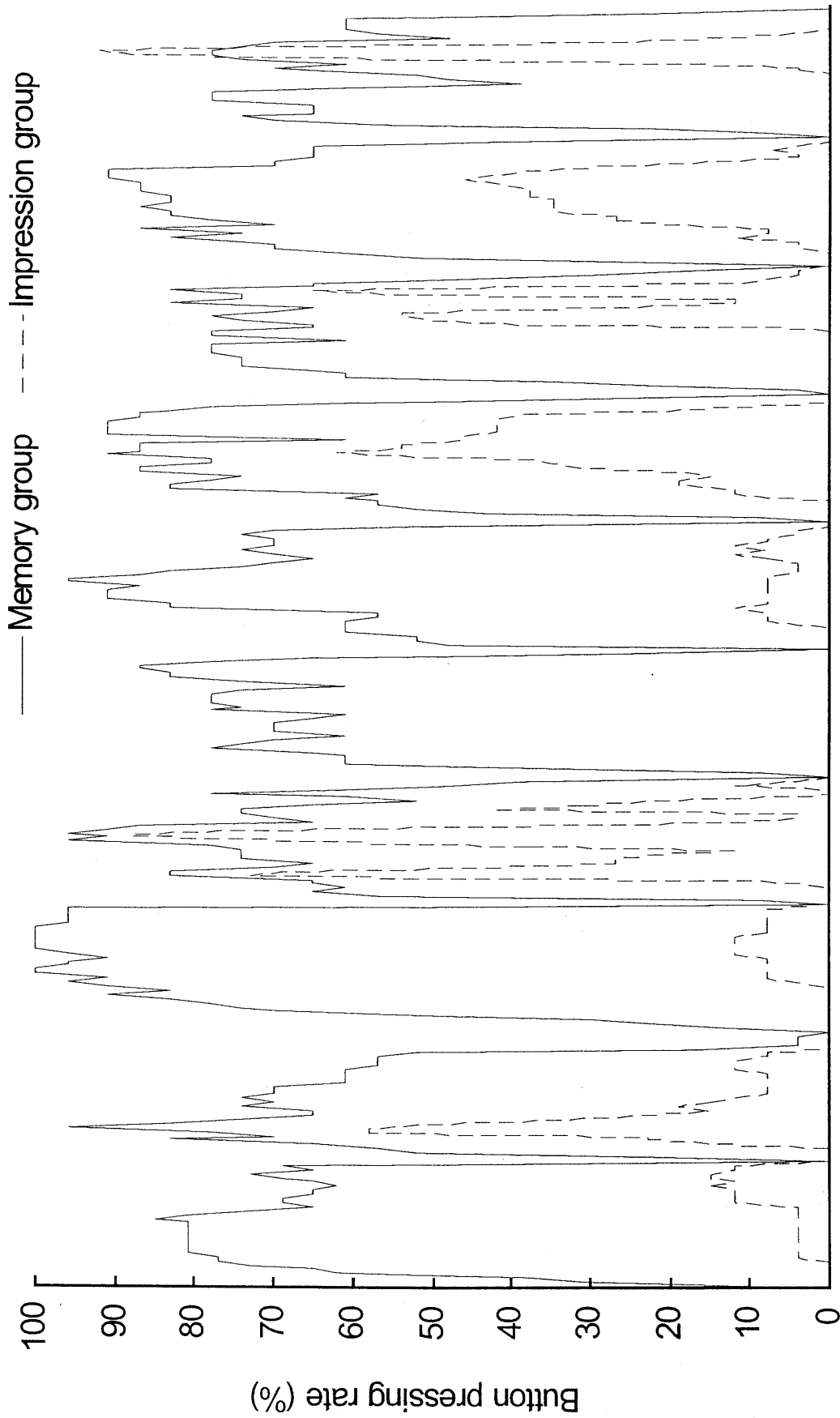


Figure 4-2-1a. Transition of button pressing rate (Scene 1 - Scene 10).

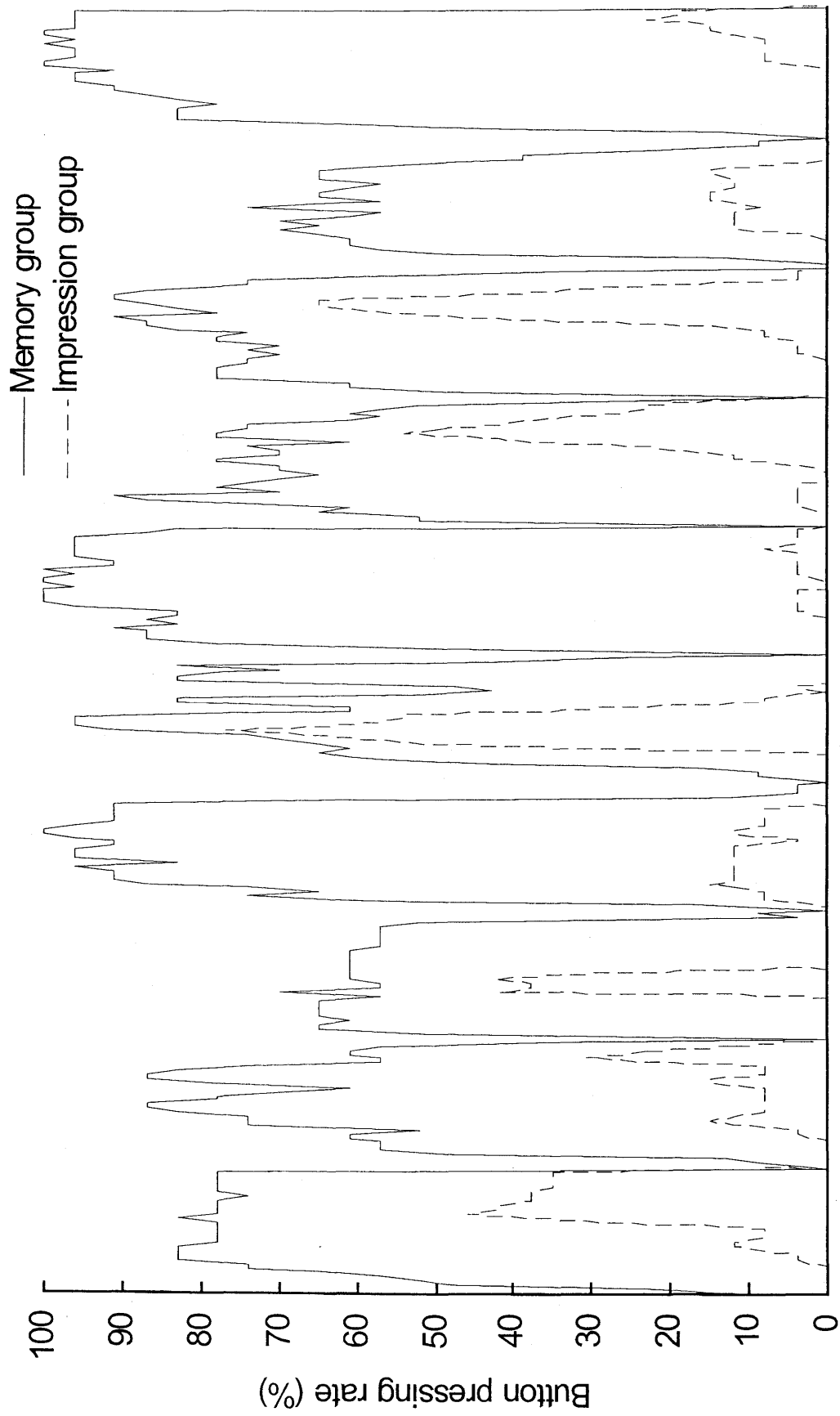


Figure 4-2-1b. Transition of button pressing rate (Scene 11 - Scene 20)

422センテンス中16センテンスあり，これらのセンテンスは分析から削除した。

特性自由記述の内容については文章中に人物特性を示す材料となる単語が入っていることを基準に，条件をブラインドにして2人の判定者が独立に内容の判断を行った。2人の判定者の一致率は.89と十分に高かったため，一致したセンテンスを分析の対象とした。分析の対象外となったセンテンスは，主に刺激人物の体格や服装に言及しているもの，あるいはどのような人物特性を有した表現かが不明のものであった。行動自由再生量および，特性自由記述量の群別平均値を Table 4-2-3に示す。

$t$ 検定の結果，行動自由再生量は記憶群が有意に多く ( $t(27.9)=2.94$ ,  $p<.001$ )，逆に特性自由記述量は印象群の方が有意に多かった ( $t(47.0)=2.49$ ,  $p<.05$ )。

最後にボタン押し回数と，行動自由再生量・特性自由記述量との相関係数を算出したところ，印象群，記憶群ともにボタン押し回数は特性自由記述量と有意な相関を示したが，行動自由再生量はボタン押し回数とは有意な相関を示さなかった (Table 4-2-4)。

## 考 察

FBP (ボタン押し回数) が記憶群に比べて印象群で少なかったことは Cohen & Ebbesen (1979) の結果と一致する。つまり，印象形成事態で印象形成の対象となる行動が，記憶事態で，記憶の対象となる行動の出現頻度よりも少なかったと解釈できる。一方BPT (ボタン押し時間) にみられるように，1行動あたりの平均抽出時間は記憶群よりも印象群の方が短く，印象形成の手がかりとして用いている行動の大きさが，記憶群で記憶の対象としている行動の大きさよりも小さかったと言える。これは

Table 4-2-3

Mean scores of behavior free recall and trait description  
(in study 1)

	Impression group (S.D.) N=26	Memory group (S.D.) N=23	t(df)
Behavior free recall	15.6(3.26)	20.8(8.32)	2.94(27.9) ***
Trait description	5.8(2.34)	4.2(2.21)	2.49(47.0) *

\*\*\*  $p < .001$ , \*  $p < .05$

Table 4-2-4

Correlation coefficients of FBP with behavior free recall and trait description (in study 1)

	Impression group FBP	Memory group FBP
Behavior free recall	-0.16	-0.14
Trait description	0.59 **	0.55 **

\*\*  $p < .01$

Cohen & Ebbesen (1979)で印象群のユニットの方が記憶群のユニットよりも大きかったことと全く逆の結果である。Cohenらでは、知覚者に行動を分割させた時、処理目標に関連する行動と関連しない行動の区別が明確に示されておらず、本研究のように処理目標に関連する行動だけを知覚者に抽出させた場合、印象形成事態では記憶事態と比較して1行動あたりの抽出時間が短かったことを示している。同時に印象群が記憶群よりも、1行動あたりの抽出時間が短かったということは、知覚者は出現時間の非常に短い行動でもその行動を印象形成の手がかりとして利用していることを示唆している。またボタン押し反応率に見られるように、印象群ではある特定の時間帯にボタン押し反応率が集中的に高まっていた。これは抽出時間の短い行動であっても、知覚者間で比較的共通に印象形成に関連する行動と解釈される場合があることを示している。

次に印象群では、記憶群よりも特性自由記述量が有意に多く、記憶群では印象群よりも行動自由再生量が有意に多かった。こうした結果は、行動観察中に逐次的に処理された情報内容の違いを反映したものと考えられる。つまり記憶群では行為者がどのような行動をとったかという、行動内容そのものが処理の対象であったのに対して、印象群では行動から特性を生成するような処理をしていたのではないかという可能性が指摘される。しかしこの点については、本研究の結果のみによる推察は早急であり、第5章においてより詳細な検討を行う。

ボタン押し回数(FBP)と行動自由再生量は記憶群、印象群ともに有意な相関を示さなかったものの、FBPと特性自由記述量では両群ともに有意な正の相関が示された。記憶群ではFBPと行動自由再生量との間に有意な相関が見られなかったが、記憶群では平均45.5回という情報抽出量があった。このことはそれだけたくさんの抽出情報が存在したことになるが、



経験的に考えてもこれだけの行動を全て記憶することは知覚者にとって負荷が高い。そのためこうした負荷を軽減させるために、行動を抽出するというプロセスと、観察した情報を貯蔵するというプロセスとの間に何か別のプロセスが介在していたと考えるべきであろう。

印象群で見られたFBPと特性自由記述量の相関は、印象形成事態で連続行動から多くの情報を抽出するということは、それだけ行為者に関して豊富な印象関連情報が獲得されることを示唆している。一方記憶群でも印象群と同様にFBPと特性自由記述量の間には正の相関が見られた。記憶群では行動を多く抽出すればするほどそれだけ印象関連行動の抽出量も多くなるはずであり、このことがFBPと記述量の相関を高めたと考えられる。

なお本実験で設定した印象群ではFBPよりも行動再生量が多かった。これは、処理目標に関連する行動の抽出時間が短いことにより、手がかりとなる行動が出現したときボタンを押す機会を逸していた可能性を示しているかもしれない。と同時に行動観察場面では、処理目標に沿わない情報の処理も並列的に行われている可能性を示唆しているかもしれない。例えばLassiter et al. (1988)では、ボタン押し回数が多い群に比べボタン押し回数が少ない群では、ブレイクポイント以外の部分の情報の誤再認率が低いことが示されている。ボタン押し回数が少ないということは、それだけ取り入れる情報が少なく処理目標に関連しない情報が獲得されやすくなっていることを示唆しているといえるだろう。

### 4-3 対人印象の形成過程における連続行動情報の処理 — 繰り返し観察の効果 — (研究2)<sup>4)</sup>

#### 目的

研究1では、連続行動を観察するとき、知覚者の処理目標によって行動の抽出パターンや、表象に組み込まれた対人情報が異なってくることを示された。しかしながら、行動抽出課題から得られた従属変数がどれだけ安定した指標であるかはまだ定かではない。そこで研究2では、連続行動を複数回観察した場合の行動抽出パターンの変化を検討することで、研究1で用いた指標の安定性を検討する。

#### 方法

**刺激材料** ビデオの作成に当たり5人の実験者が事前に協議を行い、印象形成の手がかりとなる行動が散在するようシナリオを作成した。次に、そのシナリオをもとに男女各1名の演技者に演技を依頼し、アパートの一室で撮影を行った。撮影にあたって何度かのリハーサルを行い、不自然な行動がないように実験者と演技者の間で十分な打ち合わせを行った。各刺激人物の行動は、それぞれ6分ずつノーカットで収録し、合計約12分のビデオ刺激を作成した。

**被験者** 大学生20名(男性15名, 女性5名)。

**手続き** 被験者には、実験が印象形成研究の一環として行われるものであると教示し、ビデオに登場する人物がどのような人物かイメージし

<sup>4)</sup> 宮本聡介 1995 印象形成場面における他者の連続行動のオンライン処理 — 繰り返し観察の効果 — 日本グループダイナミクス学会第43回大会発表論文集, Pp. 166-167.

宮本聡介・山本真理子 1996 対人印象の形成過程における他者の連続行動のオンライン処理 — 繰り返し観察の効果 — 筑波大学心理学研究, 18, 157-163.

ながらビデオを観察させた。同一のビデオ刺激を2回提示し（第1セッション・第2セッション），その両方で行動抽出課題を実施した。実験時間は約30分であった。

**行動抽出課題** 被験者にはパーソナルコンピュータ(PC9801NSE)に接続されたマウスを渡し、次のように教示した。

”ビデオ観察中、ビデオに登場する人物の印象を形成する上で手がかりとなる行動が出現したらマウスの青いボタンを押し、その行動が終わったらボタンを離して下さい”

行動抽出課題ではボタンを押した回数、ボタンを押し始めた時間帯、ボタンを押し続けた時間を記録した。

**従属変数** 本研究では以下の4つの指標を求めた。

- ・ **FBP** (Frequency of Button Pressing: ボタン押し回数) : ビデオ観察中被験者がボタンを押した回数の合計値。これは印象形成の手がかりとなる情報として被験者が知覚した行動の個数を表している。
- ・ **BPT** (Button Pressing Time: ボタン押し時間) : ボタンを押してから離すまでの時間を測定し、ボタン押し一回あたりの平均値を求め、これをボタン押し時間とした。これは知覚された1情報単位あたりの平均抽出時間を表している。
- ・ **ボタン押し一致率** : ビデオを1秒単位のインターバルに分割した時の、被験者の第1セッションのボタン押し反応と第2セッションのボタン押し反応のパターンの一致を表す。これは1つのインターバルでボタンが押されていれば「ON」、ボタンが押されていなければ「OFF」とし、各インターバルにおける第1セッションと第2セッションのON・OFFのパターンの一致数の合計を全インターバル数で除したものである。

- ・ボタン押し反応率：各インターバルで被験者がボタンを押していた反応の割合（百分率）。ボタン押し反応率が高いということは各インターバルから印象形成の手がかりとなる行動が知覚される割合が高いことを意味している。

## 結 果

FBP（ボタン押し回数）は第1セッションが平均25.6回、第2セッションが平均28.5回であった（Table 4-3-1）。一要因被験者内分散分析の結果、有意に第2セッションの方がボタン押し回数が多かった（ $F(1, 19) = 4.61, p < .05$ ）。

FBP（ボタン押し時間）は、第1セッションが平均13.4秒、第2セッションが平均14.9秒であった（Table 4-3-2）。一要因被験者内分散分析の結果、第2セッションの方が有意にボタン押し時間が長かった（ $F(1, 19) = 4.59, p < .05$ ）。

ボタン押し一致率のレンジは0.58から0.96であり、平均0.83であった。このことは被験者一人当たりのボタン押し反応のパターンに約8割の一致が見られたことを示している。

Figure 4-3-1a ~ Figure 4-3-1b は縦軸をボタン押し反応率、横軸を時間にとり第1セッション、第2セッションのボタン押し反応率の推移を示したものである。グラフを見ても分かる通り、ボタン押し反応率は特定の時間帯で高くなる傾向が見られた。また第1セッションのボタン押し反応率のパターンと第2セッションのボタン押し反応率のパターンは非常に類似していることがわかる。さらにボタン押し反応率のグラフの頂点付近をみると、全体に第2セッションの方がボタン押し反応率が高いことがわかる。ただし、Figure 4-3-1b の最後の2つのグラフの

Table 4-3-1

## Mean frequency of button pressing

	<i>N</i>	<i>mean</i>	<i>S.D.</i>
First session	20	25.6	(12.38)
Second session	20	28.5	(10.70)

Table 4-3-2

## Mean button pressing time (seconds)

	<i>N</i>	<i>mean</i>	<i>S.D.</i>
First session	20	13.39	(6.23)
Second session	20	14.91	(5.39)

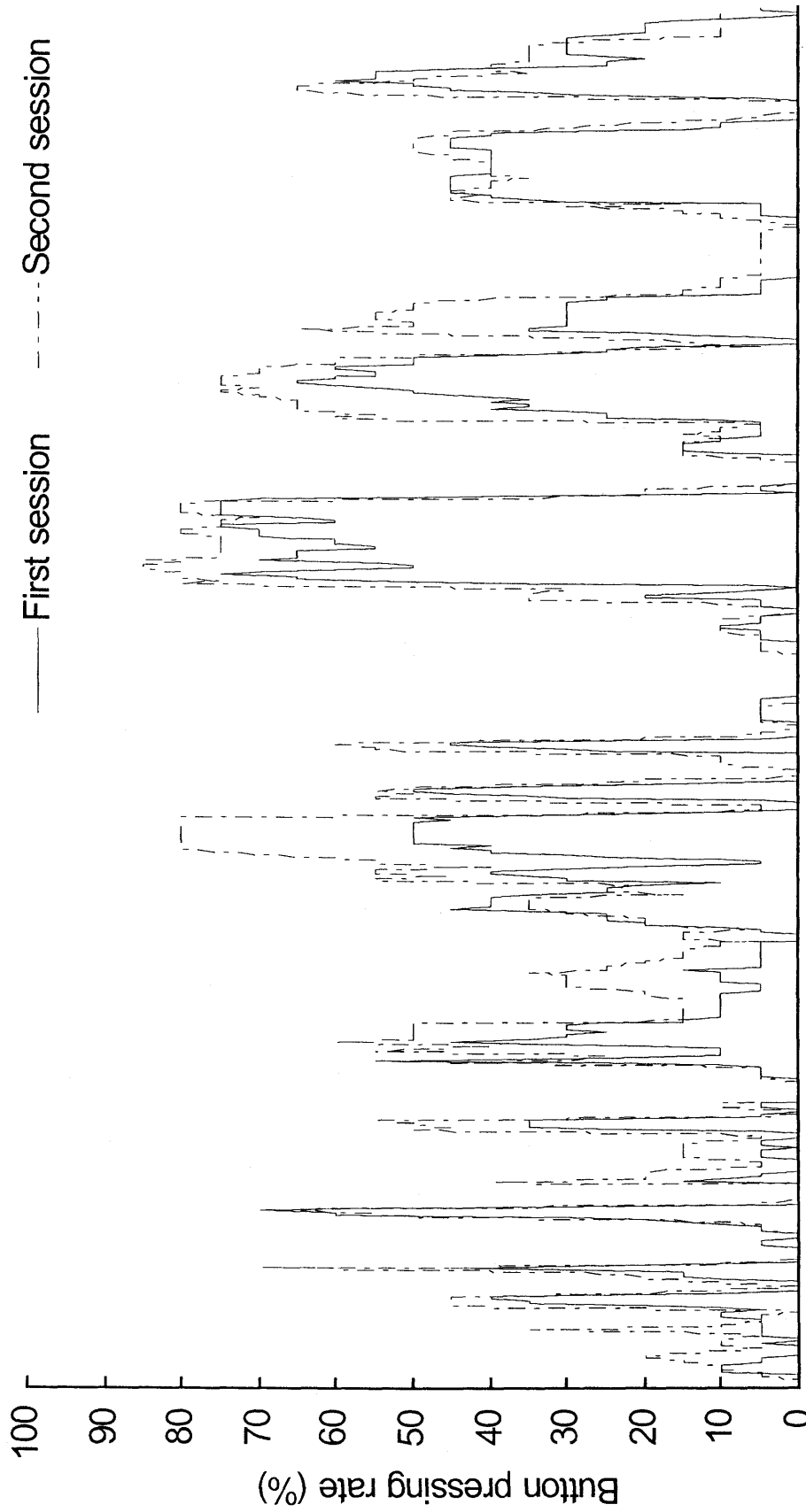


Figure 4-3-1a. Transition of button pressing rate (First half).



山では、第1セッションのボタン押し反応率の方が高かった。

### 考 察

第1セッションよりも第2セッションの方がFBP（ボタン押し回数）が多かったということは、第2セッションの方が印象形成の手がかりとなる行動を多く知覚していたことを示している。こうした理由として、第1セッションでは行動の見落としがあつたり、印象形成の手がかりとして知覚されなかった行動が、第2セッションでは改めて印象形成の手がかりとして知覚されたと考えられる。また第1セッションよりも第2セッションの方がBPT（ボタン押し時間）が長かったということは、知覚された1情報単位あたりの行動の長さが、第1セッションよりも第2セッションの方が長かったことを示している。このことから1回目に行動を観察したときに較べて2回目の観察では、処理される1情報単位あたりの行動の幅が広がることを示していると言える。

このように対人認知事態で連続行動を観察した場合には、印象形成の手がかりとなる情報の処理の促進が見られたと考えることができる。Wilder (1978ab) は冗長な行動を観察すると、次の行動の生起に対する予測可能性 (predictability) が高まるため、行動分割課題におけるボタン押し回数が減少することを報告しているが、本研究の結果はこれとは全く逆の結果になったと考えられる。Wilderの研究ではNewtsonと同様、行動を分割するという事に関心が向けられていたが、本研究のように対人認知という処理目標下で連続行動を観察した場合には、繰り返し行動を観察することにより、むしろ情報の処理に促進が見られたことになる。

また、ボタン押し一致率にみられるように被験者の行動の知覚パター



ンには第1セッションと第2セッションの間で約8割の一致が見られた。このことは1回目の観察で印象形成の手がかりとして知覚された情報と2回目の観察で印象形成の手がかりとして知覚された情報が概ね一致していることを示していると考えられる。このことから知覚者は行動を複数回観察しても、処理の対象となる情報が質的に大きく変化するわけではないことを示している。このことは行動抽出課題から得られる従属変数が、繰り返し観察することによってボタン押しのパターンが極端に変化することはなく、比較的安定した指標であるとみなすことができるだろう。

ボタン押し反応率のパターンを見ると、ある特定の時間帯で反応率が高くなるという特徴が見られた。この結果は研究1の印象群のボタン押しパターンにも認められているものであった。さらに被験者の一回目のボタン押しパターンと、2回目のボタン押しパターンの一致率は高かったものの、ボタン押し反応率は概ね第1セッションよりも第2セッションで高かった。このことは、繰り返し観察することによって処理される行動の知覚者間での知覚の一致が高まることを示唆していると考えられる。

しかしながら結果でも述べたとおり、ビデオの最後部では第2セッションよりも第1セッションの方がボタン押し反応率が高かった。この点については現時点では明確な理由を挙げるできないが次のような理由が考えられる。

本研究で呈示したビデオは全体が12分であったが、後半6分の女性刺激人物の行動は前半6分の男性刺激人物の行動に較べて動きがゆったりしており、ある意味で冗長な行動であったかもしれない。このことは後半のボタン押し反応率の変化 (Figure 4-3-1b) のほうが前半のボタン押

し反応率の変化 (Figure 4-3-1a) よりも、緩やかであることから推測できる。そのため被験者は第2セッションにおいて、こうした冗長な行動に対する処理が緩慢になったり、あるいは行動抽出課題に対する疲労の効果が現れたかもしれない。

#### 4-4 第4章のまとめ

対人認知事態では他者の連続行動から印象形成の手がかりとなる行動を、知覚者自身が選択的に知覚しているということが研究1・2の行動抽出課題のデータから明らかであろう。ボタン押し反応自体が知覚者の主体的な反応であることも考慮するならば、連続行動という時系列的な変化を伴う情報の中には、対人認知の手がかりとなる行動とそうでない行動が混在しており、その中から知覚者自身が積極的に行動を処理していたことをうかがわせる。

さらに抽出対象となりやすい行動に対する、知覚者間のボタン押しの一致が見られたということは、抽出対象となりやすい行動が印象形成の手がかりとなるということが、知覚者間の共通見解であることを示唆している。さらに詳細な議論をするならば、行動に対する処理の共通性を説明する1つの考え方として、知覚者間に共通の知識構造があり、それがボタン押し反応率を高めたと考えられる。この点については第3部においてより詳細に議論する。

**第5章 連続行動情報から処理される具体的な情報内容の検討：**

**プロトコルデータの分析を通して**

第4章では、行動抽出課題を用いて、対人認知事態での連続行動の知覚的過程に関する実証的な検討がなされた。ここでは、知覚者は他者の連続行動から小さな単位の情報を出し、印象形成の手がかりとして利用していることが示された。さらに研究1の行動再生・特性記述データを見ると、印象形成事態では、特性に該当する情報が抽出情報と関連していることが特性記述量とFBPとの相関から示されている。これは行動抽出に高次の認知的過程が働いていることを示唆するものであるが、行動抽出課題ではこうした問いに対する直接的な検討に限界がある。そこで第5章では行動の逐次的処理の背後にある高次の認知的過程を、情報の具体的な処理内容から検討する。

## 第5章

---

### 連続行動情報から処理される具体的な情報内容の検討：

#### プロトコルデータの分析を通して

対人記憶研究では、行動情報をもとにした特性の処理が行われていることが、間接的な検証方法ではあるが報告されていた (Hamilton et al., 1980)。

このように、対人認知事態では行動から当該人物に関する特性を引き出し対人表象に組み込んでいることが予想できる。さらにこのことから、対人認知事態では行動という日常場面の社会的情報を、特性という概念レベルの情報に変換するプロセスが働いているのではないかと予想できる。本章では、連続行動を観察することで、そこから処理される具体的な内容に特性が関わっているのではないかとすることを、より直接的な検証方法を用いて検討することが目的となる。

まず、研究3ではボタン押し反応のあった箇所について内省報告をとるという方法を、また研究4では発話思考法 (thinking aloud method) を用いる。言語プロトコルデータの有効性に対する賛否はあるが、現段階においては最も有効な方法の1つであると考えられる。特にここで上記の2つの方法を用いることに関しては次のような意義がある。

本章の関心の1つは対人認知事態で連続行動から印象形成の手がかりとなる情報を抽出する際、知覚者自身は具体的にどのような内容の情報を処理しているのかということである。連続行動のような視覚的情報は、その情報を意味を解釈することなしには、対人表象に組み込まれることはないと考えられると、抽出対象となる情報に対する解釈の内容を明らかに

する必要がある。そのためには抽出対象となった行動の出現時点で、つまり知覚者が行動情報を抽出する時点で、どのようなことを考えていたかを行動観察後に尋ねることによってある程度は明らかにできると考えられる。

ただし本章では連続行動観察時の処理の内容を直接検証することに第2の関心がある。この場合、内省報告データは、行動観察後に被験者に回答を求めている点で、すでに記憶をもとにした報告が混合してしまう可能性がある。そこで処理の内容を直接検証する有効な方法として、研究4では発話思考法を用いる。

### 5-1 内省報告データの検討（研究3）

#### 目 的

対人認知事態で印象形成の手がかりとして知覚した行動を知覚者は具体的にどのように処理していたのかを、内省報告データをもとに検討することが本研究の目的となる。特にここでは特性の処理のされ方の観点からの分析を中心に行う。

#### 方 法

**被験者** 大学生20名（研究2と同一の被験者）

**実験刺激** 研究2で用いた12分のビデオ刺激を用いた。

**行動リストの作成** 研究3で被験者がボタンを押した行動を対象に、ビデオ観察後、直接被験者に対してボタン押し反応の最中どのようなことを考えていたかを尋ね、その内省報告内容を分析した。この時、ボタン押し箇所を即時に特定化し、ビデオ観察後にその内省内容をボタン押し反応のあった箇所と対応させて尋ねる必要があった。そのため

あらかじめ、12分の刺激ビデオの中の各時間帯で、刺激人物が具体的にどのような行動をとっていたかに関する行動リストを作成した。

行動リストには、各行動の行動分類とその行動コード（番号で表示），その行動に含まれている具体的な行動のリスト，そして1つの行動の生起時間に関する情報があらかじめ記載されていた。同時にボタン押し反応の記録には、ボタンを押し始めた時間と、押し続けている時間が記録されていたので、行動リストと照らし合わせることによって、どのような行動が出現したときにボタンを押していたかが、即座にわかるようになっていた。

**手続き** 研究2の第2セッション終了後、第2セッションでボタンを押した箇所全てについて、ボタンを押している最中どのようなことを考えていたかを実験者が被験者に尋ね、行動リストに記入した。ただし、ボタン押し箇所についてどのようなことを考えていたかに関する回答が得られなかった場合に、無理に回答を求めるようなことはしなかったため、研究2で得られたボタン押しの回数と、研究3の内省報告データの報告数が必ずしも一致するわけではない。

### 結果と部分的考察

ここでは内省報告によって得られたプロトコルを統計的な分析にかけるよりも、むしろそのまま提示する方が今後の資料としても有効であると考える。そこで分類行動のリストとその分類行動に含まれる具体的な行動内容、分類行動に対して被験者が回答した内省報告内容、及びその中で特性語とカウントされたもの全てをTable 5-1-1(1)～Table 5-1-1(11)に示した。

Table 5-1-1(1). Introspective protocol data (in study 3)

Stimulus person	Male	Male	Male	Male	Male	Male
time	5.50~9.14	10.79~13.49	13.90~16.93	18.88~24.00	24.50~33.33	35.13~44.02
behavior code	1	2	3	4	5	6
behavior category	寝ている	起きる	時計を見る	伸びをする	顔をこする	手帳を見て閉じる
concrete behavior	寝ている	目を動かす 仰向けからうつ伏せに	時計を手に取る	のびい〜 首をぐるん	顔をこす 眼鏡を外す 顔をさわる 顔をたく	手帳を見て閉じる 手帳を見て閉じる
reported number	4	3	2	1	15	15
Number of person who reported trait term	1	2	0	1	7	7
ratio of trait term	5.0%	10.0%	0.0%	5.0%	35.0%	35.0%
	だらしがない(14) 覚えていない 眠そう(20) 自分に似てる (20)	あわただしい(2) 急場(2) だらしなかった人(8)	寝坊した(16) 急がねば(16)	気分転換めうまい人 (2)	アルコールを飲んで顔がむくんでい る(2) 学校へ行くのだから(2) 小ツタスに気がする水(2) 気が転換のたまに人(3) 酒好きじゃない(8) ついでにさわる(8) いろいろ興味を持つけどどきどき(8) 機嫌(11) 猫が気になる(13) ちよつと神経質(13) 動物好き(14) 自分はしない(15) 眠そう(20) 動物好き(20) 疲しそう(20)	スケジュールあるんだな(1) 忙しそうだけど、手帳をすぐに閉じたからそんなに忙しくないの かな(1) スケジュールを確認して整理している(2) 予定を気にする(8) 自分は違う(8) 予定(9) それなりにまめ(9) 予定をきちんとしている人(10) 几帳面(14) 普通っぽくない(15) 几帳面(15) 急いでいる(15) だらしなくしているように見えて(17) 文化型人間(17) 几帳面(20)





Table 5-1-1(3). Introspective protocol data (in study 3)

Stimulus person	Male	Male	Male	Male	Male	Male
time	96.09~107.58	108.92~116.73	120.29~123.82	125.39~133.18	134.27~41.38	144.06~157.38
behavior code	12	13	14	15	16	17
behavior category	髪をとかず	左右のほっぺを手で掴み引っ張る	机の上にあっただお酒のビンを片づける	眼鏡ケースを靴に入れる	靴下を脱ぐ	別の靴下を探す
concrete behavior	ブラシを取る 髪をとかず 髪をとかず ブラシを置く	口を開ける 顔引っ張る 顔たく	種を片づける	眼鏡ケースを靴に入れる	靴下脱ぐ 取る	靴下を探す
reported number	3	16	3	0	11	19
Number of person who reported trait term	5	5	1	0	5	10
ratio of trait term	0.0%	25.0%	5.0%	0.0%	25.0%	50.0%
	出かける準備を最低限する(13) 一般的(13) 一店は気にしている(17)	ルックスを気にする人(2) 気分転換のうまい人(3) 顔を気にかけている(7) 自分を気にかけている(7) 美容と顔を気にする(9) 自意識過剰(9) あまり自分はしない(10) 身だしなみがきちんとしている(10) 自分の容姿を気にする人(11) 顔を気にする(13) おもしろい(15) 一応は気にしている(17) 表情をつくる(18) 顔の運動(18) まだ眠そう(20) 自分に気合いを(20)	お酒好き(14) 自分は酒を飲まない(17) ああ、飲んでるんだ(17)		遅う(4) いいかげん(9) きちんとしわがない(9) ルーズ(10) いい加減な人(11) かごに入れるはずなのに(12) ざつぽい(12) 洗濯してほしい(17) 整理してほしい(17) 普通がそんなもの(17) 雑な人(19)	きれいな靴下と汚い靴下を区別していい(1) いい加減(1) いろんな所から靴下が出てくる(3) 整理整頓をしない(3) だらしない(4) だらしない(5) だらしない(6) 靴下が一カ所所がない(7) 几帳面でない(7) 汚い(8) きちんとしていない(8) だらしない(16) 不潔(16) 普通集めてるのにだらしない(17) 靴下まとめてないのか(19) 雑な人(19) 靴下をほおる(20) だらしない(20)

Table 5-1-1(4). Introspective protocol data (in study 3)

Stimulus person	Male	Male	Male	Male	Male
time	159.37~190.38	191.39~192.6	195.08~213.7	220.02~248.41	249.60~251.41
behavior code	18	19	20	21	22
behavior category	靴下をばく	床の上にあっただ置き時計をテーブルに置く	ストレッチをする	猫とじゃれて遊ぶ	部屋を片回す
concrete behavior	左足履く 左足、ひっきりかえす	テーブルに置く	机 仰む ひねる 首の体操	なでる	見回す
reported number	6	0	12	22	2
Number of person who reported trait term	3	0	2	11	1
ratio of trait term	15.0%	0.0%	10.0%	55.0%	5.0%
	<p>おっちよごちよ(4).....</p> <p>ぬいたままでルーズ(10).....</p> <p>普通は洗うときに気がつく(15)</p> <p>気がつくまでやらない(15)</p> <p>脱いだ靴下の上の部分を折り返してまとめている(20).....</p> <p>几帳面(20).....</p>		<p>時間の余裕がある(2)</p> <p>意味のない動き(2)</p> <p>いくぞう(3)</p> <p>気分転換の労法を知っている人(3).....</p> <p>無邪気(4).....</p> <p>猫が好き(5).....</p> <p>目盛りしやすい(6).....</p> <p>気が散る人(8).....</p> <p>猫好き(10).....</p> <p>動物好き(11).....</p> <p>寂しがり(11).....</p> <p>幼稚な(11).....</p> <p>猫好き(12).....</p> <p>かまっているだけ(12)</p> <p>用事があるのに別なことをする(12).....</p> <p>後ろ気な人(12).....</p> <p>ひり響らして猫はめずらしい(15)</p> <p>他のことに気を取られる(16)</p> <p>時間も無いのに猫とじゃれる(18)</p> <p>猫好き(18)</p> <p>ルーズ(19)</p> <p>レベルが低い(19)</p> <p>優しそう(20).....</p>		<p>間違えて押した(3)</p> <p>注意深い(13).....</p>

Table 5-1-1(5). Introspective protocol data (in study 3)

Stimulus person	Male	Male	Male	Male
time	253.98~266.02	266.89~275.87	276.62~280.75	281.45~287.42
behavior code	23	24	25	26
behavior category	傘を靴に入れる	鍵・財布を靴の上に置く 周りを見回す	靴下をまとめて放りなげる	靴を持って部屋を見回す
concrete behavior	傘を入れる		靴下を脱ぐ	電源を切る
reported number	15	3	16	1
Number of person who reported trait term	8	2	10	1
ratio of trait term	40.0%	10.0%	50.0%	5.0%
	天気予報を見てデータの用意(2) 準備万端(2) 気が小さい(8) 用心深い(8) 用意周到(9) 予報を聞いて用意のいい人(10) 注意深い(13) ぬかむのいい人(14) とにかく印象に残った(15) 折り返しのみ(16) 先を読んでいる(16) 用心深い(16) 几帳面(17) まぬぬ(19) 用心深い(20)	注ぎ深(13) 確認(14) もゆず(14) 几帳面(14)	靴下をきちんと集めたわりにきちんとしていない(1) いい加減(1) だらしない(3) 一貫性がない(6) おおざっぱ(7) 多少は身の回りに気を使っている(9) い(11) かば(11) 柔天(11) 散らかっているのを見てもまとめたが丸めておいていいや(12) ざつ(12) 俺よりきれいな好き(13) てきと(14) だらしない(16) 整理してくれ(17) 面倒くさがり(19) だらしない(20)	用心深い(8)

Table 5-1-1(6). Introspective protocol data (in study 3)

Stimulus person	Female ~336.72 28	Female 339.54~349.00 29	Female 349.00~387.94 30	Female 387.94~397.34 31	Female 397.34~405.50 32
behavior code	雑誌を読む 雑誌を閉じる	本朝のほこりを払う 本をさわる 襟を手で拭く 手を払う	本朝に掃除機をかける 掃除機をかける 振り向く 真ひかける 物を持ち上げる 掃除機を置く	鏡を見る 髪を直す 手で叩く 再び髪を見る	掃除機をどける 雑巾などを片づける
reported number	5	16	22	4	0
Number of person who reported trait term	0	8	10	2	0
ratio of trait term	0.0%	40.0%	50.0%	10.0%	0.0%
	雑誌には興味なし(2) 暑そう(2) 目的がない(2) やることがないから読んでい る(2) 逆にめくっていた(14)	本を探していたのに掃除に切り替え た(1) 細かいところに気がつく(1) 神経質(1) たまたま埃を見つけて気になる(2) 予定がないから掃除を始める(2) ちよっとした埃が気になる(3) きれいい好き(3) きれいい好き(5) 自分ばししない(5) まめ(6) きれいい好き(6) 自移り(6) きれいい好き(13) きれいい好き(14) 掃除好き(16) 神経質(20)	きれいい好きな人(4) 本がそのまま(7) 面倒くさがり(7) 細かいところまでやるからきれいい好 き(8) 思い立ったらすぐ(9) 几帳面(11) 表面上きれいい(11) 見えるところだけ掃除(11) きれいい好き(12) そままでしなくても(13) きれいい好きすぎる(13) 流れに治ってない(15) 突発的(15) 几帳面(15) 気がついたところからやる(16) きれいい好き(16) あの掃除機は使えない(17) きちんとする(17) きれいい好きな人(19) 几帳面(19) 几帳面(20) 神経質すぎ(20)	自分の身だしなみを気にする(8) 掃除の途中何か髪型を気にする (13) 自分の部屋でそんなに気にするな (17) 神経質(20)	



Table 5-1-1(8). Introspective protocol data (in study 3)

Stimulus person	Female	Female	Female	Female	Female
time	559.55~590.30	590.30~601.27	601.27~615.02	615.02~627.16	627.16~633.99
behavior code	39	40	41	42	43
behavior category	本物の本の並べ替えをする	ぞうまんと取りに台所に行く	足の小指をぶつける	電話にでる	溜息をつく
concrete behavior	本をさわる 並べ替える 指で埃を払う 本を取り出してテーブルに置く 本を一番願ける	立ち上がる 扉の外に出る 雑巾を取って戻る	小指をぶつける 小指をつかむ 雑巾を振り回す 投げる 変型を直す 手で仰ぐ	電話を取る 汗を拭く 笑う 小指をさする 首を振る 電話を置く	溜息を付く いやな顔をする 汗を拭く
reported number	24	1	19	13	10
Number of person who reported trait term	12	1	8	0	1
ratio of trait term	60.0%	5.0%	40.0%	0.0%	5.0%
	袖かいた点になる人(1) 細かい配置が気に入る人(2) 几帳面(2) わかりやすい並べ方(3) 整理の好きな人(3) 几帳面(4) 全部やらないと気がすまない(6) 気を散らす(6) 最後までやる(6) 思い立ったらすぐ(9) 細かいこと気にする人(10) 几帳面(11) 取り出したあとと拭いていたように見ない(11) 神経質(13) きれいでなくて入れられない人(14) 長くない(15) 几帳面(15) 奥の埃に気がついた(16) 気がついたらやる(16) きれいな好き(16) 大きさを気にする(17) 女の子(17) 高さを揃えている(20) 神経質(20)	神経質でない(8)	アホ(2) やることがない(2) ひま(2) 掃除をつづける(3) 飽きつばい(3) おっちゃん(3) 照れ隠し(5) 痛みのぶつける相手が見つからない(7) ちよっと怒っていた(10) 笑いが隣(11) おっちゃん(13) 一火で悪だだりする火(14) 投げ出す(16) おっちゃん(16) 誰でもあること(17) おっちゃん(18) おっちゃん(18) 毎朝(20) 我慢する(20)	一瞬楽しそう(2) 気が散る(6) いいたがり(12) 掃除の途中(13) きれいな好き(13) 中途半端(15) 現実逃避(16) やめちゃえ(16) あきた(16) 足を気にしていた(17) 話していたのは(17) 痛さを伝える(20) 気のあった友達がいる(20)	情性でつきあっている(2) 会話も切れる(2) あとで空虚な気持ちになる(2) 表情が変わった(5) 取り繕っていた(5) 楽しそうなのにいやなことあるのか(10) 裏表がある(10) 掃除やる気しない(13) 火当たりがいい(18) その人の前では取り繕う(18)

Table 5-1-1(9). Introspective protocol data (in study 3)

Stimulus person	Female	Female	Female	Female	
time	633.99~655.41	655.41~694.95	694.95~709.51	709.51~725.32	
behavior code	44	45	46	47	
behavior category	雑誌を手に取り立ちまわす	雑誌を持って座って読む	横になって雑誌を読む	新聞のテレビ観を見る	
concrete behavior	ティッシュ箱をずらす 雑誌を読む 髪を直す お菓子をこぼす 髪の毛を直す ないくるみぞどかす	ソファに座る 雑誌を膝に置く 髪を直す お菓子を探す お菓子をこぼす 照れ笑いする お菓子を直る	横になって雑誌を読む ヌイグルミを移動させる 探ころぶ 雑誌を読む	新聞の一面を読む 新聞をひっくり返す めくりかけてやめる 一面を読む 鉛筆を置く よくのせき込む	
reported number	11	26	2	4	
Number of person who reported trait term	2	9	1	4	
ratio of trait term	10.0%	45.0%	5.0%	20.0%	
	ふと気になる記事を見つけた(2) やる気が続かない(6) 掃除の途中(8) 気が散りやすい(8) 自分だったらしらない(12) 動きが早い(16) お菓子をこぼしたのを気にしない(16) だらしない(18) お菓子をこぼした(16) 座って読めばよい(17) 神経質(20)	読んでみるとたいしたことない(2) 関心がでない(2) お菓子そのまま(3) きれいな好きではない人(3) 落ちたものを拾わない(7) すぐ拾わない(9) いいかげん(9) お菓子拾えばいいのに(10) ちんとしてふれない人(10) 何かをしながら読んでいる(11) 寝転がる(11) いいかげん(11) 子供っぽい(11) 本を出したまま(12) お菓子をこぼしたまま(12) 目先のことをやる火(12) お菓子を拾わない(13) きれいな好きだと思っただのに愛な人(13) だらしない(16) それなら良い(17) お菓子を拾ってほしかった(17) 素朴的(17) 落ちたのを気にしない(17) こぼしたまんま(18) だらしない(18) きれいな好きなのにまぼら(20)	横になって雑誌を読む ヌイグルミを移動させる 探ころぶ 雑誌を読む	新聞のテレビ観を見る テレビ観を部屋でチェックする 〇をつける	一生懸命読んでいる(2) 興味を持って読んでいる(2) 比較的几帳面な人(2) ポイントを押さえている人(2)

Table 5-1-1(10). Introspective protocol data (in study 3)

Stimulus person	Female			Female		
time	752.23~787.38	787.38~858.16	858.16~871.32	871.32~912.11	912.11~926.09	
behavior code	49	50	51	52	53	
辞書を調べる	辞書を調べる	新聞を読む	はさみを取る	新聞の切り抜きをする	机の上のものを片づける	
辞書に張を乗せる	辞書に張を乗せる	辞書を持つ	はさみを取る	新聞の裏をチェックする	新聞を元に原寸	
辞書を置く	辞書を置く	顔につんつん	はさみと本を取る	切り抜く	辞書・本をテーブルの隅に置く	
		首を傾げる	席を取る	本に挟む	辞書を取る	
		目をこする			辞書のケースを避ける	
		辞書を置く				
reported number	26	4	7	18	7	
Number of person who reported trait term	14	0	5	9	1	
ratio of trait term	70.0%	0.0%	25.0%	45.0%	5.0%	
	知らないこと(3) 涙腺症(4) まめ(6) 好奇心が強い(8) 探求心(9) 向上心(9) わからない単語を調べる(10) わからなかった人(10) まめ(11) まじめな人(12) わからないところをほっておけない(13) すこいな(13) わからないところははいつしようとする(14) そのまま放り出す(15) 几帳面(15) よくわからない(15) えらい(17) まじめな学生(17) わからなかったことをすぐ調べる(18) 興味あることにすぐとりかかる(18) まめな人(19) 賢い(20) えらい(20) 勉強に対してまじめ(20)	かたづけでない(17) 目が悪そう(17) 眼鏡をかける(17) 興味の無いものとはして(18)	几帳面(3) 潔り性(6) きちんとスクラップをつくっている人(10) 几帳面(10) まめ(11) まじめ(11) まめな人(12)	几帳面(3) おいただけだからあとで見ないのではない(3) まめ(5) そこまでするのは偉い(8) 几帳面などところもある(8) まめな人(12) まじめな人(12) 結局まじめな人(13) 結局まじめな人(14) そんなにやる人はいない(15) 几帳面(15) ちゃんと取っておく(16) 几帳面(16) 細々している(16) 関心があるものを取っておく(17) すばらしい(17) まじめな学生(17) 勉強に対してまじめ(20)	丁寧によっている(8) 几帳面(8) 気が散りやすい(8) 本棚に長さない(13) 散らかっていく(13) やりかけ(13) 間違(15)	





尚、上記の表に添付されている特性語の判定は、次のような手順で行った。

まず報告数を単純に集計した結果、合計569例のプロトコルデータが得られた。さらにこれらの報告内容が、どれだけ刺激人物の性格や性質など、その人物の特性に言及したものを明らかにするために2人の実験協力者（何れも心理学専攻の大学院生）に判定を依頼した。この時2人の何れかが特性語に該当すると判断したものは合計336例あり、このうち両者が特性語だと判断したものが80.9%見られた。本研究では最終的に両者の判断が一致した80.9%の報告内容を特性語とみなした。従って全報告数(569例)のうち、特性語としてカウントしたものは272例(47.8%)であり、ほぼ半数の回答は刺激人物の特性に言及していた。特性語と判定されたものはTableの中で網掛けを施してある。各報告内容の中には1つの分類行動に対して同一被験者が複数回回答している場合もあるため、Figure 5-1-1では各分類行動別に、全被験者のうち刺激人物の特性に言及した被験者の割合を示した。これは参加被験者中何人が特性に言及したかその割合を示したものである。

これを見ると、分類行動の中には特性語を報告する割合が高いものと、そうでないものが見られる。もちろんこれは、研究2のボタン押し反応とも対応しており、ボタン押し反応率の低い行動では必然的に、報告数も少ないわけだが、特性語の報告数に注目すると、例えば男性刺激人物では特性語を報告した被験者が40%を越えた分類行動が6例みられ、また女性刺激人物では10例見られた。ただし内省報告は男性刺激人物、女性刺激人物の順に尋ねているので、男性刺激人物よりも女性刺激人物で特性語の回答率が高い行動が見られたのは、内省報告という課題に対する慣れもあったかもしれない。そこで女性刺激人物では報告率の基準を

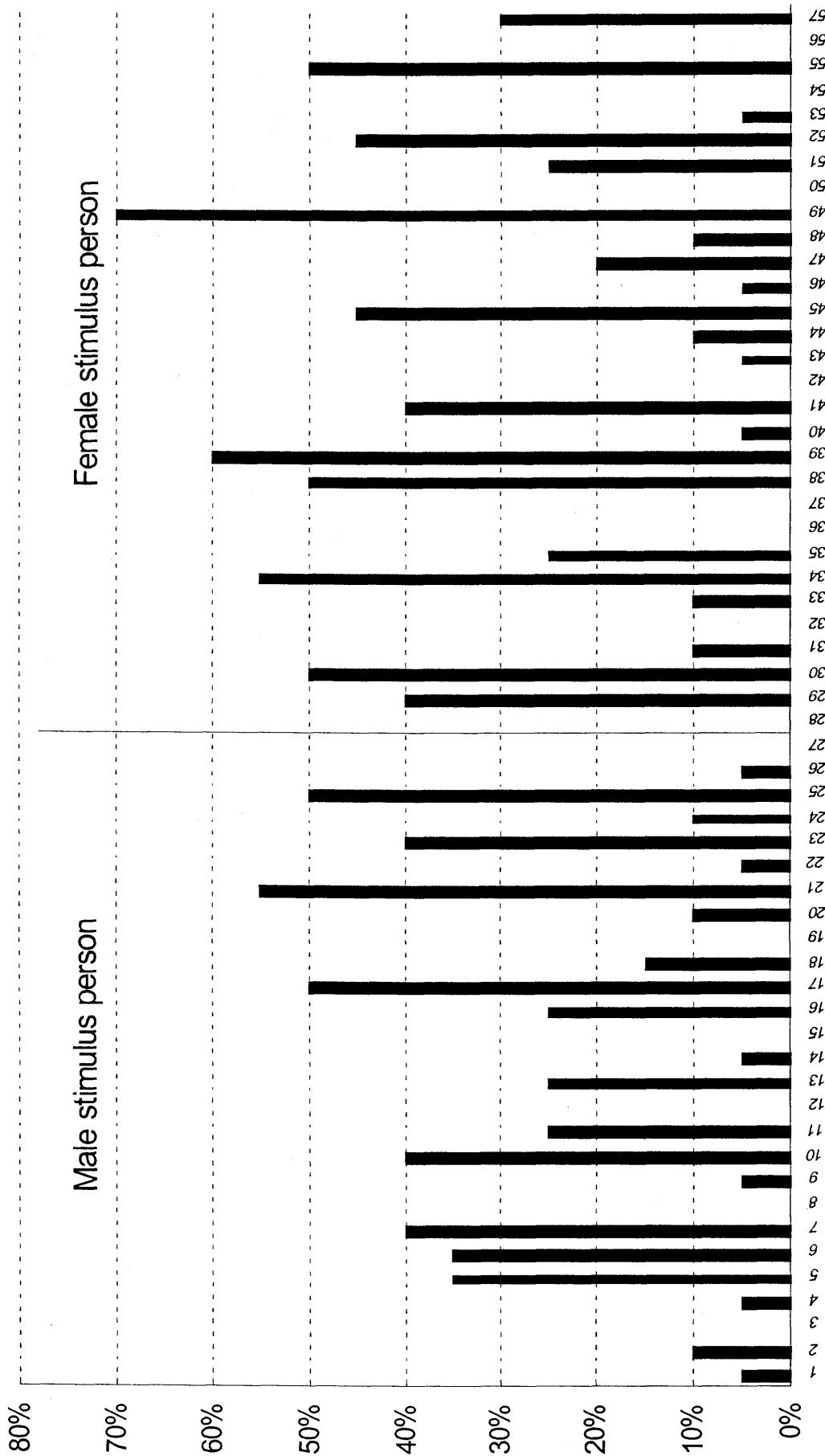


Figure 5-1-1. Ratio of trait terms in introspective report

やや厳しくし、特性語の回答率が50%を越えるものを取り上げると6例となった。こうした行動では、特性の報告内容とその特性に対応する行動との間に何か興味深い関連があるかもしれない。そこで以下では、特性報告率の特に高かったこれら12の分類行動を取り上げて内省報告の内容を探索的に検討した。

#### 男性刺激人物

##### 行動コードNo. 7 「パンフレットを見る」

この分類行動には具体的行動として「パンフレットを手に取り開く」「寝転がる」「起きる」があった。こうした一連の行動に対して、27例の内省報告が得られている。このうち特性に言及している被験者が40%おり、具体的には「てきとうな人」「のんびり屋」「怠け者」など刺激人物を怠惰な人物だと報告した被験者がいる一方、「注意力が分散する人」「目移りしやすい」「移り気」など、刺激人物の落ちつきのなさを上げる被験者も見られた。

##### 行動コードNo. 10 「猫とじゃれて遊ぶ」

この行動では具体的には「本で猫の頭をなでる」「猫と向き合う」「本を鞆に入れる」までの行動が生起していた。この行動に対し内省報告が20例見られ、また特性語の回答率が40%見られた。特性語の具体的な内容を見ると「気が変わりやすい」「目移りしやすい」「気が散る人」など、刺激人物の落ちつきのなさを指摘するものと、「猫好き」「動物好き」「優しい」など、猫と接する場面に対して刺激人物の人柄の良さ、優しさを報告した者もいた。

## 行動コードNo. 17 「別の靴下を探す」

この行動はその直前の行動である「靴下を脱ぐ (No. 16)」という行動に引き続いてとった行動であり、履いていた靴下を脱いで、部屋の中に散乱している別の靴下の中から、新しい靴下を探す場面であった。この行動では内省報告が19例見られ、また半数の被験者が特性語を報告した。この行動に対する特性の報告内容はほぼ一致しており、「だらしない」「いい加減」「不潔」「雑」など、刺激人物のいい加減さ、煩雑さをあげる者が多かった。

## 行動コードNo. 21 「猫とじゃれて遊ぶ」

この行動では22例の内省報告が見られ、また55%の被験者が、刺激人物の特性に言及していた。具体的には「気が散りやすい人」「目移りしやすい」「移り気な人」など、刺激人物が注意散漫な特性を有していると指摘するものと、「猫好き」「優しそう」など刺激人物の心暖かさに言及する者とが見られた。

## 行動コードNo. 23 「傘を鞆に入れる」

男性刺激人物の行動全体は、昼寝を終えて外出するまでの場面が収録されていたが、「傘を鞆に入れる」はその中でも特に用意周到な刺激人物の性格を想起させる行動であった。この行動に対して15例の内省報告が見られ、40%の被験者が特性語に言及していた。例えば「用心深い」「用意周到」「注意深い」「ぬかりのない人」など予想通りの回答を得ている。この場面でも被験者の報告した特性内容には一貫性が見られた。

## 行動コードNo. 25 「靴下をまとめて放り投げる」

この行動は、先ほど脱いだ靴下と、部屋に散乱していた靴下をまとめて、部屋の片隅に投げ捨てる場面であった。この行動に対して内省報告が16例みられ、特性語に言及した被験者は50%だった。具体的には「いい加減」「だらしない」「おおざっぱ」「いい加減な人」「てきとうな人」など、刺激人物の煩雑さをあげる者が多かった。

#### 女性刺激人物

##### 行動コードNo. 30 「本棚に掃除機をかける」

この行動は携帯用の掃除機を手に取り、本棚を掃除する場面が含まれていた。丹念に掃除機をかける点などから、刺激人物の清潔さなどが報告されるが、回答例もそうしたものが多く見られた。例えば「きれい好きな人」「几帳面」などの報告が多かったことがその裏付けとなる。一方、「神経質すぎ」などと回答した被験者も見られ、中には「面倒くさがり」と回答した者もあった。両者とも他の被験者の回答内容と比べるとやや矛盾が見られるが、丹念に掃除をすることに対する違和感を感じた結果が「神経質すぎ」と回答したり、携帯用の掃除機を用いたことが「面倒くさがり」という回答につながったものと考えられる。

##### 行動コードNo. 34 「カーペットに掃除機をかける」

この行動では内省報告が29例見られ、これは全分類行動中最も多かった。特性語の報告率は55%だった。内容を見ると「きれい好き」「几帳面」などカーペットに掃除機をかける行動から、刺激人物のまめさなどを肯定的に解釈する例が多かったが、その一方で「おおざっぱ」「きちっとしてはいない」「要領が悪い」など刺激人物からネガティブな特性を報

告するものも見られた。更に特性としては挙がらなかったが「部分的」「掃除機のかけ方が雑」「大きなゴミだけとる」など、掃除をする態度にやや手抜きな部分が見られたことを思わせる回答が見受けられた。

#### 行動コードNo. 38 「姿見用の鏡を拭く」

これは丹念に姿見用の鏡を拭く場面であったが、内省報告が21例見られ、また特性語を報告した被験者が50%見られた。具体的な特性の報告内容を見ると「きれい好き」「几帳面」「細かい」などの特性を報告するものが多かった。その一方でここでも丹念に鏡を拭く動作に対して「神経質」な刺激人物の特性を報告するものが見られた。

#### 行動コードNo. 39 「本棚のほんの並べ替えをする」

この行動でも刺激人物の清潔感を伺わせる行動が見られ、こうした行動に対して内省報告が24例、また特性語の回答率は60%だった。内容を見ると「整理好きな人」「几帳面」「きれい好き」などの肯定的な特性があがっていると同時に、「細かいことを気にする」「神経質」など過敏なまでの整理整頓に対する、否定的な特性を報告する被験者も多く見られた。

#### コードNo. 49 「辞書を調べる」

この行動はそれ以前の「新聞の第一面を読む (No. 48)」に続いて刺激人物がとった行動であり、第一面の記事の中のわからない部分を辞書を引いて調べるという行動のつながりになっている。内省報告は26例ありまた、女性刺激人物の行動から、刺激人物の特性を報告した被験者の割合が70%と分類行動の中では最も高率であった。この行動からどのよう

な特性が報告されているかをみると「まめ」「きちんとした人」「几帳面」「探求心（のある人）」「向上心（のある人）」「わからないところを放っておけない」などがあり社会的望ましさに関連する特性が多く上がっていた。

行動コードNo. 55 「新聞の記事の切り抜きをする」

ここでは具体的な行動として「新聞記事の一部を見つけてニコニコする」「鉛筆をふる」「新聞を指す」「髪の毛を直す」「はさみに手を伸ばす」「新聞を切り抜く」などの行動が約30秒の間に生起している。こうした行動に対して内省報告が24例見られ、また50%の被験者が刺激人物の特性を報告していた。具体的には「几帳面」「まめ」「まじめ」などの特性を報告しているものが多かった。しかしその一方で「子どもっぽい」「ミーハー」など刺激人物からネガティブな特性を報告するものも見られた。

## 考 察

報告された内容を特性の観点から分析した結果、全体の約5割は特性に関連した報告であった。このことは対人認知事態で行動を観察する際には、特性の処理が優位に働いていることを示唆するものであると言えよう。また個々の具体的な行動とそこから報告された内省の内容を照らし合わせてみると次のような興味深い結果がみられた。

報告された特性の内容を見ると、ある程度一貫性は見られるものの、被験者によっては行動から肯定的な解釈をする例と同時に否定的な特性を報告する例も見られ、連続行動の解釈には個々の知覚者間に解釈の相違があることが指摘できる。こうした解釈の相違の大きな要因の1つとし



て、ここでは知覚者個人の生活習慣の違いを挙げておきたい。例えば部屋の片づけをする動作に対して、几帳面でまめだと解釈する者もいれば、その動作を執拗に掃除をする動作で「神経質」だと解釈する例などは、知覚者個人の実生活に見られる生活習慣と照らし合わせて刺激人物の動作を解釈しているのではないかと考えられる。

## 5-2 オンラインプロトコルデータの分析（研究4）<sup>5)</sup>

### 目的

研究3で報告された内省報告の内容の約5割は刺激人物の特性に言及するものであった。また報告された内容は行動抽出課題においてボタン押し反応の見られたところに限っていることから、抽出行動から特性が生成されている可能性がより強く認められたと言える。

しかしながら特性処理が印象形成場面にみられるような対人認知事態に特有の処理かどうかという問いに対する回答はまだ得られていない。研究1において、行動の抽出数と特性の回答数に相関が見られたことは、この問いに対するある程度の回答を示唆していると考えられるが、行動観察時点での逐次的な処理を直接検証しているわけではない。そこで特性の逐次的処理が対人認知事態に特有のものであるということを示すためには、何らかの比較群を設定しその処理内容を検討する必要があるだろう。

<sup>5)</sup> 宮本聡介 1995 連続行動から処理される情報内容の発話データからの分析 日本心理学会第36回大会発表論文集, Pp. 410-411.

宮本聡介 1996 連続行動の観察場面で観察者が処理する情報内容の分析 - 印象形成と行動記憶に見られる発話内容の分析を中心として - 社会心理学研究, 12, (印刷中)

そこで研究4では記憶事態を設定し処理の内容を比較することを試みる。これまでの対人認知研究では、印象群と記憶群を比較して、形成された対人表象の構造の違いを検証する試みはなされている(Hamilton et al, 1980; Klein & Loftus, 1990)。これをもとに研究4では、行動観察時の処理の内容を記憶群と比較して検討する。対人情報を視覚的に受け取り、それをもとに情報が処理される過程では、対人認知事態と、それを単に記憶する事態では以下に示す違いが予測される。

まず第1に、これまでの研究で示されたように、形成された対人表象の構造が印象群と記憶群で異なってくるというのであれば(Cohen & Ebbesen, 1979, Hamilton et al, 1980, 坂元, 1987)、それは情報入力をした時の処理の違いを反映していると考えることができる。つまり入力した時に処理される情報の内容そのものの違いが、その後形成される対人表象の構造の違いを生じさせることが予想される。

第2に、行動の記憶事態では、行動がそのまま他者に関する情報として記憶に表象されることが予想されるが、対人認知事態で予想されるような、行動情報から特性情報への変換は行われないと予想される。すなわち対人印象を形成する事態では、行動レベルの情報を、特性レベルの概念情報へと変換している可能性が考えられるのに対して、記憶群では行動レベルの情報の処理にとどまるという差異が予想されるからである。

なお、具体的な情報内容を検証する方法の1つとして研究4では発話思考法(thinking aloud method)を用いた。発話思考法は被験者が課題施行中どのようなことを考えているかを、課題遂行の時点で直接発話させるという方法である(海保・原田, 1993など)。もちろん行動観察中に直接発話させるため、被験者にとって処理の負荷を増す可能性があり、発話内容に歪みが生じることが危惧される。しかし研究3に見られたよ

うな内省報告の内容を検討する方法では、処理最中の情報内容を直接検証するという対人情報の目的に対する回答は得られないことは前述の通りである。発話思考法を用いれば、行動観察中の処理を直接データ化できるという利点がある。

以上の点から研究4では発話思考法を用い、対人認知事態で逐次的に処理される情報の具体的な内容を記憶事態と比較、検討する。

## 方 法

**被験者** 大学生46名を印象群、記憶群の2条件に同数ずつランダムに割り当てた。

**刺激材料** 1人の男性の日常的な行動を1シーン約30秒で合計20シーン作成しビデオ刺激とした。

**実験条件の操作** 実験条件の操作は教示によって行った。各条件の具体的な教示は以下に示す。

**印象群**：この実験は印象形成研究の一貫として行われるものです。この実験では、初対面の人物の行動からどのような印象が形成されるかを実験的に検証することに関心があります。そこでこれから1人の男性の日常場面の行動をビデオでお見せしますので、その人物がどのような人物かイメージしながらビデオを観察してください。ビデオ観察終了後、その人物がどのような人物であったかを報告していただきますのでそのつもりでビデオを観察してください。

**記憶群**：この実験は記憶研究の一貫として行われるものです。この実験では、人間の行動を我々がどれだけ記憶できるかを実験的に検証することに関心があります。そこでこれから1人の男性の日常場面の行動をビデオでお見せしますので、その人物がどのような行動をとったかをでき

るだけ詳しく記憶してください。ビデオ観察終了後、その人物がどのような行動をとったかを報告していただきますのでそのつもりでビデオを観察してください。

**手続き** 実験は個別に行った。被験者が実験室に入室後、条件の操作のための教示を各被験者に行い、それに続いて発話課題の説明を行った。教示内容を理解したことを確認した後、被験者にビデオを観察させ、同時に発話課題を実施した。ビデオ観察終了後「これで実験は終了です。登場人物がどのような人物であったか（どのような行動をとったか）を報告していただく必要はありません」という旨の教示を行い、同時にこの実験の主旨を説明して実験を終了した。実験時間は1セッション約20分であった。

**発話課題** 発話課題では次のような教示を行った。

「本実験ではビデオ観察中あなたがどのようなことを考えているかに関心を持っています。そこでこれからマイクをお渡ししますのでビデオ観察中あなたが考えていることをそのまま声に出してください。ただし、なれないことなのでなかなか声に出しづらいと思います。そこでささやき声でも結構ですのでマイクロホンに向かってしゃべってください。」

この教示に続いて被験者にマイクロホンを装着させ、ビデオ観察中の発話内容をすべてカセットテープレコーダーに録音した。またビデオ観察中、被験者が無言になった場合には、実験者が被験者に対して発話を促す旨の教示を行った。

本研究では記録された発話内容を全て書き出し、文節単位に以下の指標を求めた。

- ・ **総発話量**：発話内容を全て文節単位でカウントしたときの総数。
- ・ **各品詞の発話量**：名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞の数を文節単

位にカウントした。

- ・ **特性語の発話量**：特性語の発話量を文節単位にカウントした。

## 結 果

**発話内容に占める各品詞の出現率** 発話内容はすべて文字に書きだし、二人の判定者に名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞の5品詞それぞれについて、印象群、記憶群のどちらの発話内容かを伏せて独立に判断させ、最終的に文節単位（語幹＋助詞、助動詞）に分類するという方法をとった。この時、語幹の部分の二人の判定者の一致係数（最終的に文節単位で区切られた発話内容のうち、カウントされたものの一致率）は.76であり、約8割の文節で一致が見られた。不一致が見られた残り約2割の文節については、国語事典を参照し、何れの判断が正しいかその判定を実験者が行った。文節の判断に際し以下の点について統一した基準を設けた。

- (1) サ変動詞（する）、形式動詞（いる、ある、みる、いく）はたとえそれが助詞に続く動詞であっても、それ以前の名詞を含めた複合動詞として1文節とみなした。（例 勉強する 勉強をする など）
- (2) 形容動詞については次に文節が続かず体言止めとなっているものは名詞としてカウントした。
- (3) 「ない」は語幹が動詞の場合は動詞、語幹が形容詞の場合は形容詞としてカウントした。
- (4) 代名詞は名詞としてカウントした。
- (5) 辞書に記載されているが品詞の記載がないもの（「そのまま」など）はカウントしなかった。
- (6) 接続詞はカウントしなかった。

Table 5-2-1は、各品詞の平均発話量を印象群、記憶群別に示したものである。印象群、記憶群ともに名詞、動詞の発話量が多いことがわかる。しかしながら総発話量をみると、記憶群が印象群の3倍近い値を示している。総発話量をもとにU検定を行ったところ、記憶群のほうが印象群よりも有意に発話量が多かった(印象群  $U=490$ , 記憶群  $U=39$ ,  $CR=9.90$ ,  $p<.01$ )。そこで各品詞の発話量を単純に比較することはできないため、被験者1人あたりの発話内容に占める各品詞の平均出現率を算出し、印象群と記憶群で比較した(Figure 5-2-1)。各品詞の出現率を角変換した値に対し  $t$  検定を行った結果、すべての品詞で有意な差が見られた(名詞  $t(44)=5.24$ ,  $p<.001$ , 動詞  $t(44)=6.44$ ,  $p<.001$ , 形容詞  $t(27.8)=7.77$ ,  $p<.001$ , 形容動詞  $t(32.7)=7.71$ ,  $p<.001$ , 副詞  $t(34.3)=6.99$ ,  $p<.001$ )。記憶群では名詞、動詞の出現率が印象群より高いのに対して、印象群では形容詞、形容動詞、副詞の出現率が高いのが特徴的である。特に印象群で形容詞、形容動詞の出現率が高いのは、人物特性に関連した内容の発話が多いためではないかと考え次に特性語の発話量の分析に移った。

**特性語の分析** 特性語の判断については刺激人物の性格や性質などを表現していると思われる発話内容を、あらかじめ何れの実験条件の発話内容か分からないようにして2人の判定者に独立に判断させ、該当する個所にアンダーラインを引かせた。但し他者の性格や性質などを表現する発話内容が「形容詞」や「形容動詞」に限定されることはないと考え、あえて品詞を意識させて判定を行わせるようなことはしなかった。また特性語の判定の際、文節単位で判定させる旨の教示もしなかったため、「几帳面な人」といった発話内容を特性語と判断した場合も見られたが、この場合には「几帳面な」と「人」という2つの文節のうちの「几帳面

Table 5-2-1

Mean frequency for total parts of speech and each part of speech

	Impression group		Memory group	
	Mean	(S.D.)	Mean	(S.D.)
Total parts of speech	52.4	(40.9)	179.3	(77.5)
Noun	22.9	(20.1)	103.5	(49.9)
Verb	14.7	(14.1)	70.2	(29.4)
Adjective	5.5	( 4.5)	1.0	( 1.6)
Adjective verb	3.8	( 3.1)	0.8	( 1.1)
Adverb	6.0	( 5.0)	3.7	( 3.9)

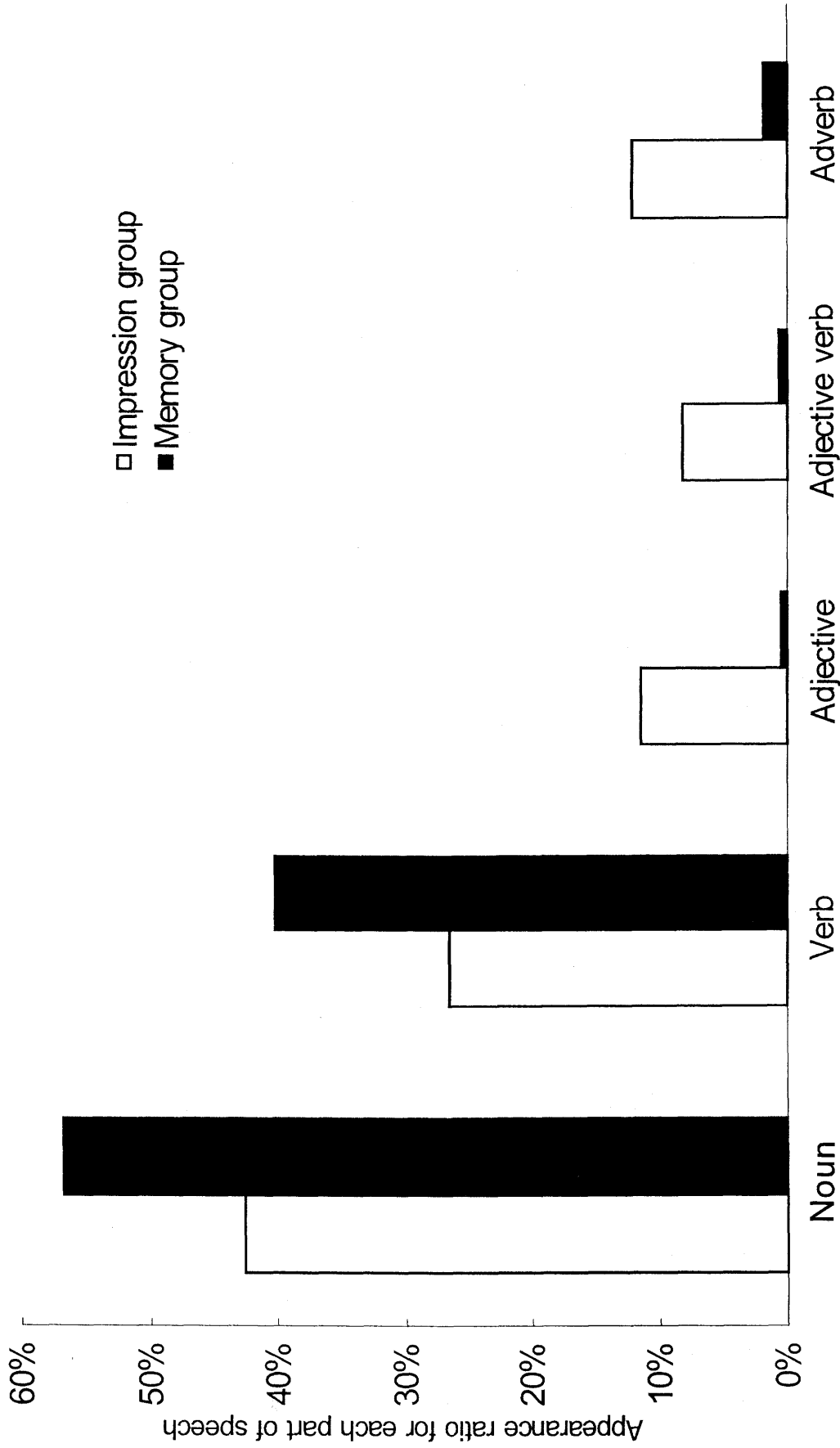


Figure 5-2-1. Mean appearance ratio for each part of speech in the impression group and the memory group



な」だけを特性語とみなした。2者の何れかが必ず特性語だと判断した文節のうち、両者の判断が一致していたものは86%であり、最終的にこれら86%の文節を特性語としてカウントした。Table 5-2-2は総発話量に占める特性語の平均出現率を算出したものである。印象群では発話内容全体のうち26%が特性語に関連していたが、記憶群では人物特性に関連する発話内容は全文節中3例しか見られず、記憶群全体で平均0.1%と極めて低い出現率であった。

Table 5-2-3は印象群の発話内容のうち特性語がどの品詞に対応したもののか、その割合を示したものである。名詞の割合が30.9%と最も高く、形容詞が25.4%、形容動詞が23.3%であった。Table 5-2-4は印象群における特性語の発話数と各品詞の発話数との間のピアソンの積率相関係数を算出したものである。分析の結果、特性語と形容詞との間に有意な正の相関が見られた。

**発話内容から見た処理タイプの分類** 次に品詞分類を基準とした発話内容から印象群、記憶群に分類が可能かどうかを確認するために、全被験者の5つの品詞の出現率（角変換値）を投入変数としたクラスター分析（Ward法）を実施し、その結果から2クラスターによる分類を分析対象とした。Table 5-2-5はクラスター別に見た各品詞の出現率の平均値である。第1クラスターは名詞、動詞の出現率が高いことから名詞・動詞クラスターと命名した。第2クラスターは形容詞、形容動詞、副詞の出現率が第1クラスターよりも高いことから形容詞・形容動詞・副詞クラスターと命名した。次にこの2つのクラスターに含まれる印象群と、記憶群の人数を見たものがTable 5-2-6である。印象群は第1クラスター（5人）と第2クラスター（18人）の両方に含まれているが、記憶群は第1クラスターにしか含まれていない。 $\chi^2$  検定の結果、有意な人数の偏

Table 5-2-2

Mean appearance ratio of trait terms in total part of speech

	Impression group (N=23)		Memory group (N=23)	
	Mean	(S.D.)	Mean	(S.D.)
Trait term	.256	(.199)	.001	(.003)

Table 5-2-3

Proportion of trait terms in each part of speech  
(impression group)

	Impression group
Number of total trait speech	236
Noun	.31
Verb	.20
Adjective	.25
Adjective verb	.23
Adverb	.00

Table 5-2-4

Correlation coefficients of trait terms with each part of speech  
(impression group: N=23)

Trait	Noun	Verb	Adjective	Adjective verb	Adverb
Impression group	.19	.08	.76 ***	.27	.00

\*\*\*:p<.001

Table 5-2-5

Mean appearance ratio for each part of speech in two clusters

	First cluster (N=28)		Second cluster (N=18)	
	Mean	(S.D.)	Mean	(S.D.)
Noun	.57	(.07)	.39	(.08)
Verb	.38	(.08)	.26	(.08)
Adjective	.01	(.01)	.14	(.09)
Adjective verb	.03	(.01)	.10	(.05)
Adverb	.03	(.05)	.13	(.08)

Table 5-2-6

The numbers of subjects in two clusters of the  
impression group and the memory group

	Impression group	Memory group
First cluster	5	23
Second cluster	18	0

りが見られた ( $\chi^2(1)=29.57, p<.001$ ) .

次に第1クラスターに含まれる印象群と記憶群の被験者を同一に扱うことはできないと考え、3つの発話タイプ（クラスター2印象群＝印象群タイプ1（18人）、クラスター1印象群＝印象群タイプ2（5人）、記憶群タイプ（23人））に分類し、5つの品詞の出現率をFigure 5-2-2に示した。印象群タイプ2は名詞の出現率が印象群タイプ1よりも高く、記憶群とほぼ同程度の出現率を示しているが、動詞の出現率は印象群タイプ1に近い。また、Table 5-2-7に見られるように印象群タイプ2は特性語の出現率が9%を占め、特性関連情報の処理がおこなわれていたともわかる。つまり、印象群で見られる発話内容は2つのタイプに分類することが可能だが、印象群タイプ2は名詞の出現率が記憶群に近い一方、動詞や特性語の出現率が印象群タイプ1に近いなど印象群タイプ1と記憶群の混合タイプの発話パターンを示している<sup>6)7)</sup> .

---

<sup>6)</sup> 本来ならここでも検定にかけるべきであるが、印象群2タイプの被験者数が5人と少なく、検定結果を積極的に論じることはできない。但しあくまでも参考資料としてタイプ別に見た5品詞の出現率（各変換値）の分散分析結果を示すと、名詞 記憶群＝印象群2＞印象群1 ( $F(2, 43)=28.35, p>.001$ )、動詞 記憶群＞印象1＝印象2 ( $F(2, 43)=21.21, p>.001$ )、形容詞 印象1＞印象2＞記憶 ( $F(2, 43)=48.65, p>.001$ )、形容動詞 印象1＞印象2＞記憶 ( $F(2, 43)=49.14, p>.001$ )、副詞 印象1＝印象2＞記憶 ( $F(2, 43)=26.00, p>.001$ ) となり、名詞の出現率は印象群2タイプと記憶群との間に有意な差が見られなかったが、それ以外の品詞の出現率は印象群2タイプは記憶群との間に有意な差が見られた。

<sup>7)</sup> 印象群タイプ2の被験者数が少ないこと、記憶群の特性語の出現率が極めて少ないことなどから、ここでも検定結果を積極的に論じることはできないと考えられるが、参考資料として特性語の出現率（角変換値）の分散分析結果を示すと 印象群タイプ1＞印象群タイプ2＞記憶群 ( $F(2, 43)=62.02, p<.001$ ) となった。

---

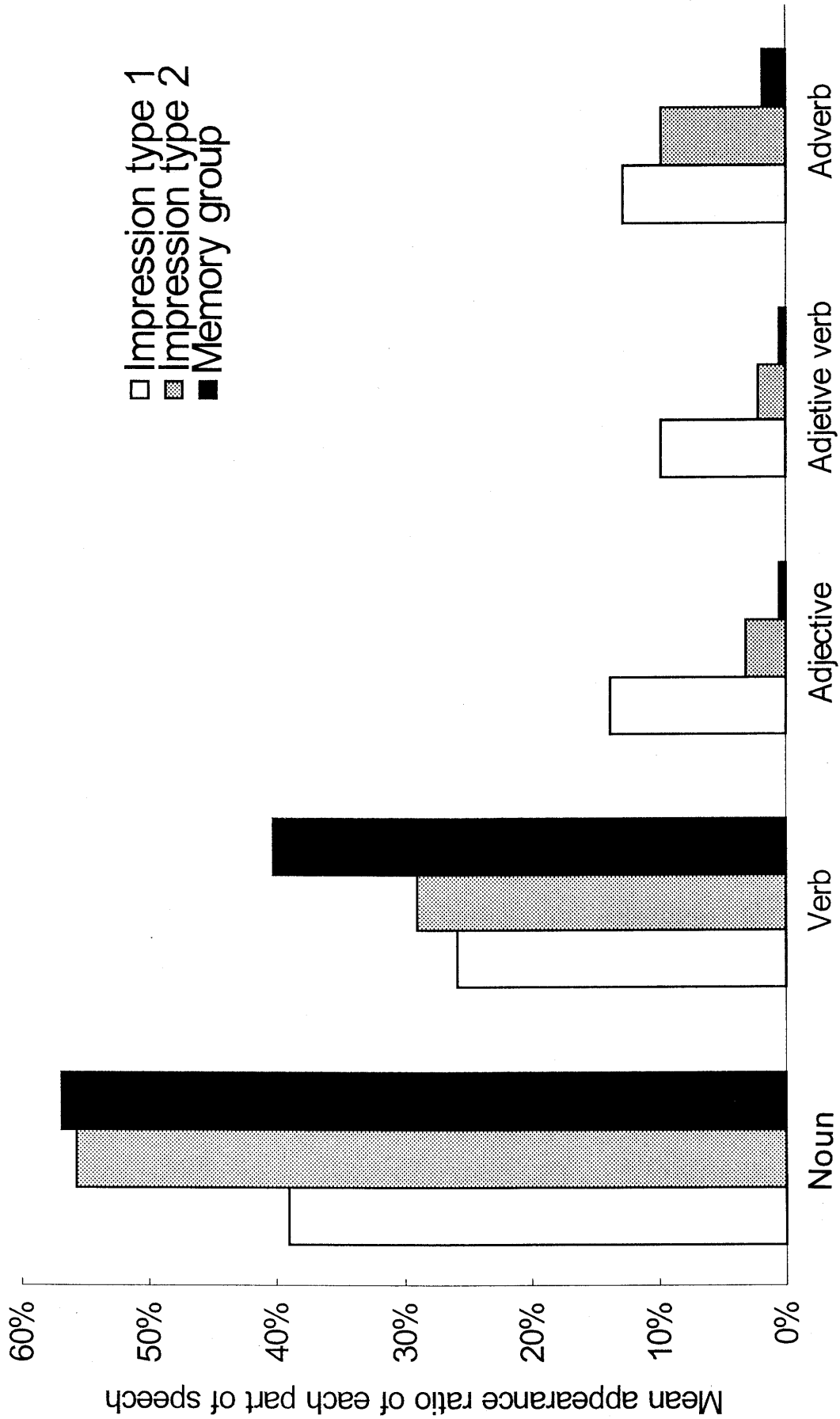


Figure 5-2-2. Mean appearance ratio of each part of speech in three speech types

Table 5-2-7

Appearance ratio of trait terms in three speech types

	Impression type 1 (N=18) Mean (S.D.)	Impression type 2 (N=5) Mean (S.D.)	Memory group (N=23) Mean (S.D.)
Trait terms	0.30 (0.20)	0.09 (0.07)	- -

3タイプ別に見た発話内容の具体例 最後に、3つの発話タイプに含まれる代表的な発話形態を示す。

#### 記憶群タイプ

「自転車を 止めて 鍵をして カバンを 持って 自転車を おこして 知り合いの人と 会って 挨拶をして 話しをして エレベーターの前で エレベーターに 乗る もう一度 開いて 出てきた人を 乗せてあげる 自転車で 乗ってきて 2学の 前で 人と 会って・・・」

ここでは発話の最初にも見られるように「名詞+動詞」を単位とした発話形態がとられていることがわかる。記憶群タイプの被験者はビデオ観察中、終始上記に見られるように刺激人物の行動を逐一報告するという発話形態をとっていた。

#### 印象群タイプ1

「やさしい 誰とでも 仲良くなれる 人かな 優しい 人です 友達が多い 偉い 偉い ほんとうに えっ まめな 人 ちょっと 優柔不断 友達と 食べに 行かないのかな 熱心な 人 清潔好き 潔癖な 人かな・・・」

印象群タイプ1では先の記憶群に示されるような「名詞+動詞」を単位とした発話形態は見られなかった。それに対して「やさしい」「偉い」「優柔不断」などの特性語が発話の中心となっているのが特徴的である。

#### 印象群タイプ2

「文系のような 人の 気が これから 先生の 所に 用事があって

来たような 気がします 自転車を 隣の 人のを なおしてあげて  
 良い 人だなと 思います 授業の 移動をしている 所で . . . .  
 友達と 会って 結構 気軽に 話す 感じの良い 人のような 気  
 がする ちょっと 何でも 投げやりの 人の ような 気がします  
 階段を 使わないで エレベーターを 使って . . . .」

印象群タイプ2では「先生の所に . . . 来た」のような「名詞+動詞」の発話単位が見られると同時に、「良い」「感じの良い」「投げやり」などの特性語も発せられている。従って、上記の記憶群の発話形態と、印象群タイプ1の発話形態の混合型であることが発話内容の具体的な内容からも推定される。

### 考 察

記憶群では名詞の出現率が57%、動詞の出現率が40%と高かった。これは、発話内容がおおむね名詞と動詞で構成されていることを示していると考えられる。記憶群の代表的な発話内容を見ると「自転車を 止めて 鍵をして カバンを 持って」のように刺激人物の行動を逐一言語化しており、人の動きに関する情報の処理が優先的に行われていたと考えられる。一方印象群では名詞・動詞の合計出現率が70%を占めるものの、記憶群と比べて形容詞、形容動詞、副詞の出現率が高かった。このことから印象群では記憶群に見られるような行動の言語化が発話内容の中心ではないことを示唆している。

次に発話内容が特性語かどうかという観点から分析した結果、印象群は記憶群よりも有意に特性語の出現率が高かった。このことは対人認知事態で、行動の観察時に、特性情報が処理されていたことを示唆している。また特性語の内容を品詞別に見ると、印象群では名詞の出現率が最も高



く、また動詞の発話も見られた。しかし印象群で特性語の発話量と形容詞の発話量との間に有意な正の相関が見られたことから、特性語は形容詞を中心とした情報であったといえるだろう。

以上のように印象群と記憶群では発話内容の違いが見られた。このことから印象形成事態と記憶事態では行動の処理の内容に大きな違いがあることが示唆される。

まず印象群で特性語の発話が多かったということは我々が他者の印象を形成する場面で行動を観察した場合、各行動を特性概念と関連させて処理しようとしていると解釈することができるであろう。こうした処理は Norman & Bobrow (1975) の指摘する概念駆動型の処理パターンに対応すると考えられる。概念駆動型処理とはあらかじめ活性化されたスキーマが、その解釈に一致するような情報を抽出しようとするものであり、対人認知事態では特性概念に関連したスキーマが活性化されることにより、連続行動から印象形成の手がかりとなる情報を特性概念と関連させながら解釈する処理が行われていたと考えられよう。

一方記憶群では行動情報の内容を中心とした発話形態をとっていることが示された。つまり認知された行動をそのまま発話するという処理過程から Norman & Bobrow (1975) の指摘するデータ駆動型に対応する処理が行われていたと考えられる。データ駆動型処理とは入力されたデータをもとに、それらの情報を組織化して意味ある構造を作り上げようとするものである。もちろん連続行動は非常に微視的な動作と、その動作の集合した巨視的な動作に区別できると考えられるが (Bower, Black, & Turner, 1979), 記憶事態では、感覚的に入力されるデータは微視的であっても、それを組織化し、一般的・日常的に解釈できる行動レベルで処理を行っていたと考えられる。さらにまた、記憶群では特性語の発話

が極端に少なかったが、このことは行動を記憶するという場面では概念駆動型処理が活性化されていないこと、あるいは行動を記憶するという認知処理が、概念駆動型処理の活性化を抑制する働きをしていた可能性が示唆される。

クラスター分析の結果を見ると、記憶群の発話内容は名詞・動詞を中心とした1タイプに集約されたが、印象群の発話内容は、形容詞・形容動詞・副詞を中心とした発話タイプ（印象群タイプ1）と、名詞を中心とした発話タイプ（印象群タイプ2）とに分類された。こうした結果は印象形成事態において知覚者の連続行動に対する処理に2つのタイプがあることを示唆している。一つは印象群タイプ1のように特性をダイレクトに処理するという特徴を持っている。一方印象群タイプ2では特性語だけでなく名詞+動詞の発話単位も見られ、こうした背景には特性を生成する根拠となるような背景的な情報を知覚者が同時に処理している可能性を示唆していると考えられる。

人が行動情報から特性をどのように推測しているかという問題は帰属理論の中で扱われていた。Jones & Davis (1965)などの初期の帰属研究においては、属性・特性の推測の前には必ず行為者の意図に関する帰属があるとされていた。そしてある行為に対して行為者の意図が明確な場合に、その意図を生じさせた属性・特性がどのようなものであるかの推測が行われる。しかし近年、属性・特性の推測が必ずしも意図の帰属を媒介とせず、知覚者はあらかじめ属性と行動間の関係に関する因果的なスキーマを持っており、このスキーマへの当てはめによって属性・特性の推測が行われるとする見解が示されている (Smith & Miller, 1983; Hamilton, 1988; Reeder, 1985)。研究4で示された印象群タイプ1の発話パターンでは特性のダイレクトな発話が見られたが、特性生成の根

抛となるような行動の意図の所在に関連する発話は確認されていない。このことから、ここでは行動の意図の帰属に関連する処理が行われていたとは考えにくい。一方印象群タイプ2では例えば「自転車を隣の人のを直してあげて 良い 人だなと 思います」に見られるように「良い人」という特性の生成だけでなく、「自転車を隣の人のを直して挙げて」のように、「良い人」という特性を生成するに至る情報も発話していることがわかる。こうした発話の背景には行動の意図を推測しようとする認知プロセスが働いている可能性が示唆される。ただし印象群タイプ2は研究4では5事例と非常に少数であり、こうした発話パターンが個人差を反映したものかどうかは今後十分な検証が必要であろう。

最後に印象群では記憶群と比較して総発話量が有意に少なかった。このことは印象群の被験者は無言で行動を観察していた時間が長いことを示している。ただしビデオ観察中、被験者が無言になった場合に、発話を促す教示を行っていることから、印象群では動機的な要因などによって発話が抑制されていたとは考えにくい。無言で行動を観察しているとき印象群の被験者は行動認知に対する処理が停止していたのか、それとも背後で何か別の処理を行っていたが発話という形では現出しなかったのかはここでは必ずしも明らかにすることはできなかったことを問題点として指摘しておく。

### 5-3 第5章のまとめ

対人認知事態では連続行動を観察している最中、特性が優位に処理されているということが本章の2つの結果から示された。第4章の2つの研究では、行動観察中、印象形成の手がかりとなる行動を抽出していることが示されたが、抽出最中、知覚者は抽出対象となっている行動を特

性概念と結びつけていたのではないかということが研究4の結果から示唆される。また、研究4では行動観察中の思考内容を発話させ、その内容を特性の観点から分析した。研究3同様、研究4においても特性語の発話が多く、この2つの結果から、対人認知事態では連続行動からある特定の行動を抽出し、その行動を特性概念と結びつけて処理していると言えるだろう。

また研究4では比較対照群として記憶群を設定し検証したが、記憶群において特性語の発話がほとんどみられなかったということは、特性の処理が、対人認知事態に特有のものであることを示している。さらにこのことは、特性の処理が、動機的な要因の影響を受けたものではないということを指摘できるだろう。仮に特性の処理が、「他者を知りたい」という動機的な要因によっておこなわれるものだとすると、記憶群においても、そうした動機的な影響を受けた証拠がみられ、特性語の発話が見られたはずである。しかし研究4の記憶群の結果をみる限り、記憶群では特性語の発話が極めて少なく、むしろ特性情報の処理は行われていなかったと考えるほうが自然である。つまり、行動を特性概念と結びつけながら処理することは、対人認知事態に極めて特有の処理であるということも本章の結果からある程度は示されたと言える。

## 第6章 抽出行動と印象判断の関連

抽出対象となりやすい行動が、印象形成の手がかりとして選択的に処理されたものだとすると、印象判断の手がかりとしても用いられている可能性は高い。そこで第2部で提出する最後の実証研究として、ここでは知覚と印象判断の関連について検討する。

## 第6章

---

### 抽出行動と印象判断の関連（研究5）

#### 6-1 実証的研究

##### 目的

抽出対象となりやすい行動の出現時間は比較的短い。しかしその一方で抽出対象となりやすい行動から、当該人物の特性が生成されていることが研究3・4を通して示唆された。生成された特性が対人材料の判断として用いられる可能性は十分に考えられる。

研究5ではこの事を検証する。

##### 方法

**被験者** 大学生86名（削除ビデオ群 (cutting video group) 43名，完全ビデオ群 (complete video group) 43名）

**刺激** 研究2の男性刺激人物のビデオ（約6分）を用いた。

**刺激材料の作成過程** 本研究では1人の男性刺激人物がとった行動をビデオに収録し刺激とした。この時、オリジナル通りのビデオを何の加工もせず呈示する完全ビデオ (complete video clip) と、抽出対象となりやすい行動を削除した削除ビデオ (cutting video clip) の2種類の刺激を用意した。これは抽出対象となりやすい行動から、印象判断の手がかりとして利用されている情報が引き出されているのかを明らかにすることを意図している。したがって削除ビデオを作成する際には、抽出対象となりやすい行動をあらかじめ特定化する必要があった。そこで研究5では次のような手順で抽出対象となりやすい行動を選定した

(Figure 6-1-1). 初めに研究2の男性刺激ビデオ(約6分)の中からボタン押し反応率が50%を越える部分を11カ所選定した。次にこれら11カ所を、研究3で作成した行動リストと照らし合わせ、最終的に、ボタン押し反応率が高くしかも特性報告数の多かった場面を6カ所選定した。これは結果的には研究3で示した行動コード7, 10, 17, 21, 23, 25の部分に該当する。削除ビデオではこの6カ所を削除し、削除部分を詰めたビデオを作成した。したがって削除ビデオは完全ビデオよりもビデオ全体の長さがやや短くなっている。

**条件の操作** 削除ビデオを提示する群(削除ビデオ群)と完全ビデオを提示する群(完全ビデオ群)を設定することによって実験条件の操作を行った。

**手続き** 被験者にはこの実験が印象形成のメカニズムを明らかにするためのものであり、登場人物がどんな人物かイメージしながらビデオを観察するよう教示した。ビデオ観察終了後、11対の特性形容詞上で刺激人物の印象を7段階で評定させる印象評定課題を実施した。

## 結 果

Table 6-1-1は削除ビデオ群、完全ビデオ群別に11の特性形容詞の平均評定値を示したものである。この表では平均値が高いほど形容詞対のポジティブな形容詞にかたよった評定をしていることを示している。t検定の結果、完全ビデオ群の方が有意に「落ちつきがない」( $t(84)=2.69$ ,  $p<.001$ ) 「不清潔」( $t(84)=1.99$ ,  $p<.05$ ) 「軽率」( $t(84)=5.00$ ,  $p<.001$ ) 「だらしがない」( $t(84)=3.79$ ,  $p<.001$ ) 「無邪気」( $t(84)=2.64$ ,  $p<.01$ ) と評定された。

また、Figure 6-1-2は、2つの実験群の平均値の差を図に示したもの

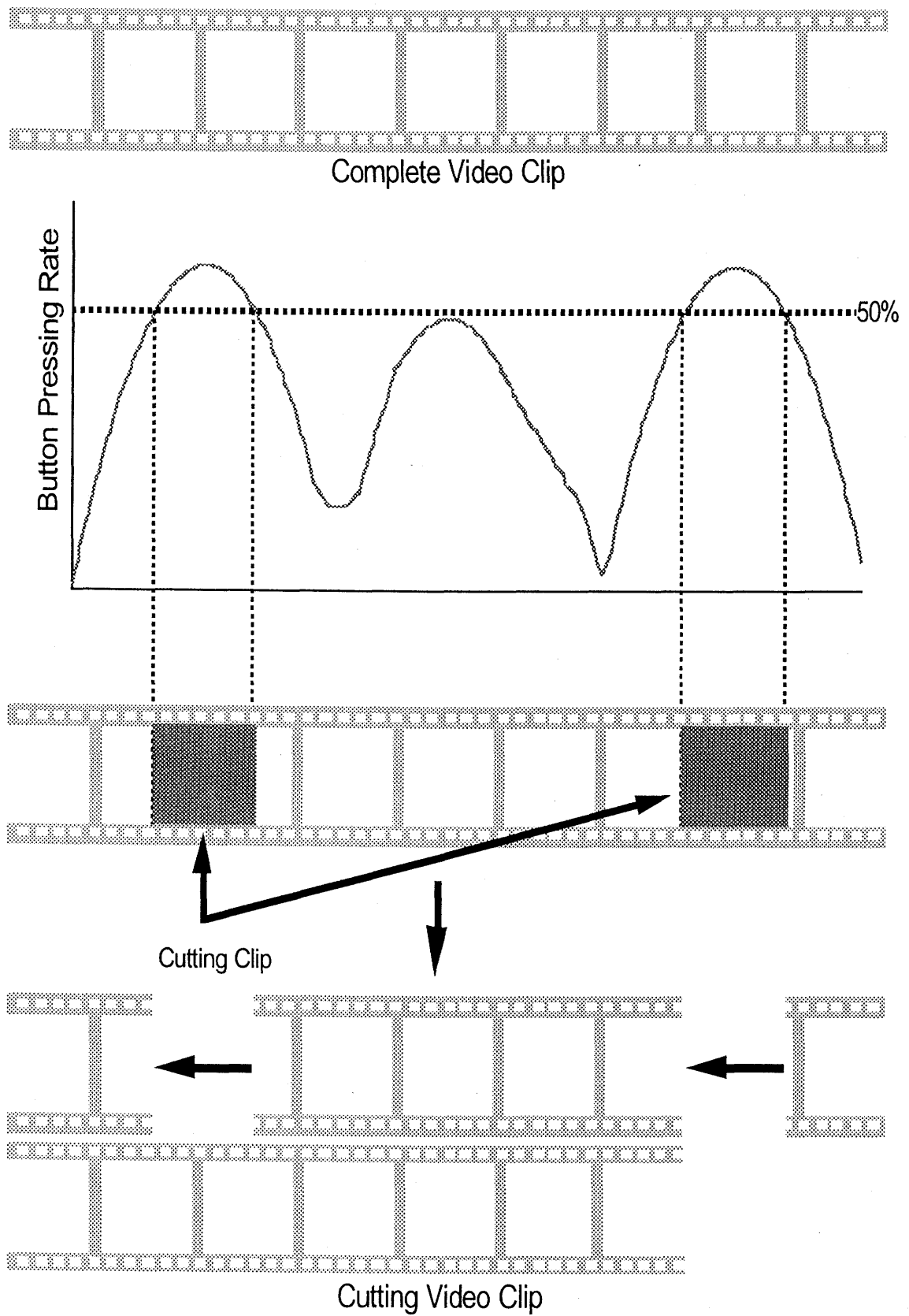


Figure 6-1-1. Making of complete video clip and cutting video clip.



Table 6-1-1

Impression rating of complete video group and cutting video group

		Complete video group	(S.D.)	Cutting video group	(S.D.)	t
真面目な	- 不真面目な	3.95	(1.38)	4.33	(1.13)	1.37
明るい	- 暗い	4.12	(1.07)	3.95	(0.87)	0.77
落ちついた	- 落ちつきのない	3.05	(1.51)	3.86	(1.28)	2.69**
親しみやすい	- 親しみにくい	4.51	(1.35)	4.56	(1.05)	0.18
感じの良い	- 感じの悪い	4.07	(1.30)	4.26	(0.93)	0.76
清潔な	- 不清潔な	2.19	(1.36)	3.47	(1.24)	1.99*
慎重な	- 軽率な	3.49	(1.33)	4.95	(1.38)	5.00***
気持ちの良い	- 気持ちの悪い	3.72	(1.18)	4.02	(0.67)	1.46
きちんとした	- だらしない	2.88	(1.40)	4.02	(1.39)	3.79***
人なつっこい	- 近づきがたい	4.77	(1.39)	4.49	(0.98)	1.07
無邪気な	- 無邪気でない	4.86	(1.28)	4.19	(1.07)	2.64**

\*:p&lt;.05, \*\*:p&lt;.01, \*\*\*:p&lt;.001

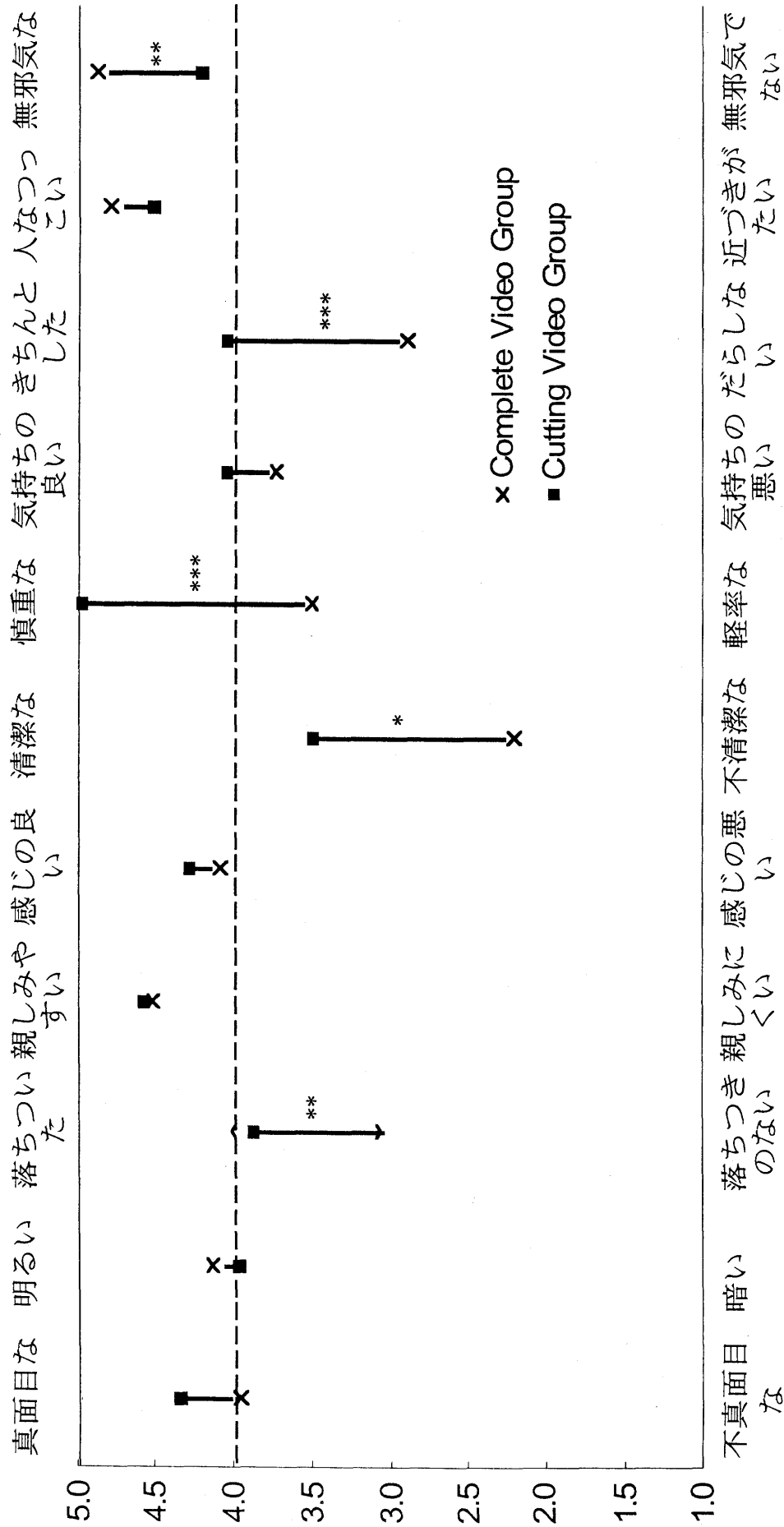


Figure 6-1-2. Impression rating scores of the complete video group and the cutting video group(2)

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

である。削除ビデオ群では各評定項目の平均得点が中間値である4点近辺に集中している一方、完全ビデオ群では中間点よりも大きく平均値がずれていることがわかる。

### 考 察

抽出対象となりやすい行動を削除した削除ビデオ群に比べて、抽出対象となりやすい行動をそのまま提示した完全ビデオ群では、刺激人物に対する印象が中間値からずれており、特に、落ちつきがなく、だらしない、軽率、不潔であると評定されていた。

こうした結果から次の2つのことが指摘できる。

第1に、抽出対象となりやすい行動を観察しなかった削除ビデオ群では、印象評定の各項目の平均値が、ニュートラルポイントである4点付近に集中していた。このことから削除ビデオ群の被験者からは、刺激人物に対して何らかの特性が強調されるような、特徴的な印象を形成していなかったことを示していると考えられる。

第2に、抽出対象となりやすい行動を観察した完全ビデオ群の被験者は、削除ビデオ群の被験者に比べ、各形容詞対の平均評定値がニュートラルポイントである4点からずれた値を示し、さらに評定値の高低を見ると、落ちつきがなく、だらしない、軽率、不潔、無邪気な印象が強調されていた。ある特定の印象が強調されたという結果は、抽出対象となりやすい行動の内容からも推察することができる。例えば靴下を脱いで別の靴下を探したり（研究3・行動コードNo.17）、部屋に散らばっていた靴下を集めて一カ所に投げ捨てる（研究3・行動コードNo.25）などが「不潔」な印象が強調された理由として挙げられるだろう。同時に「猫と遊ぶ」（行動コードNo.10, 21）などが刺激人物の無邪気な印象

が強調された理由であろう。

## 6-2 第6章のまとめ

研究6で示されたように、抽出対象となりやすい行動には、印象判断の材料となるような何らかの手がかりがあることが示された。研究2・3・4の知見とを総合すると、知覚者は行動観察中に生成された特性情報をもとに、印象判断を行っていたからではないかということが示唆される。

### 第7章 第2部のまとめ

本章では，第2部で提出された5つの研究報告をもとに，連続行動の処理プロセスに関する知見を整理し，仮設的な処理モデルを提出することを試みる。

## 第7章

---

### 第2部のまとめ

#### 7-1 対人認知事態における連続行動情報の処理モデル

まず第2部で提出された5つの研究報告を総括し、知見を整理すると次のようになる。

- ・連続行動から、印象形成の手がかりとなる情報を抽出する過程には、知覚者自身の主体的な情報の選択がみられた（研究1・2）。
- ・抽出対象となりやすい行動から、知覚者は特性に関連する情報を生成していた（研究3）。
- ・こうした特性生成は、対人認知事態に特有の認知的処理であることが示された（研究4）
- ・抽出対象となりやすい行動には、対人判断の材料となる情報が含まれていることが示唆された。

以上の4点を踏まえ、ここでは対人認知事態における連続行動の仮設的なプロセスモデルとしてFigure 7-1-1に示すものを提出したい。

このモデルでは、対人認知事態で行動を観察すると、知覚者は初めに連続行動の中から印象形成の手がかりとなる情報を抽出することを示している。

この抽出は、研究1・2にも示されているとおり、知覚者自身の主体的な処理によるものである。このような情報の「抽出」に関する視点は、これまでの研究では示されておらず、本研究の新しい視点と考えること

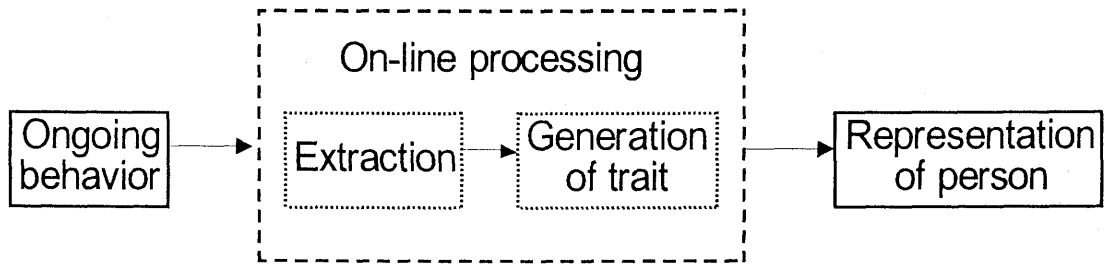


Figure 7-1-1. The process model of ongoing behavior of others in impression formation

ができる。これまで、情報の符号化、検索などに対する知見は多く見られたが、時系列的な情報の変化の中から、知覚者が処理に必要な情報を主体的に選択する過程について言及したものは少なく、本研究で示した「抽出」という過程は、対人認知の基本的な処理を明らかにする上で、無視することのできない過程であるように思う。

さらに抽出された情報は、知覚者による解釈が行われ、特に対人認知事態では「特性」の生成が行われることになる。ここで注意しなくてはならないことは、こうした抽出→特性生成のプロセスは、連続行動の逐次的処理の過程で行われているということである。そして最終的に知覚者自身によって生成された情報が、行為者に関する対人情報として、対人表象に組み込まれることになる。

もちろんこのモデルは対人印象の形成場面に限定されるモデルであり、また情報入力時の知覚者の内的状態や、状況要因など様々な要因を今後組み込む必要があるだろうが、対人認知研究において連続行動の処理プロセスに言及した初めてのモデルとしての意義を十分に果たしているように思う。

---

## 第 3 部

### 特性スクリプトと特性活性化モデルの提唱

---



### 第8章 特性スクリプトと特性活性化モデルの概略

第2部では、行動の逐次的処理という本論文の中心的な観点からいくつかの実証的なデータを提出し、仮設的な処理モデルを提出した。本章を含む第3部では、提出されたモデルのうち特性情報の生成過程に注目し、その認知メカニズムに深く検討を加えることを目的とする。

ここでは、抽出情報から、特性がどのように生成されるかという点に注目し、知覚者が行動からある特定の特性を生成するメカニズムを、スキーマ理論の観点から説明することを試みる。

## 第8章

---

### 特性スクリプトと特性活性化モデルの概略

#### 8-1 特性生成におけるスキーマの役割

社会的な情報に対する我々人間の認知には、新しく入力される情報だけでなく、その人自身の既有知識が大きな役割を果たす (Taylor & Fiske, 1991)。既有知識は入力情報の符号化や検索に影響を与えるが、こうした既有知識は「スキーマ」の問題として議論されることが多い (第2章参照)。

行動から特性が推測されるまでの過程は属性帰属研究の中で積極的に論じられていたが、Reeder (1985) (Reeder & Brewer, 1979も参考になる) の属性-行動間の関係をスキーマ概念によって説明するモデルが近年注目を集めている。ここでは、はじめにこのモデルを取り上げ、属性帰属研究にスキーマの概念がどのように取り込まれたのかを概観する。

#### Reederの理論

Reeder以前の帰属理論の中にも、Kelly (1972) の因果スキーマモデルのようにスキーマ概念を持ち込むものはあった。しかし因果スキーマモデルは、因果関係の形式に関する抽象化された知識体系のスキーマであり、あまりにも論理性を強調したため、現実の帰属過程と整合しないという批判があったことは先にも述べたとおりである。それに対して Reeder (1985) のモデルは、行動と特性がどのように結びついているかについての具体的な知識体系を問題にしている点で、より現実場面の対人認知に近づいたモデルであると考えられる。

Reederのモデルでは、普通、外向的な人は行動の上でも外向的な行動をとるといような対応関係があると想定する。ReederはこれをFigure 8-1-1の(a)のように太線で表しており、太線の対応関係が最も起こりやすいと考えている。しかし場合によっては外向的な人が内向的な行動をとったり、内向的な人が外向的な行動をとることもある。また、道徳的な行動のように社会的望ましさがかかかわってくると、たいていの人は社会的に望ましいと思われている行動をとろうとするため、行動の方向に偏りが生じてくる (Figure 8-1-1 (b))。さらに能力の場合には、高い能力を持つ人は高いレベルの能力と同時に低いレベルの能力を示すこともできるが、低い能力しかない人は、高いレベルの能力を示すことができないので、ここでも行動レベルの偏りが生じてくる (Figure 8-1-1 (c))。知覚者はFigure 8-1-1に見られるように行動と特性・属性間の関係に関する暗黙のスキーマを持っており、これをもとに他者の行動から特性・属性を推測しているとされている。

Reeder (1985) のモデルのように、ある事象とそこから推測される特性との関連をスキーマ理論によって説明するモデルが、Jones & Davis (1965) に代表される初期の属性帰属研究に較べて優れている点は、他者の行動のような社会的事象の生起理由に、複雑な因果推論のプロセスを仮定せず、より即時的な推測の過程があるということを説明できる点である。ただし、Reederのモデルは主に特性→行動の関係を問題にしており、本研究で問題としている行動→特性の処理過程を説明するには未だ不十分である。また、このモデルは即時的な判断の中にある程度の推論過程を仮定しているという点では、従来の属性帰属研究の域を出ていないと考えられる。

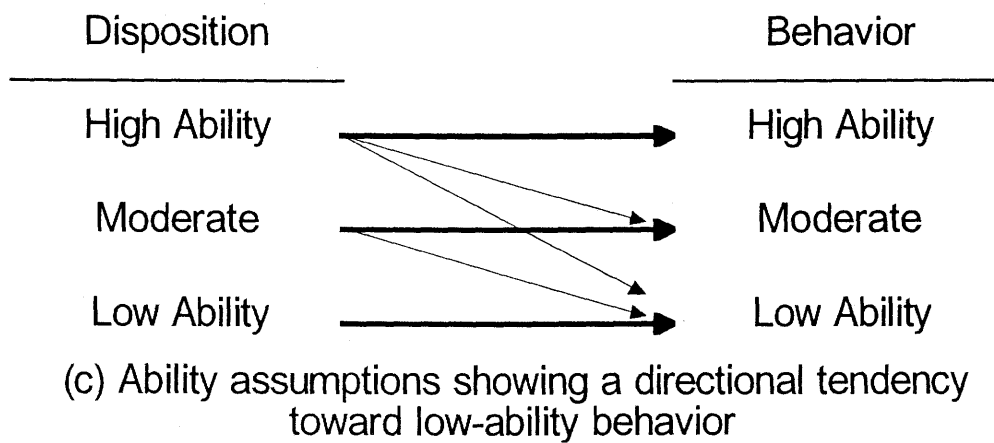
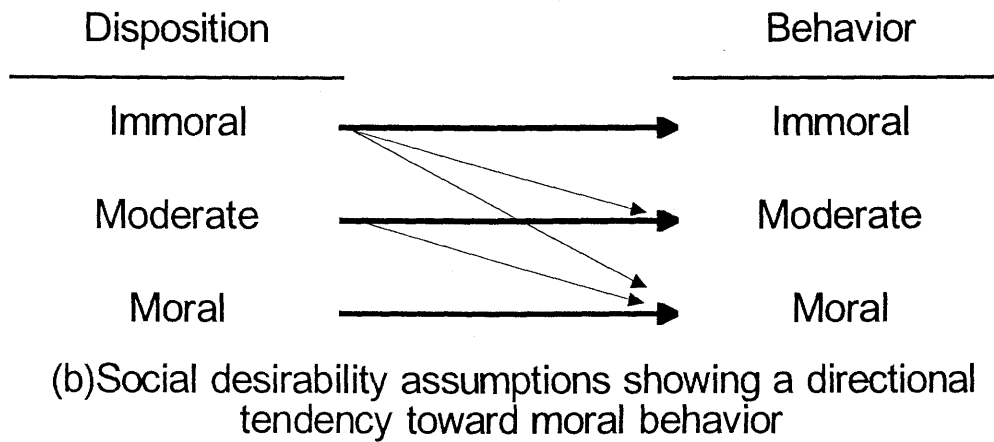
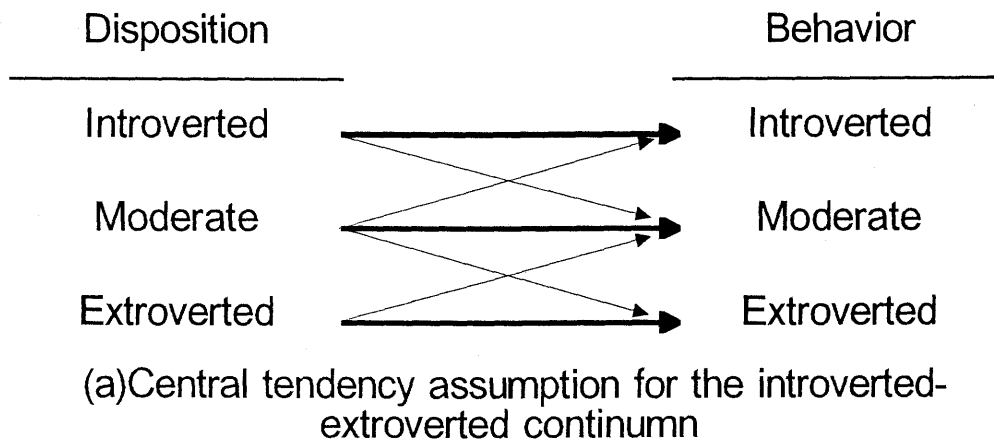


Figure 8-1-1. Schema between trait and behavior (Cited in Reeder, 1985)

一方、第2部で提出したような、行動の抽出と特性生成の関係を説明するモデルは、ボタン押し反応と特性生成が、連続行動の出現中、逐次的に行われているという点でReederの指摘するモデルよりもより即時的、言い換えれば「自動的」な処理が存在するのではないかと考えられる。

### スクリプト理論

こうした問いを解決する1つの概念として、Schank & Abelson (1977) のスクリプト理論をここでは取り上げる。スクリプト理論は、主に認知心理学の中の文章理解研究を中心に発展してきた。ただしスクリプトで問題となる事象が、日常の出来事であることが多いことから、文章理解を越えたより一般的な社会的情報の理解を説明する概念として用いられるようになった(鈴木, 1989)。

スクリプト理論は、ある目標に向かっての習慣化した行動の連鎖に関する一般性の高い知識構造である。例えばBower, Turner & Black (1979) の「レストランスクリプト」はその最も典型的な例である。我々はレストランで食事をするとき「お店に入る」「注文する」「食事を食べる」「勘定をする」といった行動の流れを自動的に進めることが多い。それは、自分と店員を含む双方に、レストランで食事をするという事象に対する共通の知識と期待が存在するからである。

この種のスクリプトは、その事象に関係する当人たちだけでなく、その事象を観察する第3者にとっても、当該の事象を解釈する上で重要な知識であると考えられる。そしてこうしたスクリプトがある特定の行動から特性を生成する認知的メカニズムを説明する上で有効なのではないかというのが第3部の主要な論点となる。

## 8-2 特性スクリプトの存在の示唆

ここで、特定の行動から特性を生成する認知的なメカニズムにスクリプトが介在しているのではないかという証拠を、第2部の研究から指摘すると、まず研究1・2から得られたボタン押し反応率のデータは、ある特定の行動の出現箇所で極めて高かったことが挙げられる。これは知覚者が連続行動情報を処理する際、知覚者間に共通した何らかの知識体系があり、その知識体系に従った反応があったのではないかということを示唆していると考えられる。また、繰り返し観察によっても抽出される行動の被験者内での一致が8割を越えていた。このことは、知覚者が単にランダムに行動を抽出しているのではなく、既存の知識に従った体系的な情報の抽出を行っていることを示していると考えられる。また抽出対象となりやすい行動から、特性が生成されやすいという研究3の示唆も併せて考えると、知覚者はある特定の特性と結びつきやすく、その特性と関連性の高い行動のスクリプトに関連した既存知識を持っているのではないかとここでは考えたい。

例えば「親切」という特性から思い浮かぶ行動として「倒れた自転車を起こす」「落とし物を拾って所有者に届ける」「電車の中でお年寄りに席を譲る」などの行動パターンを、また「几帳面」という特性から「丹念に部屋の掃除をする」「靴をそろえて脱ぐ」「コピーを丁寧にとる」などの行動パターンを、我々は容易に想像できるかもしれない。このように特定の特性概念に関連する行動パターンの既存知識を本論文では「特性スクリプト」と呼ぶことにする。そして本章では特性スクリプトが行動から特性を生成するメカニズムを説明する有効な概念であると考え、特性スクリプトをもとにした「特性活性化モデル」を提唱し、次にその概略を述べることにする。

### 8-3 特性活性化モデル(Trait activation model)

Figure 8-3-1は特性活性化モデルの概略を示したものである。特性活性化モデルでは、特性スクリプトとその上位概念である特性との間に階層的な連合ネットワーク構造を仮定する(Collins & Quillian, 1969; Stephan, 1989; Bower, 1991)。そして知覚者は、特性スクリプトと連続行動との照合を行う。ある特定の行動と特性スクリプトの内容が合致すると、特性スクリプトが活性化される。いったん特性スクリプトが活性化されると、その特性スクリプトとリンクした特性概念が活性化される。Figure 8-3-1に従って、具体的に説明すると、対人認知事態では、知覚者は連続行動を観察する時点で、ある程度特性スクリプトに関連する概念が活性化されている。そして、連続行動の中から、特性スクリプトに合致する情報が出現すると、その行動と特性スクリプトを照合することになる。この図では特性スクリプトaと特性スクリプトcが、連続行動内の特定の行動と照合されることになる。そして活性化された特性スクリプトa・cから、上位概念である特性a、特性cへの活性化の伝播がおこり、特性a・cが抽出された行動に対応する特性として、対人表象に組み込まれることになる。

ただしこのモデルは対人印象を形成するという処理目標が設定されたときに有効なモデルである。これは研究4にみられるように記憶群では特性の処理が行われていなかったということがその論拠となる。

また特性概念と特性スクリプトとの間に連合ネットワークモデルを仮定していること、特性スクリプトと行動との照合が特性概念の活性化の必要条件であることが特性活性化モデルの特徴である。

なお、現段階ではこのモデルを提示することにとどめ、第9・10章

でこのモデルに関連する実証的なデータを報告する。

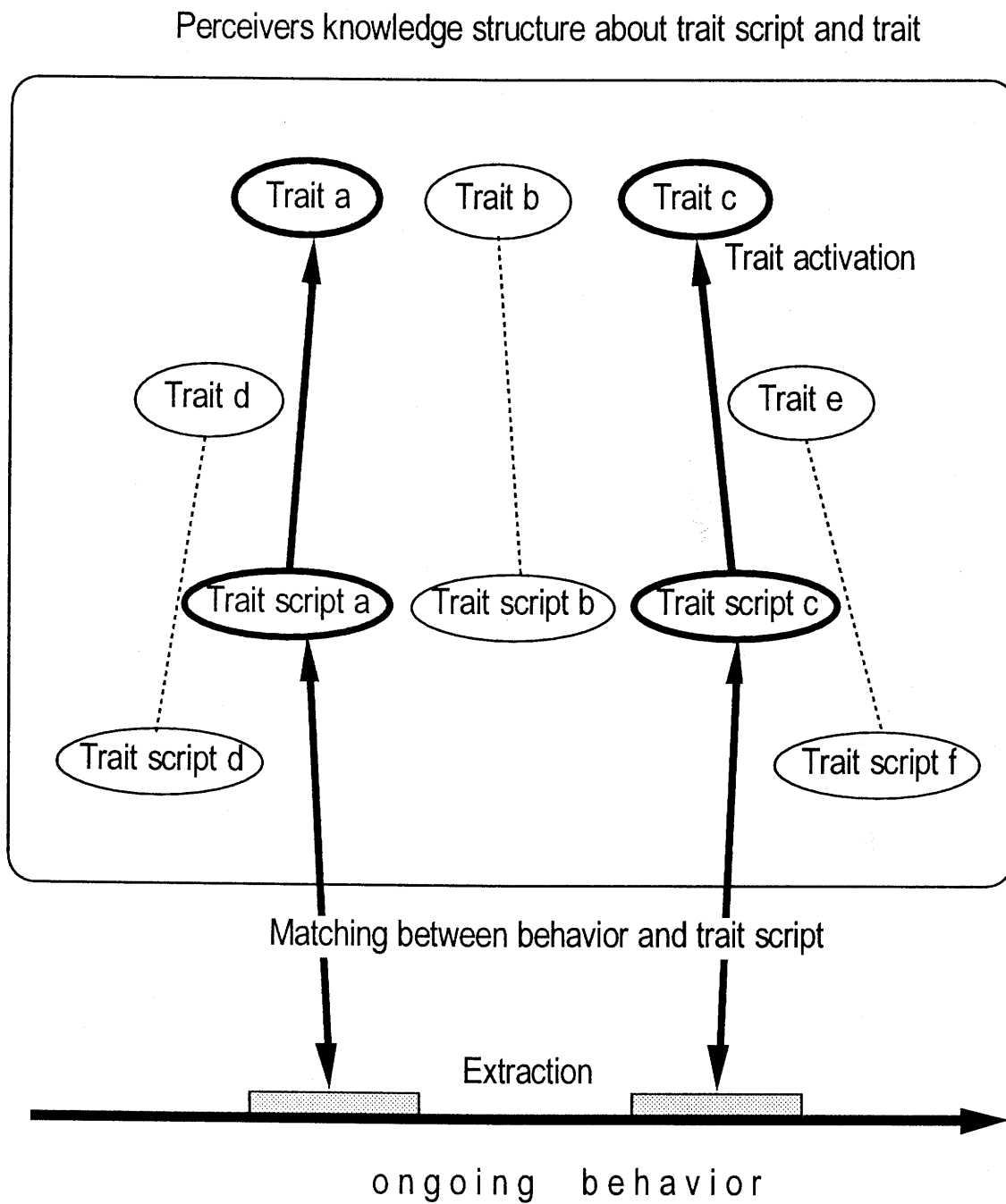


Figure 8-3-1. Trait activation model



## 第9章 特性活性化モデルの実証的検討

第8章では、連続行動から印象形成の手がかりとなる行動が抽出され特性と結びつけられるまでのメカニズムを説明するために、特性スクリプトの概念が提出され、さらにそれをもとにした「特性活性化モデル」が提出された。本章ではこのモデルを論証する幾つかの実証的データを報告する。

## 第9章

### 特性活性化モデルの実証的検討

#### 9-1 特性活性化と特性判断の反応時間（研究6）

##### 目的

第8章で指摘した特性活性化モデルによると、知覚者は連続行動の観察時点で、行動と特性スクリプトとの照合を行い、ある特定の行動と特性スクリプトとが合致すると、合致した特性スクリプトの上位概念である特性が活性化し、ターゲット人物の人物表象へと組み込まれる。

もしこの仮定が妥当であるとする、「ターゲットはXという特性を持っていたか」という質問を知覚者にした場合、ターゲットが実際にX特性に関連した行動をとっており、知覚者の表象内でX特性が活性化されると、判断の際には直接「X特性」を検索することによって、ただちに判断が行えると考えられる。一方、ターゲットがX特性に関連する行動をとらなかった場合、「いいえ」と判断するか、あるいはX特性に近いYという特性を検索することによって「はい」という判断に至るかもしれない。こうした場合、明らかにターゲットがX特性を持っているという判断と、X特性は持っていないという判断では、判断プロセスが異なると考えられる。

具体的にどのように判断プロセスが異なるかについてはCarlston & Skowronski (1986)のネットワークモデルの観点からの説明が有効であろう。彼らは特性判断のための記憶検索が2段階あることを指摘している。ネットワークモデルでは過去に推測された特性と、その特性に関連する行動はノードとして表象され、またそのノードはパスを通して人物

概念ノードと連結している (Figure 9-1-1)。

特性判断の第1段階では、判断に関連する情報を記憶表象内で活性度の高まっているものから検索する。たとえば特性X1の活性度が高まっている状態で「Aさんは特性X1な人でしたか」と尋ねた場合、表象内の特性X1を検索することによって判断材料が得られ、第1段階の検索は終了し、特性に関する判断が実行される。一方表象内にはない特性X3をAさんがもっていたかどうかという判断の場合には、第1段階の検索では特性X3は表象に組み込まれていないので、第1段階の検索だけでは特性判断の材料が得られない。そこで第2段階の検索に進む。第2段階ではこれまでの経験によって得ているAさんの表象を再度検索し、特性X3と関連した特性が活性化されていないか、あるいは特性X3に関連した行動ノードが活性化していないかどうかを確認する (Figure 9-1-2)。もしここで関連するノードとの照合に成功すると、照合されたノードの内容から判断がなされるが、最終的に照合材料が無かった場合には「いいえ」という判断がなされることになる。

特性判断に関する検索の2段階モデルはAllen & Ebbesen (1981) によって間接的にではあるが支持されている。

彼らは初めに1組の男女が勉強をしたりおしゃべりをしたりするシーンを4場面 (ビデオA) と、別の1組の男女がカフェテリアで昼食をとるシーンを4場面 (ビデオB)、ビデオで作成した。4場面はそれぞれ長さが30秒、60秒、90秒、180秒となっていた。被験者は、ビデオA、ビデオBのいずれかを視聴した後、ビデオに登場した人物について「彼女は真面目でしたか」とか「彼はうそつきでしたか」という特性判断の質問に「はい」「いいえ」の2枝強制選択法による回答を求められ、この時回答にかかった反応時間が測定される。

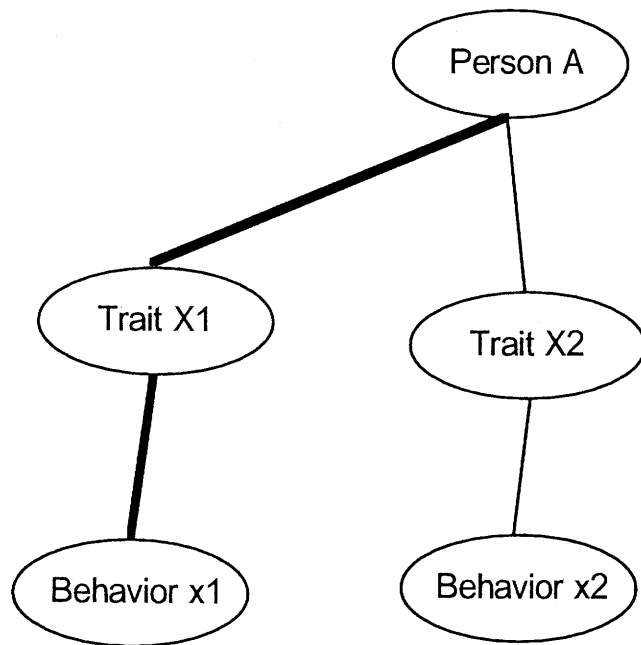


Figure 9-1-1 Associative network model of trait and behavior(1)

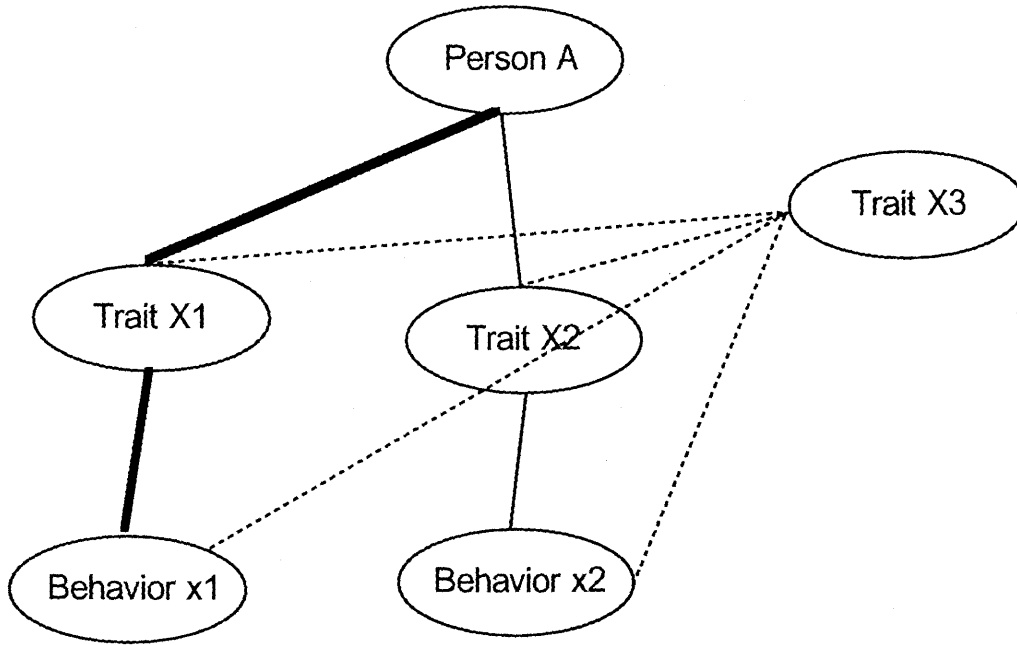


Figure 9-1-2 Associative network model of trait and behavior(2)

特性判断に用いられた特性語はビデオA、ビデオBいずれの場合も1場面につき12個で、さらにこのうちビデオの内容から6個の特性語は「はい」と回答すると正解、残りは「いいえ」と回答すると正解となるように構成されていた。

分析の結果、特性語への反応時間は、ビデオの長さが長くなるほど遅くなる傾向がみられた。しかし、各場面の内容から判断がしやすい特性（内容特定特性語）と、場面の内容からは簡単に予測しにくい特性語（非内容特定特性語）にわけて分析を行うと、非内容特定特性語ではビデオの長さによる判断時間の増加がはっきりとみられたが、内容特定特性語では、ビデオの長さによる反応時間の増加はみられず、どの場面でも反応時間はほぼ同じであった。

非内容特定特性語の判断の場合、場面の長さが長くなるほど判断に要する時間が長くなったということは、刺激人物がとった行動や推測された特性に関連する記憶全てに対して悉皆探索モデル (Sternberg, 1966, 1969) による検索を行っていたからだと言われている。一方、内容特定特性語の場合には、場面が長くなっても判断に要する時間が長くなる傾向はみられず、非内容特定特性語の判断にみられるような、悉皆探索型の検索ではなく、途中打ち切り型の検索が行われていたと考えられている。

このように、活性化された特性への判断と、活性化されていない特性への判断が異なる判断プロセスを踏んでいると仮定すると、次のような仮説が導き出せる。

もし行動の観察時点で、特性スクリプトとの照合により何らかの特性が活性化されているとすると、観察直後の特性判断において、活性化された特性に該当する判断の反応時間は、観察された行動から直接判断す

ることが難しい特性への判断よりも速いだろう。なぜなら活性化された特性への判断は、検索の第1段階の処理だけですむが、活性化されていない特性への判断は、検索の第2段階の処理を必要とするからである。しかし特性の活性化が起きない場合には、行動観察後に判断を求められた時、改めて特性を推測する必要が生じ、第2段階の検索を必要とするため、上記で予想した判断の速さに関する差異は生じないだろう。

そこで研究6ではあらかじめ特定の特性と結びつきやすい行動を選定し、その行動を観察させた直後に、行動と結びつきやすいターゲット特性語への判断と、行動とは直接結びつきにくいダミー特性への判断の反応時間を検討することによって上記の仮説を検証した。

## 方 法

**実験刺激** 研究2で用いた刺激ビデオをもとに、抽出対象となりやすい行動を、男性刺激人物の行動場面から6カ所、女性刺激人物の行動場面から6カ所を選定し、合計12の刺激クリップを作成した。これら12の刺激クリップを選択するにあたり、研究2においてボタン押し反応率が50%を越えていること、及び研究3の内省報告データから、推測された特性語が比較的1つの意味に絞れることを考慮した。抽出箇所はボタン押し反応率がちょうど50%を越えるところから、次に50%を下回るまでの部分を取り上げた。クリップの長さは刺激によって異なっているが、最も短いもので約5秒、最も長いもので約15秒程度であった。結果的には、研究3で報告された12の行動リストに該当する部分が刺激クリップとして採用された。ただしこれらの刺激クリップに関連するターゲット特性語の決定については、幾つかの場面で相反する2種類の特性語を報告している場合があった。例えば行動コードNo. 7の「パンフレットをみる」

では、刺激人物が「怠惰」であると報告する例と「注意散漫である」と報告する例がみられた。こうした場合には報告された数の多い方の特性をもとにターゲット形容語を決定した。

**被験者** 大学生36名。

**手続き** 被験者には12クリップを一つ一つ提示し、1クリップを見せる毎にビデオを停止させ、各クリップから受けた刺激人物の印象が、パーソナルコンピュータの画面に提示される5つの特性形容語にあてはまるかどうかを「はい」「いいえ」の2肢強制選択法で回答させた。この時、特性判断にかかった反応時間を1/100秒の精度で測定した。また5つの特性形容語は12場面全てでランダムに提示した。

**特性判断と従属変数** 各刺激クリップの評定に用いた5つの特性形容語のうち、1つがターゲット形容語、残り4つはダミー形容語とした。ダミー形容語はターゲット形容語とは独立の次元に属する形容語を、林(1978)の対人認知の基本3次元を参考にして選択した(Table 9-1-1)。各形容語が先に観察した行動に当てはまるかどうかを判断させたときの判断時間を従属変数とした。

**分析方法** ターゲット形容語に「はい」と反応したものだけについて、被験者毎に4つのダミー形容語の反応時間からからターゲット形容語の反応時間を引いた。この値は1クリップにつき合計4変数算出されるが、最終的にはさらにその4変数の平均値を算出し、これをターゲット形容語への反応時間とダミー形容語への反応時間の差の指標とした。平均値がプラスを示しているということはターゲット形容語の反応時間が短いことを示している。



Table 9-1-1

Target adjective word and dummy adjective words used in study 6

Scene No.		Target adjective word	Dummy adjective words			
1	男	注意散漫	きちょうめん	親しみやすい	信頼できない	清潔な
2	性	気が散りやすい	積極的な	温かい	危険な	嫉妬心のない
3	刺	だらしない	心の広い	正直な	責任感の強い	派手な
4	激	無邪気な	不幸な	温厚な	気長な	生意気な
5	人	用心深い	温かい	感情的な	外向的な	憎らしい
6	物	だらしない	臆病な	友好的な	暗い	知的な
7	女	きちょうめん	敏感な	弱々しい	恥知らずの	安心な
8	性	おおざっぱ	きれい好き	にぎやかな	冷静な	ゆったりした
9	刺	きちょうめん	気長な	堂々とした	不幸な	温厚な
10	激	まめ	暗い	控え目な	感情的な	良心的な
11	人	きちょうめん	堂々とした	せっかちな	思いやりのある	無気力な
12	物	まじめ	臆病な	地味な	活発な	素直な

## 結 果

初めに各刺激クリップ別にターゲット形容語への「はい」の反応率を確認したところ、レンジは62.5～87.5%で全体では72.6%だった(Table 9-1-2)。この数値は、おおむね、本研究で採用したターゲット形容語が、各刺激クリップから得られる特性として妥当であることを示しているとみなし、本研究の仮説の検証へと進んだ。

Table 9-1-3はターゲット形容語へ「はい」と反応した被験者のデータだけを分析対象とし、ダミー形容語との反応時間の差に関する指標を各刺激クリップ毎に算出したものである。分析の結果、12の刺激クリップ中、10の刺激クリップの反応時間の差の平均値がプラスの方向を示した。帰無仮説を0としてt検定を行った結果、12クリップ中5クリップで帰無仮説が棄却され、また1クリップで傾向差が認められた。

## 考 察

12の刺激クリップ中、10の刺激クリップでターゲット形容語への反応時間が長く、さらにこのうちの6クリップの反応時間の差が有意であった。このことはターゲット形容語への判断が、ダミー形容語への判断よりも早い傾向にあることを示唆していると考えられる。

研究6で設定したターゲット形容語は、各行動クリップに見られる行動に当てはまりやすいものを用いていたが、被験者は行動観察によってほぼ本実験で設定したターゲット形容語に近い特性を活性化させていたと考えられる。このことから、知覚者は観察された行動と特性スクリプトを照合させ、照合の結果、特定の特性スクリプトが喚起されると、そのスクリプトにリンクした特性も喚起され、結果的に活性化された特性概念を対人表象に組み込んでいる事を示していると考えられる。

Table 9-1-2

'Yes' response ratio to the target adjective words

Scene	Yes(N=32)	Percentage
1	21	62.5
2	27	75.0
3	23	68.8
4	17	78.1
5	19	71.9
6	22	81.3
7	24	65.6
8	22	75.0
9	27	62.5
10	28	87.5
11	27	75.0
12	23	71.9
Total		72.6

Table 9-1-3

Means of time difference between target adjective word and dummy adjective words

Scene No.	N	mean( $\times 0.01S$ )	mean(LOG10)	SD(LOG10)	T
1	21	75.21	0.04	(0.22)	0.81
2	27	38.62	0.12	(0.16)	3.78 ***
3	23	34.91	0.09	(0.18)	2.53 *
4	17	29.03	0.06	(0.16)	1.51
5	19	14.34	0.05	(0.18)	1.28
6	22	45.76	0.11	(0.13)	4.22 ***
7	24	17.13	0.04	(0.21)	1.03
8	22	-45.15	-0.01	(0.18)	0.35
9	27	18.55	0.07	(0.17)	2.15 *
10	28	24.22	0.07	(0.18)	1.91 +
11	27	30.69	0.07	(0.16)	2.14 *
12	23	-25.79	-0.01	(0.36)	0.08

+, $p < .10$  ; \*, $p < .05$  ; \*\*, $p < 0.1$  ; \*\*\*, $p < .001$

## 9-2 印象形成の手がかりとして抽出されやすい行動の 記憶の残り易さについて（研究7）

### 目 的

研究6では印象形成の手がかりとして抽出されやすい行動から、ある特定の特性が活性化されていることが示唆された。こうした特性活性化が連続行動内の個々の行動と知覚者自身のもつ特性スクリプトとの照合によるものであるとすると、特性スクリプトとの照合を受けやすい情報は、それ以外の情報と比べて相対的に精緻な処理を受けているのではないかと考えられる。研究6では記憶内に表象された特性の検索を問題にしたが、研究7では行動情報に焦点を当て、印象形成の手がかりとして抽出されやすい行動の記憶の残り易さを検証する。

上述したように、抽出されやすい行動が、特性スクリプトとの照合を受けていることでより精緻な処理を受けているとすると、特性スクリプトとの照合をうけない、言い換えれば抽出されにくい行動に比べて記憶に残りやすいことが予想され、この事を研究7では検証した。

### 方 法

**被験者** 大学生86名（削除ビデオ群43名，完全ビデオ群43名）

**刺激** 研究2で用いた2人の刺激人物のビデオのうち、男性刺激人物のビデオを用いた。

**条件の操作** 研究7は研究5の印象評定課題後に実施した。従って研究5と同様に、提示するビデオの種類（削除ビデオ・完全ビデオ）によって実験条件の操作を行った。

**手続き** 研究5の印象評定課題終了後、行動自由再生用の記入用紙を被験者に配布し、ビデオに登場した男性刺激人物の行動のうち覚えてい

るものを自由に記述させた。

**従属変数** 研究7では、行動再生率という指標を求めそれを従属変数とした。行動再生率の算出方法には、次の2段階の手続きをとった。はじめにこの実験の内容を知らない2人の実験協力者に、研究5で使用した完全ビデオを観察させ、刺激人物の行った行動を1つ1つ箇条書きで回答させた。そして2人の実験協力者の回答内容を、更にもう一人別の実験協力者が照合し、刺激人物がビデオ内でとっている行動のリストを作成した。次に自由再生によって得られたセンテンスが、行動リストの中のどの行動と一致しているかを、3人の実験協力者に判断させ、3人が一致して正しい再生内容だと判断したセンテンスに含まれる行動リストの個数をカウントした。この時、被験者の回答した1センテンスの中に複数の行動リストに該当する行動が含まれている場合には、行動リストの内容をもとに行動数をカウントした。最終的に、抽出行動、非抽出行動別に再生された行動リストの数を合計し、抽出行動・非抽出行動の総リスト数で除した割合を算出し行動再生率とした。抽出行動のリスト数の合計は15、非抽出行動のリスト数の合計は95であった。

## 結 果

Table 9-2-1は、完全ビデオ群（抽出対象となりやすい行動をそのまま提示した群）の抽出行動と非抽出行動の再生率を示したものである。対応のあるt検定の結果、抽出行動の再生率が非抽出行動の再生率よりも有意に高かった( $t(42)=9.8$ ,  $p<.001$ )。また、削除ビデオ群と完全ビデオ群で非抽出行動の再生率を比較したものがTable 9-2-2である。t検定の結果、非抽出行動の再生率は削除ビデオ群、完全ビデオ群間に有意な差は見られなかった( $t=0.32$ , n. s.)。

Table 9-2-1

Mean recall ratio of trait relevant (irrelevant) behavior in the complete video group

	Trait relevant behavior	S.D.	Trait irrelevant behavior	S.D.	t(df)
Complete video group	0.40	(0.17)	0.16	(0.06)	9.8(42) ***

\*\*\*:  $p < .001$

Table 9-2-2

Mean recall ratio of trait irrelevant behavior in the cutting video group and the complete video group

	Cutting video group	S.D.	Complete video group	S.D.	t
Trait irrelevant behavior	0.16	(0.06)	0.16	(0.06)	0.32 n.s.

## 考 察

抽出行動は非抽出行動よりも相対的に記憶に残りやすい事が示された。この理由として、本研究で指摘する特性活性化モデルからの説明が有効であると思われる。対人認知事態では、印象形成の手がかりとして利用されやすい行動は、特性スクリプトとの照合が行われ、照合に成功すると特性スクリプトの上位概念である特性が活性化するのではないかというのが特性活性化モデルの考え方である。そのため、抽出行動は人物表象内で特性とのリンクが形成されることにより、再生の際、特性が情報検索の手がかりの役目を果たしていたからだと考えられる。一方非抽出行動の場合は、抽出行動のように特性とのリンクが形成されない。そのため再生の際、抽出行動ほどの再生成績が得られなかったものと考えられる。

また非抽出行動の再生率に完全ビデオ群と削除ビデオ群で有意な差が見られなかった。このことは抽出行動だけが独立に符号化され表象されていることを示唆していると考えられる。連続行動のように各行動間の文脈的なつながりある情報においては、抽出対象となった行動がその前後の行動と連合し、表象されている可能性も考えられるが、本研究では、そうした結果は見られず、抽出対象となりやすい行動だけが符号化されていたと考えることができるだろう。

しかしながら、今回の結果にはまだもう1つの解釈の可能性が残されている。それは抽出行動として取り上げた情報が、はたして特性スクリプトと照合されやすいために記憶に残りやすかったのか、それともその行動が連続行動の中で顕現性が高かったから記憶に残りやすかったのかが明確に区別されていないということである。そこで研究8では、抽出対象となりやすい行動の性質について補足的な実験を行う。



### 9-3 抽出行動の動作特性の心理的評価（研究8）

#### 目 的

研究7において、抽出行動は非抽出行動に比べて相対的に記憶に残りやすいことが示された。おそらく抽出行動が記憶に残りやすかったのは特性スクリプトとの照合によって、より精緻な処理を受けたからだと考えられるが、それ以外の要因からの説明も否定できないことが前節において指摘された。

たとえばNewtson, Engquist & Bois (1977)は、ブレイクポイントでボタンが押されやすい理由として、ブレイクポイントでの動作が大きかったり、素早い動作をするなど、動きの変化が大きいのからなのか（動作仮説）、それとも動作の変化を主たる要因とするのではなく、その前後との文脈的な解釈によってブレイクポイントになりやすい動作の状態があるのか（状態仮説）を検証し、動作仮説を支持する結果を得ている。これは研究8にも指摘される点である。例えば抽出行動のほうが非抽出行動よりも動作が素早かったり、大きな動作がみられるなど、動作自体の目立ちやすさによる物理的な要因が記憶を促進させた可能性が指摘される。そこで研究8では抽出行動が、それ以外の非抽出行動よりも目立ちやすい動作だったのかを検討する。

なお動作の目立ちやすさの評価として、本来ならば次の2つの検証方法があり得ると考えられる。1つは動作自体の変化をコンピューターグラフィックなどによって測定し、その変化量を幾何的に算出する方法である。ただしこうした方法が、被験者自身の動作変化に対する認知的な処理と十分に対応づけて論じることができるのかどうかは、今日の心理学の中ではまだ明らかにされていない。そこで第2の方法として本研究では知覚者自身に動作の変化の評定をさせ、その心理的な評価から動作

の目立ちやすさの問題を明らかにすることを試みる。

## 方 法

**被験者** 大学生116名

**実験材料** 研究6で用いた12の刺激クリップのうち、男性刺激人物の6つの刺激クリップの中から任意に5クリップを選択し、抽出行動とした。さらに研究2を参考にボタン押し一致率の極めて低い部分5カ所を選定し、非抽出行動とした。従って実験材料として用いたのは10の刺激クリップである。

**手続き** 実験は1～4人を一組として行った。被験者には次のように教示した。「この実験では、人の動作を私たちがどうやって理解しているかということを調べています。これからある一人の人物の動作をビデオで観察していただきます。」この教示に続いて被験者に刺激クリップを1つ1つ提示し、1クリップが終わる毎に、その動作の素早さを5段階で評定させた。具体的には「5. 非常にゆったりしていた」「4. ややゆったりしていた」「3. 普通だった」「2. やや素早かった」「1. 非常に素早かった」の5つの選択肢を設定した。

## 結 果

Figure 9-3-1は、10の刺激クリップに対する動作評定の平均値を示したものである。刺激クリップに対する動作評定値を従属変数とした1要因被験者内分散分析を行ったところ、有意な主効果がみられた( $F(9, 1026) = 22.55, p < .001$ )。多重比較(Duncan法)を行ったところ、第1・3・8クリップが最も動作がゆったりしていると評定され、第2・6クリップが最も動作が素早いと評定された。しかしグラフをみてもわかる

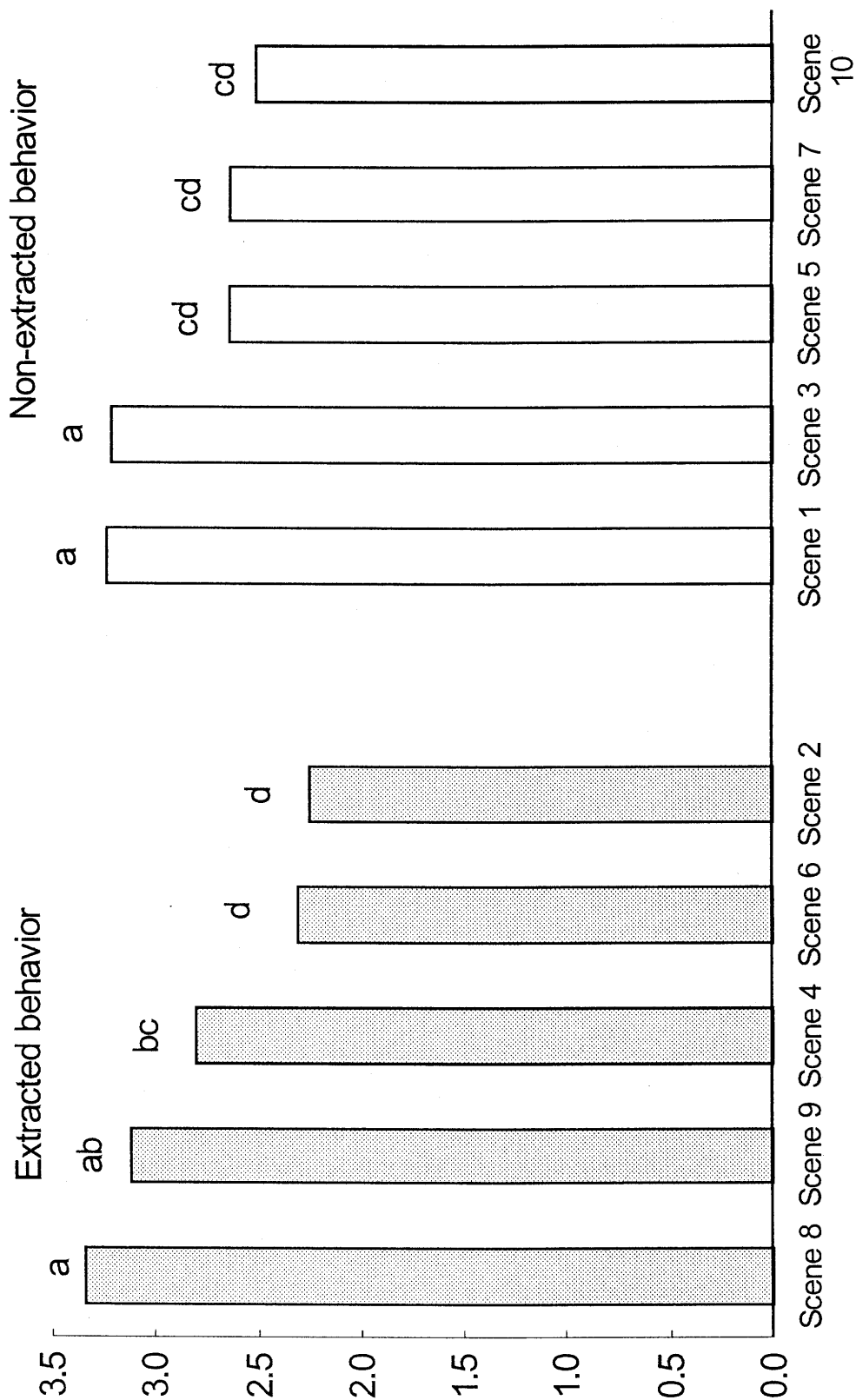


Figure 9-3-1. Psychological ratings of extracted behavior and non-extracted behavior

Note: There are no significant differences among the same alphabet.

とおり抽出行動、非抽出行動という分類によって、評定に顕著な違いがみられているわけではなかった。

## 考 察

結果をみても明らかなように、抽出行動の方が動作が素早いと評定される傾向はみられなかった。この事から動作の素早さなどにより抽出行動の方が目立ちやすかったのではないかという指摘は否定されたことになり、研究7の結果が特性スクリプトとの照合によるものであるという解釈が有効であることが示唆された。

### 9-4 特性スクリプトの具体的な内容の検討（研究9）

#### 目 的

研究6・7・8では特性活性化モデル支持するいくつかの証拠が見られたが、本論文ではまだ特性スクリプトの具体的な内容に関する検討を行っていない。特性スクリプトは知覚者自身もっている既存知識であると仮定したが、実際に本研究で仮定するような特性スクリプトを知覚者が持っているのかを明らかにしておくことも必要であると考え。そこで研究9では自由記述法を用いて特性スクリプトの具体的な内容を検討することを試みる。

ただしここでは特性スクリプトの具体的な内容の構造を明らかにしようとするのではなく、次のような観点を中心に検討を行うことにする。

これまで知覚者は連続行動内の非常に短い時間帯に出現する行動を印象形成の手がかりとして抽出していた。そこでここでは、回答者の特性スクリプトの内容がこうした短い単位の行動によって報告される性質の

ものなのかどうかを確認する。

## 方 法

**被験者** 専門学校に通う女子学生42名

**調査方法** 講義時間を利用し、質問紙に回答を求める形式で集団で実施した。

**質問紙の構成** 研究6で取り上げたターゲット特性語から【気が散りやすい】【だらしない】【無邪気】【用心深い】【几帳面】【おおざっぱ】【まめ】という7つの特性形容語を取り上げ、「これから人の性格をあらわしている幾つかの言葉をみなさんにお見せします。みなさんはこの言葉から、具体的にどんな行動が思い浮かびますか。思いついた行動をいくつでも自由に書いて下さい」と教示し、回答を求めた。1つの形容語について、最大4つの行動まで回答できるよう、回答欄を設定した。

## 結 果

7つの特性形容語から合計547例の行動記述を得た。これらの記述がどれくらいの時間の間に出現する可能性のある行動かを確認するために、調査者本人を含む3名の評定者が、得られた記述内容を「1. 10秒以内に生起する可能性がある行動か」「2. 少なくとも10秒以上はかかるが1分以内には生起する可能性がある行動か」「3. 1分以上かかる行動か」「4. 複数回観察しないと特性語と結びつかない行動か」「5. 行動というよりもある特定の「状態」を表現したものか」「6. それ以外」という6つの選択肢の何れに該当するかを独立に判定した。Table 9-4-1は得られた行動記述の頻度、及び3人の判定者のうち2者以上が

Table 9-4-1

Frequencies of total scripts and frequencies of scripts coincided by more than two of three judges

	Total frequency of scripts	More than two judges coincided	%
だらしない	112	80	71%
きちょうめん	96	64	67%
用心深い	80	47	59%
気が散りやすい	62	43	69%
まめ	70	32	46%
おおざっぱ	63	32	51%
無邪気	64	30	47%
Total	547	328	

同じ選択肢に該当すると判定した行動記述の頻度を特性語別に示したものである。547例の行動記述のうち328例（60%）で2者以上の一致が見られた（Appendix 9-4-1:巻末に添付）。またTable 9-4-2はこれら328例の行動記述が、どの選択肢に該当していたか、そのパーセンテージを示したものである。ただし「6. それ以外」は集計から除外してある。

Table 9-4-2をみると、概ねどの形容語から得られた行動記述も10秒以内に生起すると予想される行動が見られたが、特性語によって該当する選択肢に大きな偏りも見られた。各特性語から得られた行動記述の特徴は次の通りである。

【用心深い】は「10秒以内に生起する可能性がある行動」が全体の75%と極めて高い数値を示している。なかでも「火の元・カギを確認する」という記述が多く見られた。

【気が散りやすい】という特性語では、「10秒以内」と、「1分以上」が全体の9割近くを占めている。「10秒以内」と判断された行動記述の中には「キョロキョロする」という記述が多く見られ、また1分以上では「音楽を聴きながら勉強する」のように、2つのことを同時にすることを挙げる例が見られた。

【まめ】では「10秒以内」が3%と極めて低い値であった一方、「複数回観察しないと特性語と結びつかない」という回答が44%と、7つの特性語の中で最も高い数値であった。複数回観察を必要とする行動としては「定期的に友人、知人に手紙や電話をする」「毎日夫の弁当をつくる」などが挙がっていた。

【だらしない】では、行動に該当する記述が極めて少なく、むしろある特定の状態を表現した記述が多く見られた。例えば服装が乱れている、部屋が汚いに関連した内容の記述が多かった。

Table 9-4-2

Cross table of trait with selection items (From less than 10 seconds to not behavior but state)(%)

	Less than 10 seconds	10~60 seconds	More than a minute	Repeated observation	Not behavior but state
だらしない	11.3%	0.0%	1.3%	17.5%	70.0%
きちょうめん	26.6%	4.7%	29.7%	17.2%	21.9%
用心深い	74.5%	2.1%	8.5%	4.3%	10.6%
気が散りやすい	46.5%	0.0%	41.9%	4.7%	7.0%
おおざっぱ	34.4%	0.0%	9.4%	18.8%	37.5%
まめ	3.1%	0.0%	37.5%	43.8%	15.6%
無邪気	16.7%	0.0%	33.3%	13.3%	36.7%
Total	28.9%	1.7%	20.4%	16.6%	32.4%



## 考 察

研究9では、研究6で得られたターゲット形容語をもとに、これらの特性語に関連する具体的な行動を回答者に求め、その内容から、その行動がどれくらいの生起時間で出現するかを検討した。

その結果、何れの形容語においても、そこから予想される行動が10秒以内で出現するような生起時間の短い行動が認められた。このことは本研究で仮定する特性スクリプトを知覚者が既有知識として持っていることを示唆していると考えられる。しかしこうした知識は特性形容語によってかなりの偏りが見られ、例えば【用心深い】のように10秒以内に生起すると予想される行動の割合が極めて高いものもあれば、【まめ】のように極めて低いもの、【だらしない】のように、行動というよりも状態から該当する記述が多く見られるものがあった。

こうした結果からは、極めて短時間の行動観察によっても特性が活性化されやすい行動、同一行動を複数回観察しないと特性が喚起されない行動、行動というよりも当該人物の状態によって喚起されやすい特性があるのではないかということが示唆される。

### 9-5 第9章のまとめ

本章では8章で指摘した特性スクリプトの概念と、その概念をもとにした特性活性化モデルの観点からいくつかの実証的な研究を報告した。これら4つの実証的研究から次点が指摘できる。

- ・連続行動の観察場面で、ある特定の印象形成の手がかりとなる行動が出現している最中に、逐次的に特性情報が活性化されている（研究6）。
- ・印象形成の手がかりとして、抽出対象となりやすい行動は、抽出対象となりにくい行動に比べて記憶に残りやすい（研究7）

- ・抽出対象となりやすい行動の動作が、知覚者にとって大きな変化のある、素早い行動ではなかった。つまり抽出対象となりやすい行動が、動作が素早いことによって目立ちやすかったために記憶に残りやすかったわけではなかった（研究8）。
- ・知覚者は、特性に関連した、比較的生起時間の短い行動についての既知知識（特性スクリプト）を持っていることが確認された（研究9）。

### 第10章 特性概念の活性化が行動の抽出に与える影響

特性活性化モデルでは、特性スクリプトが上位の特性概念とリンクした階層構造を仮定している。そのため、特性概念が活性化されるとその活性は特性スクリプトにも伝播することが考えられる。

そこで本章では本論文の最後の実証研究として、あらかじめ特性概念の活性化の度合いを操作することによって、連続行動の抽出処理がどのように変化するかを検証する。

## 第10章

---

### 特性の活性化が行動の抽出に与える影響

#### 10-1 対人印象の形成場面で事前情報が 連続行動の抽出処理に及ぼす影響 (研究10)<sup>8)</sup>

##### 目 的

近年の対人認知研究では、パーソナリティ特性やステレオタイプにかかわる事前情報が、他者の行動情報の記銘や検索の段階で、バイアスがかかることが報告されている (Cohen, 1981; Hastie & Kumer, 1979; Srull, 1981; Wyer & Gordon, 1982)。

例えばCohen (1981b) は、刺激人物が「司書」あるいは「ウエイトレス」であるという情報を、被験者に事前に告げると、ビデオ観察後の再認課題において、事前に告げられた職業情報に合致する行動の再認成績が高くなることを報告している。またビデオ観察以前に職業情報を提示した場合のほうが、ビデオ観察後に職業情報を示した場合よりも、職業情報に関連する情報の再認成績が高いことも報告されている。このことはバイアスが検索段階よりも記銘段階に及ぼす影響のほうが大きいことを示唆していると考えられる。

このように事前情報が、情報の記銘段階でバイアスを生じさせるとする知見が見られたわけだが、これは他者情報が知覚者に入力された後の段階を問題にしていると考えられる。それに対して本論文の指摘する抽

---

<sup>8)</sup> 宮本聡介 1994 事前情報が他者の連続行動の認知に与える影響 日本心理学会第58回大会発表論文集, p. 166.

出とは、他者情報を知覚者自身に取り込む段階を問題にしており、これは、記銘段階以前に働く処理段階であると考えられる。そのためCohen (1981b)に見られるように、事前情報によるバイアスが、情報の記銘段階で働いていることは示唆されているものの、このことから事前情報の影響が、情報の記銘段階で働くことは早急なように思われる。なぜなら連続行動のように時系列的に入力される情報では、記銘段階以前に働く、「抽出段階」にも注目し、抽出段階において事前情報のバイアスが生じているかどうかを確認する必要があると考えられるからである。

そこで本研究では、情報の記銘段階以前に生じる情報の抽出段階に焦点を当て、事前情報によるバイアスが、情報の抽出段階でも生じているかどうかを検討することを目的とする。

また事前情報によって認知される行動にバイアスが生じるとすると、最終的に形成される印象も事前情報に沿った印象に偏るのだろうか。もし特性がターゲット人物固有の特性と解釈され、印象判断の材料として利用されるのであれば（研究6）、印象判断の際、ターゲット人物の印象は事前情報に偏ったものになると考えられる。そこで研究10では行動情報の知覚の段階だけではなく、最終的な印象判断の段階でも、事前情報のバイアスが生ずるかどうかについても補足的に検討を行う。

## 方 法

**行動場面の作成** 本実験で用いる刺激（行動場面）は以下の2段階の過程を経て作成された。

第1段階では望ましさ、親しみやすさおよび活動性を表現する行動場面を4人の実験者がそれぞれ10場面ずつ合計120場面記述した。これら

3種の次元は独立であることが報告されており(林, 1978), 印象評定時に各次元の影響が取り除かれるよう配慮して採用した。次に著者を含む5人の実験者で協議を行い, 最終的にビデオ刺激の作成に適した20場面を選択した。場面選択の基準として, ビデオ収録が可能なこと, 日常生活場面で観察可能な行動であること, 極端に目立ったり不自然な行動でないことを考慮した。次にこの20場面について, 複数の人物と相互作用をする1人の男性の行動を1場面あたり約30秒のビデオテープに収録した。

第2段階では16名の被験者に1行動場面ずつビデオを見せ, 各場面について9項目の形容詞対7段階尺度上で印象評定を行わせた。この評定結果をもとに印象項目を因子分析にかけ「親しみやすさ」「望ましさ」「活動性」の3因子を抽出した。そして各因子の合成得点を用い, 3つの次元の各々について平均得点の最も高い行動場面を4つずつ選択した。この時2次元以上にわたって高い得点を示した行動場面については, 場面が複数の次元の重複した印象を持っていることから除外した。各場面の具体的な内容と各次元別の平均印象評定値及びそれぞれの場面が提示された順序をTable 10-1-1に示す。これ以降12の行動場面のうち親しみやすさ次元で高い値を示す行動場面を「親しみやすさ行動場面」, 望ましさ次元で高い値を示す行動を「望ましさ行動場面」, 活動性次元で高い値を示す行動を「活動性行動場面」とする<sup>9)</sup>。

---

<sup>9)</sup> 「友人と別れて一人で芝生に横たわる」という行動場面は親しみやすさ次元の得点が高く, 望ましさ次元, 活動性次元の得点がそれよりも低いなど, 親しみやすさ行動場面に該当する行動場面であったが, 刺激人物の行動があまりにも少なく, 被験者からの適切な反応を求められないのではないかと考え, ここは採用しなかった。同様に, 「消しゴムの消しかすを集めて捨てる」という行動場面は, 望ましさ行動場面に該当すると考えられるが, 実験者を含む5人の刺激作成者による協議の結果, 行動があまりにも奇異で, 大学生の行動としては不適切な印象を被験者に与えるのではないかと考えここでは採用しなかった。

Table 10-1-1

Mean impression scores of each scene for experimental stimuli

Scene No.	Contents of each scene	Familiarity dimension	Desirability dimension	Activity dimension
Familiarity behavior	1 友人に食堂で席をゆずる	16.4	12.4	13.1
	4 友人にいたずらをする	17.4	11.3	14.3
	7 大口をあけて笑う	17.4	12.4	15.0
	10 パン屋でパンを返品する	12.7	11.3	11.1
Desirability behavior	2 難しそうな本で調べものをする	10.4	16.3	15.3
	5 布巾でテーブルにこぼれた醤油を拭く	14.3	17.3	15.4
	8 信号が青になるまで待つ	12.0	17.0	14.4
	11 パソコンを使って勉強	9.4	14.2	12.0
Activity behavior	3 ビラを受け取るのを拒否	9.9	13.0	16.1
	6 自転車をもうスピードでこぐ	11.4	8.6	15.9
	9 ジャージを着て筋トレ	11.4	12.8	16.0
	12 腰に手をあててジュースを飲む	12.4	10.5	13.4
	エレベータで人を待ってドアを開ける	15.8	15.4	14.1
	忘れ物の財布を拾って、持ち主に渡す	15.4	16.1	13.7
	倒れている自転車を直す	15.4	16.1	16.3
	知人の消しゴムが机から落ちたのを拾う	14.7	14.9	14.1
	友人に飲み物を買ってきて差し出す	14.2	11.4	14.7
	友人と別れて一人で芝生に横たわる	13.5	11.4	11.3
	掲示板でメモを取り、電話をかける	12.9	15.8	16.4
	消しゴムの消しかすを集めて捨てる	12.3	17.6	13.9

**条件の操作** 本研究では事前情報によって望ましさ群，親しみやすさ群，ニュートラル群の3つの群を設けた。望ましさ群，親しみやすさ群は事前情報による特性喚起の操作をした実験群であり，ニュートラル群は事前情報によって特性が喚起しない統制群として設定した。各群の操作は以下のように文章で提示した。

**親しみやすさ情報**：彼は〇〇大学の3年生です。授業にはあまりでませんが，ノートを貸してくれる友人が多数いるので試験には困りません。イベントサークルに所属しており，後輩からも慕われています。また最近，友人の恋の悩みを聞いて朝まで飲み明かすこともありました。彼のアパートの部屋はきれいとはいえませんが，なぜか人が集まってきます。部屋には猫が寄りついていて，夜になると餌をもらいにきます。

**望ましさ情報**：彼は，〇〇大学の3年生です。授業には毎日です。ノートを欠かさずとっています。語学関係のサークルに所属しており，スピーチ大会で入賞したこともあります。また，最近では環境問題にも興味を示しており，ゴミを分別して出したり，牛乳パックの回収に協力しています。彼のアパートはいつも整理整頓されています。部屋には観葉植物がおいてあります。

**ニュートラル情報**：彼は〇〇大学の3年生です。いたって平均的な大学生活を送っています。授業は単位を落とさない程度に出ています。暇なときはサークルに出たり，アルバイトをしています。友人はサークル関係が主です。コンビニで雑誌を立ち読みしている姿をよく見かけます。部屋の掃除は週1回，洗濯はたまったらやる，という生活を送っています。



す。夜はプロ野球ニュースをよくみています。

**事前情報の内容の妥当性の確認** 16人の評定者（親しみやすさ情報5名，望ましさ情報5名，ニュートラル情報6名）に各文章を読ませた後，その印象を6項目の形容詞対尺度項目で評定させた。6項目の形容詞対尺度は，場面の選択で用いた9項目のうち望ましさ因子，親しみやすさ因子に含まれる6項目であった。各因子に対応する合成得点を指標とし，事前情報を要因とする1要因分散分析の結果，親しみやすさ情報では親しみやすさ次元の印象が，望ましさ情報では望ましさ次元の印象が有意に高得点を示し，またニュートラル情報では2つの次元が中性値に近い値を示した。以上の結果から事前情報の内容が妥当であることを確認した (Table 10-1-2)。

**被験者** 大学生101名（男性51名，女性50名）を3群にランダムに割り当てた。但し刺激人物と面識のあった男女各2名を分析から除外し，最終的に望ましさ群32名，親しみやすさ群32名，ニュートラル群33名を分析対象とした。

**手続き** 被験者には初めに次のような教示を行った。「これから1人の男性（Aさん）の行動をビデオでお見せします。ビデオを観察中その男性がどのような人物かイメージしてください。但し，いきなりビデオを見たのではうまくAさんの印象を形成することができないかもしれません。そこでビデオを見る前に，Aさんに関する簡単な紹介文をお見せします」この教示に続いて事前情報を提示し，読み終えたことを確認後，事前情報から得られる印象を26項目からなる形容詞対上で評定させた（印象評定1）。印象評定終了後ビデオ観察課題を実施し，同時に行動抽出課題を行った。但しビデオ観察課題に入る直前，被験者に刺激人物

Table 10-1-2

Preliminary judgment scores for prior information

	Familiarity information	Desirability information	Neutral information
Familiarity dimension	17.8a	12.8b	13.4b
Desirability dimension	8.8b	19.4a	11.4b

Note : There are no significant differences among the same alphabet. 12 is a neutral point.

の顔写真を提示し、ビデオ観察中、刺激人物をすぐに確認できるようにした。ビデオ観察終了後直ちに2回目の印象評定を行った（印象評定2）。

**行動抽出課題** ビデオ観察中、「印象形成の手がかりとなる行動が出現したらボタンを押し、その行動が終わったらボタンを離す」ように教示した。そしてボタンを押し始めた時間、ボタンを押し続けている時間、ボタンの押された回数を1/100秒単位で計測した。行動抽出課題からは次の2つの指標を算出した。

- ・ **ボタン押し回数** (Frequency of Button Pressing: 以下FBP) : ビデオ観察中被験者がボタンを押した回数。FBPが多いということは連続行動から印象形成の手がかりとなる行動を抽出した量が多い事を示している。
- ・ **ボタン押し反応率** : ビデオを1秒間隔で合計360のインターバルに分割し、それぞれのインターバルで被験者がボタンを押した反応率（百分率）。

**印象評定課題** 予備調査で用いた9項目のうち望ましさ因子と親しみやすさ因子に負荷量の高かった3項目ずつ、合計6項目にさらに5項目を加えた11の印象評定項目を作成した。但し印象評定1の評定内容が印象評定2の評定内容に影響しないように、1回目と2回目では内容の異なる15のダミー項目をつけ加え、計26項目をランダムに配置した。

## 結 果

**ボタン押しデータの分析** 親しみやすさ、望ましさ、活動性の各行動場面別にFBP（ボタン押し回数）を合計し、その平均値を群別にFigure 10-1-1に示す。事前情報（親しみやすさ群、望ましさ群、ニュートラル群）×行動場面（親しみやすさ行動場面、望ましさ行動場面、活

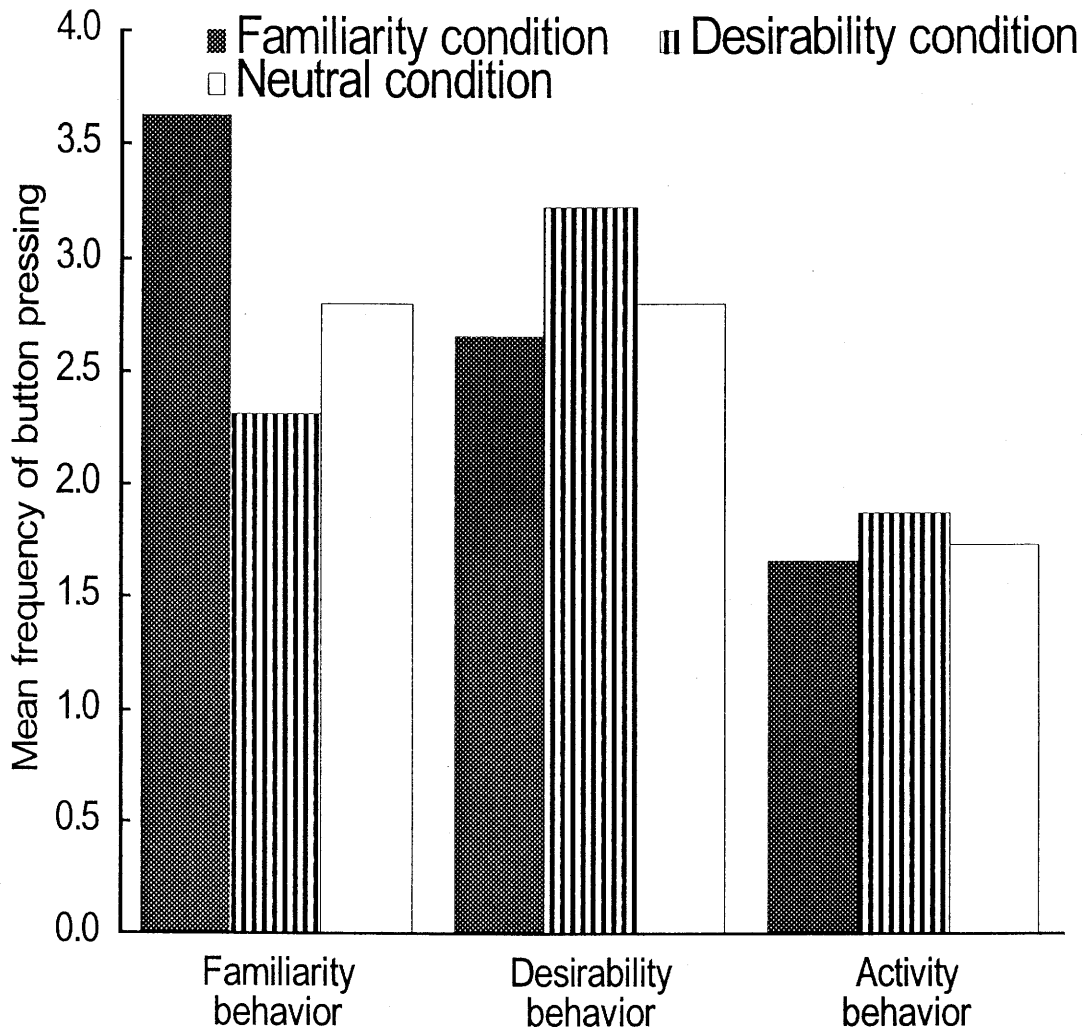


Figure 10-1-1. Mean frequency of button pressing in familiarity, desirability, and neutral conditions.

動性行動場面)の混合計画による2要因分散分析を行ったところ、行動場面の主効果( $F(2, 188)=38.80, p<.001$ )と交互作用( $F(4, 188)=5.44, p<.05$ )が有意であった。そこで、各行動場面別に事前情報の効果がみられるかどうかを確認するため、単純主効果の検定を行った。その結果、親しみやすさ場面のみ事前情報の効果がみられた( $F(2, 94)=14.13, p<.05$ )。多重比較(LSD法)の結果、親しみやすさ群が望ましさ群よりも有意にボタン押し回数が多かった( $Mse=3.89, 5\%$ 水準)。親しみやすさ群とニュートラル群、望ましさ群とニュートラル群の間には有意な差はみられなかった。

またFigure 10-1-2a~Figure 10-1-2bは横軸を時間に、縦軸をボタン押し反応率にとり、3群別に被験者のボタン押し反応の割合(パーセンテージ)を示したグラフである。全体的に3群のボタン押し反応率のパターンは類似しているものの、望ましさ行動場面である第8場面では望ましさ群が、また親しみやすさ行動場面である第10場面では親しみやすさ群がボタン押し反応率が高いなどの特徴が見られた。

**印象判断** はじめに本研究で用いた11の印象評定項目のうち、ビデオ観察前後の2回の評定結果を込みにして因子分析(主成分解・Varimax回転)を行った結果、2因子が妥当であると判断された(Table 10-1-3)。第1因子は、ひとなつこい、ユーモアのある、あたたかい、親しみやすいなどに負荷量が高く、行動場面作成時に用いた3項目も含まれていたことから、親しみやすさ因子と判断した。第2因子は、きちょうめんな、慎重な、分別のあるなどに負荷量が高く、行動場面作成時の望ましさ因子に該当する3項目も含まれていたことから望ましさ因子と判断した。次に各因子に負荷量の高い特性形容詞対(親しみやすさ因子7項目(親しみやすさ得点)、望ましさ因子4項目(望ましさ得点))の合成値を従属変

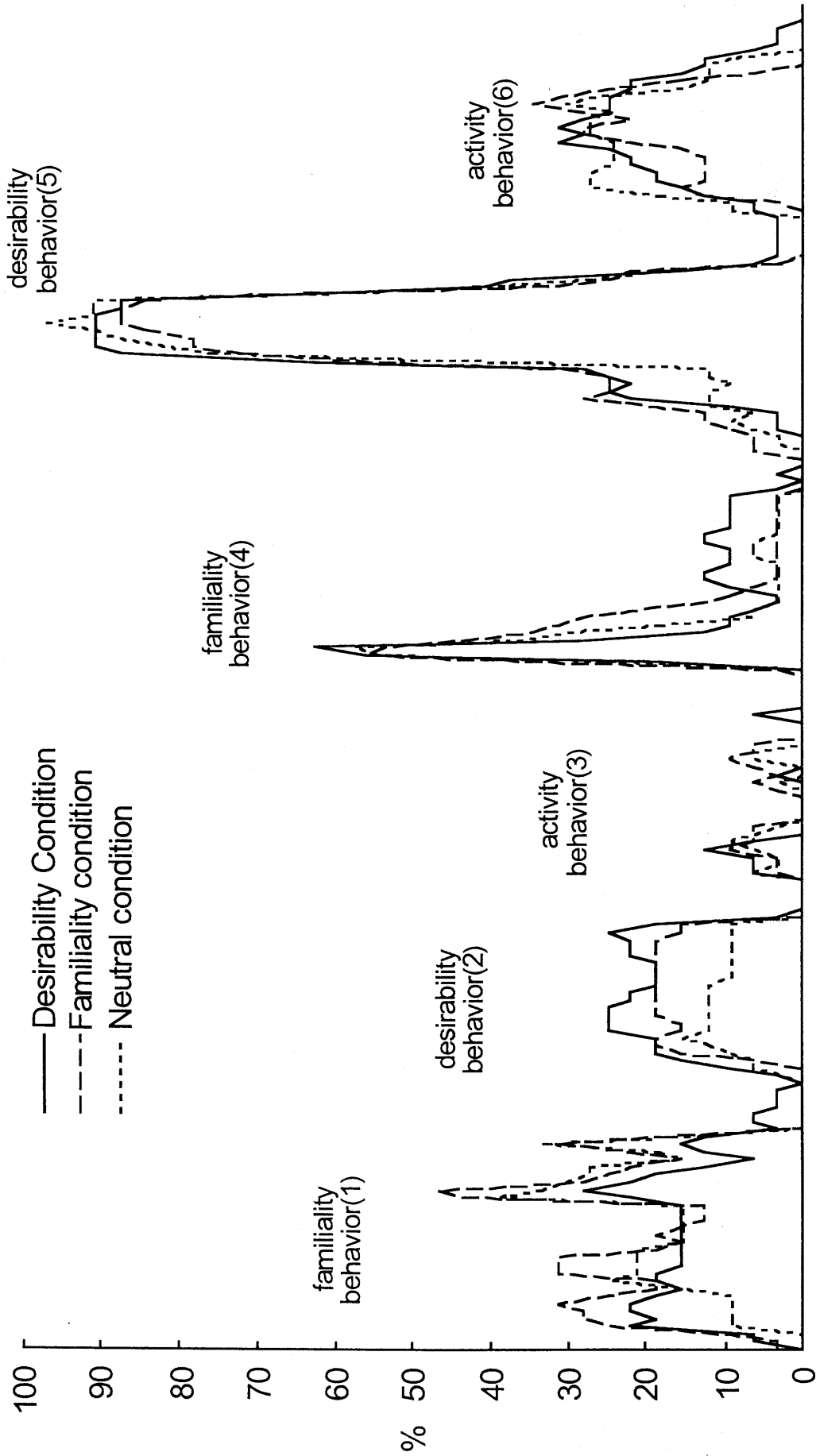


Figure 10-1-2a. Transition of button pressing rate in familiarity, desirability, and neutral condition (Scene1 - Scene6)

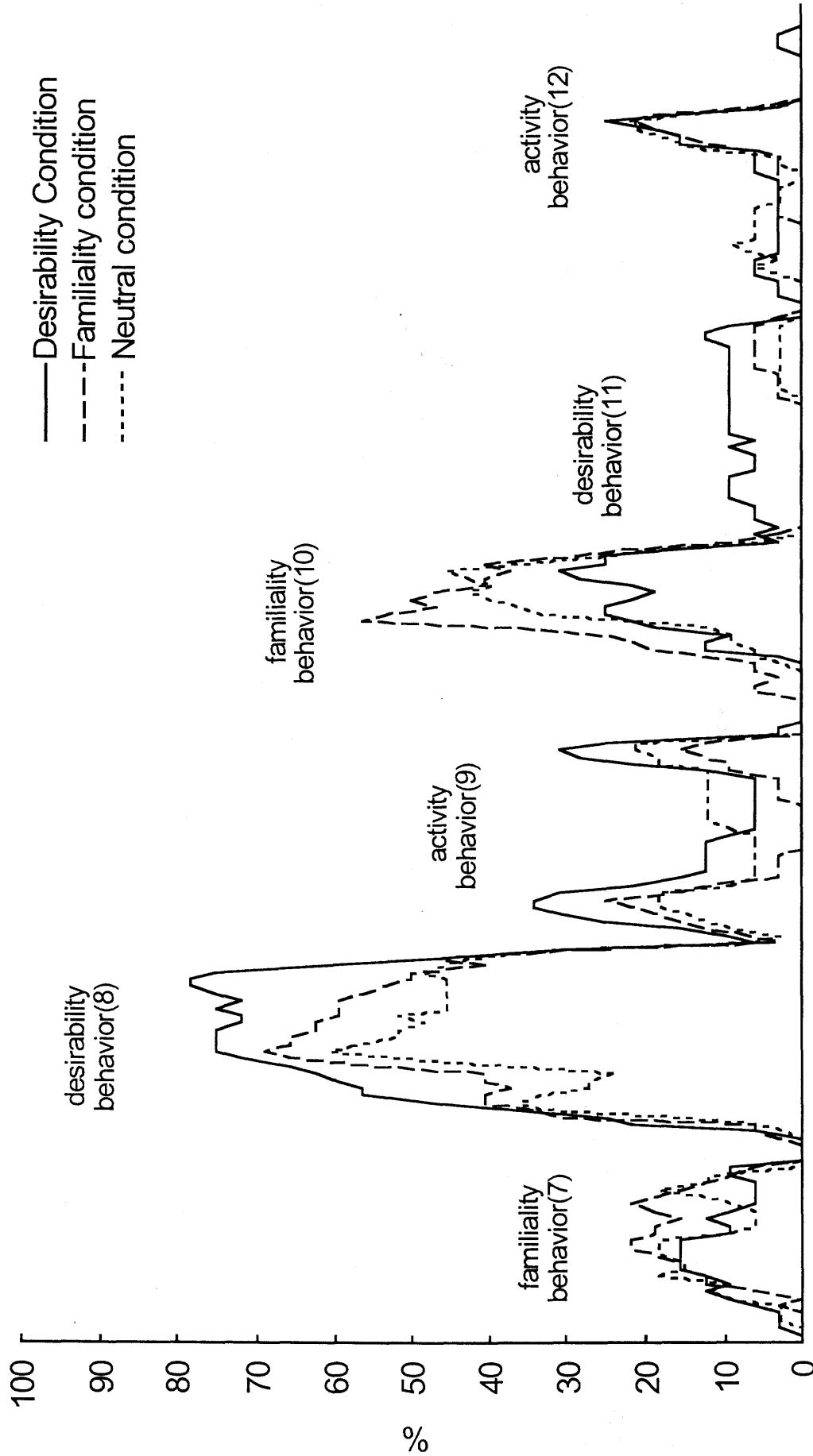


Figure 10-1-2b. Transition of button pressing rate in familiarity, desirability, and neutral condition (Scene7 - Scene12)

Table 10-1-3  
Factor analysis of impression judgment items

	Familiarity	Desirability
あたたかい-冷たい	0.74	0.03
人なつこい-近づき難い	0.73	-0.03
素直である-生意気な	0.70	0.30
ユーモアのある-ユーモアがない	0.69	-0.21
可愛らしい-憎らしい	0.67	-0.05
親切な-不親切な	0.65	0.21
親しみやすい-親しみにくい	0.62	-0.23
きちょうめんな-粗雑な	-0.04	0.85
慎重な-軽率な	-0.14	0.82
分別のある-無分別な	0.11	0.74
知的な-知的でない	-0.13	0.68
contribution	30.4%	23.9%



数とし、事前情報の3条件（望ましさ群、親しみやすさ群、ニュートラル群）×印象評定（印象評定1、印象評定2）の2要因分散分析を行った（Figure 10-1-3～Figure 10-1-4）。検定の結果、両得点とも交互作用が有意だったため（親しみやすさ得点、 $F(2, 94) = 12.2, p < .05$ 、望ましさ得点、 $F(2, 94) = 37.6, p < .01$ ）下位検定を行った。主な分析結果を次元別に以下に示す。

**親しみやすさ次元：**印象評定1・2毎に、事前情報によって操作した3群の単純主効果の検定を行った結果、印象評定1では事前情報の効果が見られた（ $F(2, 94) = 17.1, p < .01$ ）。LSD法による多重比較の結果、親しみやすさ群の親しみやすさ得点が最も高く、以下ニュートラル群、望ましさ群の順で有意な差が見られた（ $Mse = 37.37, 5\%$ 水準）。印象評定2では3群間に有意な差は見られなかった。次に各群毎に印象評定1と印象評定2の印象の変化を比較した結果、親しみやすさ群とニュートラル群では、印象評定1と印象評定2では有意な印象の変化は見られなかったが、望ましさ群では印象評定1と比較して印象評定2で有意に親しみやすさ得点が上昇した（親しみやすさ群、 $F(1, 94) = 2.2, n. s.$ ；望ましさ群、 $F(1, 94) = 29.5, p < .01$ ；ニュートラル群、 $F(1, 94) = 8.6, n. s.$ ）。

**望ましさ次元：**親しみやすさ次元同様、印象評定1・2毎に3群の単純主効果の検定を行った結果、事前情報提示の効果が有意であった（ $F(2, 94) = 37.1, p < .01$ ）。多重比較の結果親しみやすさ群と望ましさ群、親しみやすさ群とニュートラル群との間に有意な差が見られたが望ましさ群とニュートラル群との間には有意な差は見られなかった（ $Mse = 13.27, 5\%$ 水準）。印象評定2では3群間に有意な差は見られなかった。次に各群毎に印象評定1と印象評定2での印象の変化を比較した結果、望ましさ群では望ましさ得点が有意に下降し、親しみやすさ群、

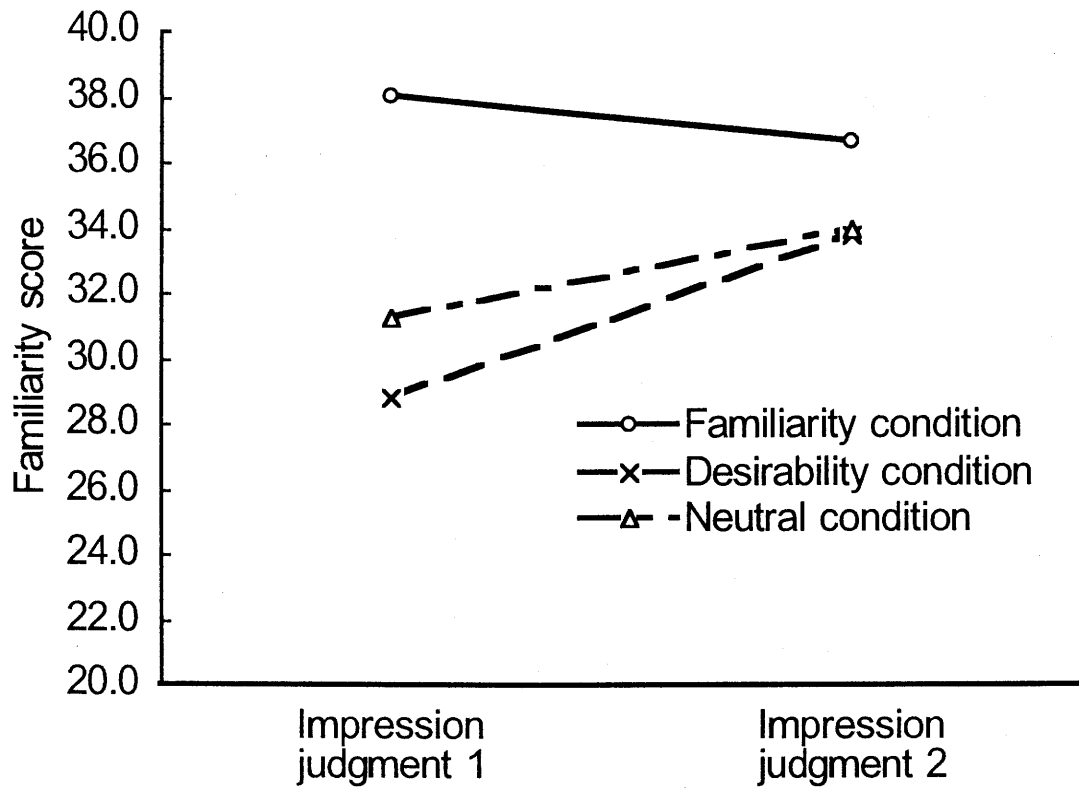


Figure 10-1-3. Mean familiarity scores in familiarity, desirability, and neutral conditions.

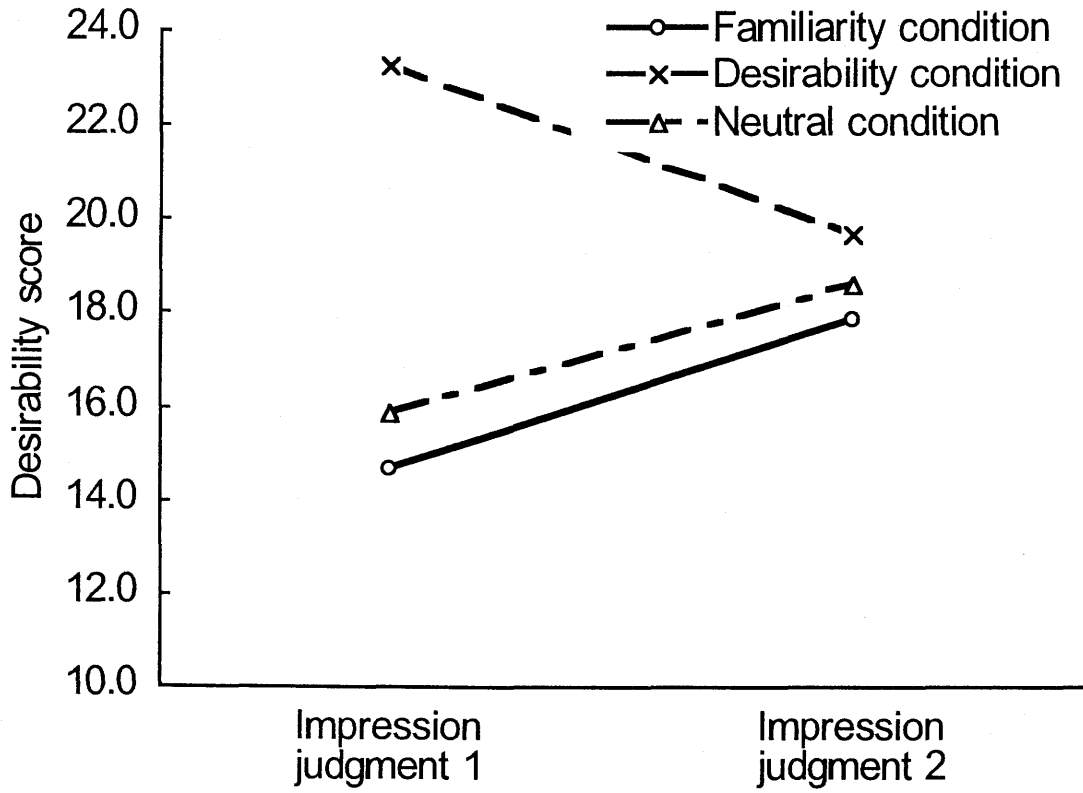


Figure 10-1-4. Mean desirability scores in familiarity, desirability, and neutral conditions.

ニュートラル群では望ましさ得点が有意に上昇した(親しみやすさ群,  $F(1, 94) = 26.7, p < .01$ ; 望ましさ群,  $F(1, 94) = 34.05, p < .01$ ; ニュートラル群,  $F(2, 94) = 20.1, p < .01$ ).

### 考 察

各群のFBPの回数を行動場面別に比較すると、親しみやすさ群では、親しみやすさ行動場面でのFBPが望ましさ群よりも有意に多かった。また望ましさ群では、他の2群と有意な差は見られなかったものの、親しみやすさ群よりも高い値を示していた。さらにニュートラル群は親しみやすさ・望ましさの両行動場面で親しみやすさ群・望ましさ群の中間に位置する値をとっていた。従って、ニュートラル群では事前情報の影響を受けていなかったと考えられる。これまで符号化・検索段階で、事前情報のバイアスが生じることは示されていたが(Cohen, 1981b)、事前情報の効果が情報の抽出段階においても生じることが本研究によって示唆されたと言えるだろう。

ボタン押し反応率を見ると、3群の反応率のパターンは比較的類似していた。このことは、印象形成の手がかりとして注意が向けられ、抽出される行動が、事前情報によって全く異なるわけではないことを示唆している。しかしその一方で、親しみやすさ群では、親しみやすさ行動場面で出現する特定の行動でのボタン押し反応率が高まることが認められた。この事は望ましさ群においても同様に認められている。この事から、同じ事前情報を受け取った知覚者は、印象形成の手がかりとして抽出されやすい行動が共通してくることを示唆している。研究1・2では、印象形成という対人認知事態で抽出される行動は、知覚者間で共通するとされていたが、さらに本研究では、共通の事前情報を受け取ったそれぞ

れの知覚者は、当該人物の行動のうち、事前情報に関連した情報への注意がより高められることを示唆していると考えられる。

次に印象評定結果を見ると、印象評定1では親しみやすさ得点は親しみやすさ群が有意に高く、また望ましさ得点は望ましさ群が有意に高かった。このことから実験操作は妥当であったと言えるだろう。一方、印象評定2を見ると、親しみやすさ・望ましさの両得点に有意差は見られなかった。さらに印象評定1と印象評定2の結果を比べると、3群の印象はある一定の水準へ収束する傾向が見られた。このように、ビデオ観察後の印象判断で、事前情報によるバイアスが見られなかった。この理由として本研究では次の2点を指摘する。

第1に、本研究の場合、事前情報が刺激人物に直接該当する情報として提示され、しかもこれらの情報は、後続の印象評定課題（印象評定1・印象評定2）と関連するように操作されていた。そのため印象評定1では、印象判断の材料として、事前情報しか利用できないため、事前情報に沿った印象判断がなされたが、ビデオ観察後では、刺激人物の行動内容と事前情報の両方が印象判断の材料として用いることが可能であった。そのため事前情報による偏った情報だけでなく、行動から得た新たな情報が、事前情報による偏りを弱めるような対比効果が生じたのではないかと考えられる。

第2に記述刺激（事前情報）よりもビデオ刺激の方が、他者印象を形成する上でよりリアリティーがあるとする刺激のインパクトの問題があげられる。山本(1987)や川西(1993)では、他者判断の際、写真のような視覚情報が記述情報以上の重要な情報源となる場合があることを示唆しており、こうした視覚情報のインパクトはビデオ情報のような動きを伴った社会情報においてはより強められると考えられる。

## 10-2 第10章のまとめ

研究10の結果は、活性化された特性概念が行動抽出に影響を与えることを示すものであると考えられる。本論文では特性概念と特性スクリプトとの間に階層的なネットワーク構造を仮定していたが、研究10ではあらかじめ特性概念が活性化される状況を実験的に操作することで、行動抽出が事前情報のバイアスの影響を受けることが示された。従って、特性-特性スクリプト間のリンクが階層構造をなしているということもある程度言えるのではないかと考えられる。

---

第 4 部  
全 体 的 総 括

---

### 第11章 本論文の結論と意義，そして今後の展望

本章では，本論文全体を通しての結論と，この研究が対人認知研究に果たした意義について述べる．そして最後に，本研究の知見をもとに，今後どのような研究の方向性があり得るのかに関する展望を述べる．



## 第 1 1 章

---

### 本論文の結論と意義，そして今後の展開の示唆

#### 1 1 - 1 本論文の要約と結論

これまでの対人認知研究は、理論先行型の研究が多かったり、卓上の空論的な研究が多く、はたして現実の対人認知過程をどれだけの確に捉え、説明できているのか、という問いが、本論文の研究に着手したきっかけであった。これに対し、現実場面で我々が頻繁に接する、いわば「生」の情報ともいえる「連続行動」に研究の焦点を当てることによって、現実の対人認知過程を説明する視点がより明瞭になり、特に【対人情報の抽出段階における処理】という視点について、新たな知見を提出することができたこと、が本論文の現段階での結論である。

第 1 部では連続行動を対人認知研究に取り込むための概念的な整理を行った。第 1 章では、対人認知研究の中で他者に関する行動情報は取り上げられていたが、記述的な行動情報と、視覚的に観察できる実際の行動との区別が曖昧であったことを指摘した。第 2 章では行動情報を扱った研究として「帰属研究」と「対人記憶研究」を取り上げ、研究知見を整理したが、現実の対人認知過程を的確に捉えていないのではないかという問題点を指摘した。それに対して第 3 章では「連続行動」を対人認知研究に取り込むことによる利点として (1) 現実の対人認知との対応度が高くなること、(2) 情報の知覚的過程への視点の拡大が可能になること、(3) 知覚者の主体的な処理過程を強調できること、(4) 逐次的処理の視点を導入できることの 4 点の可能性を指摘し、さらにこれまで連続行動に焦点を当てた研究の概念的な整理を行った。

第2部では、まず第4章で、連続行動に焦点を当てたこれまでの研究の問題の所在を明確にし、それをもとに5つの実証的な研究を行った。これら5つの実証的な研究からは以下のようなことがある程度検証できたと考えられる。

- ・対人認知状態で、知覚者は連続行動から印象形成の手がかりとなる情報を主体的に選択し、抽出している（研究1・2）。
- ・印象形成の手がかりとして抽出される情報は、知覚者間で比較的一致している（研究1・2）。
- ・印象形成の手がかりとして抽出された情報から、知覚者は特性情報を生成している（研究3）。
- ・情報抽出から特性生成にいたる一連の処理過程は、対人認知状態に特有のものである（研究4）。
- ・印象形成の手がかりとして抽出された情報は、対人判断の材料としても利用されている（研究5）。

こうした知見をもとに第7章では連続行動の処理の処理に関する仮設的なモデルを提出した。

第3部では、初めに第8章において、情報抽出から特性生成にいたる処理過程のメカニズムを明らかにするための理論的整理を行い、それをもとに「特性活性化モデル」とその基本的な考え方となる「特性スクリプト」の概念を提出した。第9章の4つの実証的な研究からは次の点がある程度示されたと考えられる。

- ・連続行動の観察時点で逐次的に特性が活性化されていた（研究6）。
- ・印象形成の手がかとして抽出される情報は、特性スクリプトとの照合によりより精緻化された処理を受けるため記憶に残りやすい（研究7・8）。
- ・特性概念のいくつかは、確かに特性スクリプトとリンクして記憶されていることが確認された（研究9）。

さらに第10章の研究9からは次のような点が示されたと考えられる。

- ・事前情報などによって特定の特性概念が活性化されていると、活性化された特性概念に合致する行動が抽出されやすくなるという、処理のバイアスが見られた。

第3部の実証的研究から得られた上記の知見を総合すると、少なくとも次のようなことが指摘できると考えられる。すなわち対人認知事態では、印象形成の手がかりとなる行動と、知覚者の既有知識である特性スクリプトとの照合によって、特性概念の活性化がなされているのではないかということ、また特性概念が活性化されていると、その特性概念にリンクした特性スクリプトに合致する行動の抽出がされやすくなるのではないか、の2点である。

以上の点から、ここでは第2部第7章で提出した連続行動の処理モデルと、第8章以降で述べた特性活性化モデルとを総合し、Figure 11-1-1の示したようなモデルを、対人認知事態における連続行動の処理モデルとして指摘しておきたい。

このモデルでは、連続行動から印象形成の手がかりとなる情報を選択的に抽出し、抽出された情報と特性スクリプトと照合に成功すると、特性スクリプトとリンクした特性概念が活性化し、対人表象に組み込まれ

るということを表現している。このモデルは、本論文の実証データをもとに仮設的に設定されたものであり、これまでに示した実証データは、このモデルをある程度支持しているように思う。しかしこのモデルはあくまでも仮設的に設定したものであり、このモデルの有効性を証明するためには、今後より一層のデータを積み上げていく必要があるだろう。

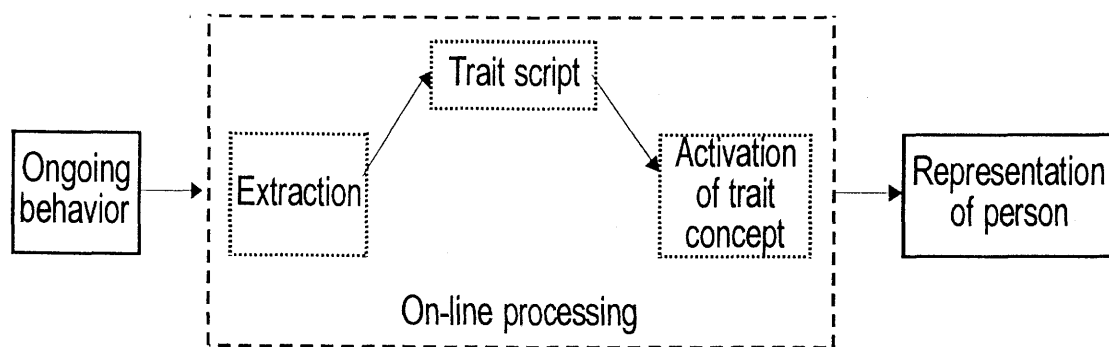


Figure 11-1-1. The process model of ongoing behavior of others in impression formation (Revised version)

### 1 1 - 2 対人認知研究における本論文の研究意義

前節において、対人認知事態における連続行動の処理モデルに関する基礎的な視点を示したが、このことが、本研究が対人認知研究の中で果たした意義の1つである。これまで、連続行動からどのように対人印象が形成されていくかということに関する知見は、ほとんどなかったといってもいいだろう。少なくとも、本研究ではこうした未知の部分にいくらかでも研究の足がかりを築いたと言える。

と同時に本研究は、これまでの対人認知研究の中でも、特に属性帰属研究と対人記憶研究に対して、新たな視点を提供できたものと考ええる。

属性帰属研究では、属性・特性を推測する過程に、行動の意図の所在

の帰属が媒介しているという従来の視点から (Jones & Davis, 1995; Kelly, 1967), 属性・特性の推測は意図の所在の帰属を媒介としないのではないかという議論へ進展しているが, 本研究の結果を属性帰属研究に応用するならば, 行動から他者の特性が推測されるまでの過程には, 行動の意図の所在の帰属が特性の推測に媒介するというような論理的な推論過程が働いているというよりも, むしろ当該人物の行動の中に, 知覚者自身の既有知識 (特性スクリプト) と合致する情報があるかどうかということが, 特性の推測に介在しているのではないかという可能性が示唆されたと言えるだろう。

また, 対人記憶研究ではHamilton, et al. (1979)の研究のように, 印象を形成しながら刺激人物の行動の記述文を読むほうが, 刺激人物の行動記述文を記憶しながら読むよりも, 後の再生結果が良いことが示されていた。しかしながら本研究の研究1に見られるように, 全く同一の行動を観察しても, 行動を記憶しながら観察するほうが, 行動から印象を形成しながら観察するよりも, 行動の自由再生課題の成績は良かった。このことは直感的には, 明らかにHamiltonらの結果と矛盾するように思える。しかしながら記述情報の場合, 記憶される情報の単位は, 記述のリストというかたちで固定されていたが, 連続行動の場合, 記憶される情報の単位は知覚者自身が主体的な処理の中で作り上げていたのだと考えると, この2つの研究の結果は矛盾しない。すなわち, Hamiltonらの研究では, 知覚者自身の主体的な情報の加工の部分を扱っていなかったのである。記述的な行動情報と連続行動では, 連続行動のほうがより日常性の高い対人情報であることは第1部でも述べたとおりである。このように本研究は, より日常性の高い情報を用いることによって, 現実の対人認知過程をこれまでの研究よりも明確に捉えられるようになったと

言えるだろう。

### 1 1 - 3 残された課題と今後の展望

本論文が示した連続行動の処理モデルは、あくまでも仮設的なものであり、このモデルをより精緻化させることが今後に残された大きな課題の1つである事は言うまでもない。

本論文で一貫して主張した、行動の選択的な抽出については、知覚者の連続行動の処理の1つの過程として位置づけることができるだろう。また、抽出された行動を特性概念と対応させて処理しているということも本論文によってある程度は検証できたと考えられる。但し抽出された行動と特性概念とを対応させるメカニズムについては、本論文では十分な検討をすることができなかった。これは今後の展開とも絡んでくる問題であるが、我々が他者情報として用いる全ての特性情報が、本研究で示したような「連続行動」の逐次的な処理によって獲得されると結論づけることは早急なように思われる。これは研究9の結果得られたプロトコルデータからもうかがえることであるが、当該の特性から想起される行動として得られた回答の中には、行動をもとにしたものも見られたが、その人物の日頃の習慣のように、繰り返しの観察を必要とするものや、当人の実際の行動というよりも、服装や環境のように、当該人物の状態的な特徴から推測された特性も多いことが予想される。このことは連続行動情報を情報源として喚起されやすいパーソナリティ特性もあるが、連続行動情報以外の情報に情報源を求めるパーソナリティ特性もあるのではないかということを示唆していると考えられる。

今後は連続行動情報から入手されやすい特性と、それ以外の情報源をもとにして入手される特性とをある程度明らかにしていく必要があるだ

ろう。このことは同時に我々が特性スクリプトとして保有している既存知識の内容をより明確にしていく必要があることを指摘するものである。

## 論文要旨

---

これまでの対人認知研究では、行動やパーソナリティー特性などの対人情報から、どのような印象が形成されるか、また対人情報がどのように記憶されているかという点が検証されてきた。本論文は、こうした従来の視点とは異なり、知覚者が他者の連続行動を観察する際、観察された情報をどのように取り込み、取り込んだ情報からどのような情報を引き出しているのかという点を主に第2部の実証研究で検討した。

情報の取り込みとは、連続行動情報の中から印象形成の手がかりとなる情報をどのように選択しているかということであり、本論文ではこうした知覚者の選択的な情報の入力を「抽出」と呼び、抽出処理の特徴を明らかにすることが本論文の第1の目的であった。また抽出された情報から知覚者は、何らかの情報を引き出しているはずであり、知覚者が引き出している具体的な情報内容を明らかにすることが本研究の第2の目的であった。

第2部の実証研究で明らかにされた点を以下に要約する。

研究1では、対人認知事態（印象群）と、行動記憶事態（記憶群）での連続行動の抽出の仕方の違いを行動抽出課題を用いて検討した。被験者は印象群23名、記憶群26名であった。行動抽出数は記憶群が多く、1情報あたりの抽出時間（秒）は印象群が短かった。このことから対人認知事態では、極めて出現時間の短い行動を印象形成の手がかりとして選択的に処理していることが示された。

研究2では、同一の連続行動を2回観察（第1セッション・第2セッション）することによって、行動の抽出の仕方が異なってくるかどうか



を行動抽出課題を用いて検討した。被験者は20名であった。行動抽出数は第2セッションのほうが多く、また1情報あたりの抽出時間も第2セッションのほうが長かった。このことから、当該人物の行動を繰り返し観察すると、印象形成の手がかりとして選択的に処理される情報の促進が認められた。

第3研究では抽出情報から、知覚者がどのような情報を引き出しているかを、研究2の手続き終了後、被験者から得られた内省報告をもとに検討した。内省報告の内容は、刺激人物の特性に関連した項目が多く、このことから知覚者は抽出された情報から特性に関連した情報を引き出していることが示された。

研究4では、ビデオ観察中どのようなことを考えているかを、観察中に直接発話させる「発話思考法」を用いて明らかにすることで、連続行動情報から処理される具体的な情報内容の検討を行った。被験者は印象群23名、記憶群23名であった。研究3同様対人認知事態では、連続行動から特性情報が処理されていることが、オンラインプロトコルデータからも確認された。

研究5では、連続行動から印象形成の手がかりとして抽出されやすい情報を削除した削除ビデオを提示する群（削除ビデオ群：43名）と、オリジナル通りのビデオを提示する群（完全ビデオ群：43名）とで形成された印象の違いを印象評定の結果から比較検討した。ここでは抽出対象となりやすい行動が印象判断の材料として利用されていることが確認された。

以上の5つの研究から、連続行動情報の処理モデルとしてFigure 7-1-1が提出された。

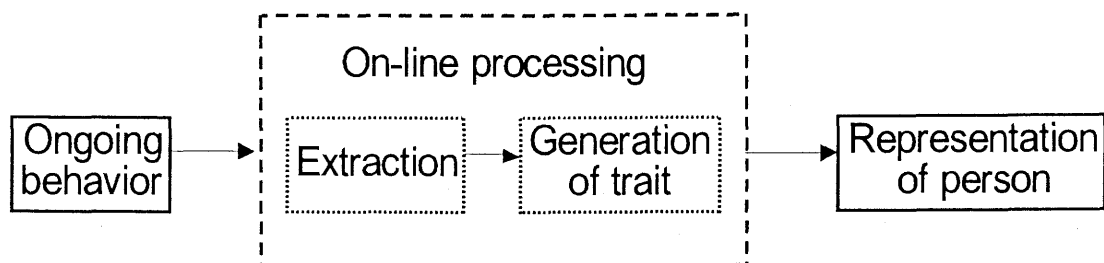


Figure 7-1-1. The process model of ongoing behavior of others in impression formation

第3部では、抽出情報から特性が生成される過程を「特性活性化モデル」とその基本的な構成概念である「特性スクリプト」によって説明する試みがなされた。特性スクリプトと特性概念が階層的な連合ネットワーク構造をなしていると仮定し、知覚者は特性スクリプトに合致する行動を抽出すると、それに対応した特性概念が活性化されるというのが、特性活性化モデルの基本的な考え方である。

第3部の実証研究で明らかにされた点を以下に要約する。

研究6では、抽出行動を観察した地点で、その行動に関連した特性概念が活性化されていることを、ターゲット形容語（抽出行動から喚起されやすい特性語）とダミー形容語（抽出行動からは喚起されにくい特性語）との反応時間から検証した。被験者は大学生36名。分析の結果、ターゲット形容語への判断の反応時間がダミー形容語への判断の反応時間よりも早い傾向が認められ、抽出行動観察時点で、すでに特性概念が活性化されていることが示された。

研究7では、抽出行動と、非抽出行動（抽出対象とならない行動）の記憶のされ易さを検討した。被験者は削除ビデオ群43名、完全ビデオ群43名。完全ビデオ群では抽出行動の再生率が非抽出行動の再生率よりも

高かったこと、また非抽出行動の再生率は完全ビデオ群、削除ビデオ群の間に有意な差が見られなかったことから、抽出行動だけが記憶に残りやすい事が示された。

研究8では抽出行動が記憶に残りやすかったのは、動作の素早さなどによる要因が介在しているのではないかということを確認するための補足的な実験を行った。被験者は大学生116名。抽出行動と、非抽出行動のを被験者に提示し、その行動の動作の速さを5段階で評定された。分析の結果、抽出行動の動作のほうが非抽出行動よりも素早いという結果は見られず、動作の素早さなどにより記憶に残りやすかったわけではないことが示された。

研究9では「特性スクリプト」の具体的な内容を、7つの特性形容語をもとに、そこからどのような行動が思い浮かぶかを被験者に回答させることによって収集した。さらに得られた行動記述がどれだけの生起時間で出現するかを「10秒以内」「10秒から1分以内」「1分以上」「複数か観察しないと特性と結びつかない」「行動というよりも状態を示している」という観点から分類した。その結果行動記述の中には10秒以内で出現する可能性のある行動があることが認められ、知覚者は特性スクリプトを既存知識として持っていることが示された。

研究10では、あらかじめ特定の特性概念を活性化させると、活性化された特性概念に該当する行動の抽出処理が促進されるのではないかということを検証した。実験群は事前情報によって操作し、望ましさ群（望ましさ次元の特性概念を活性化）32名、親しみやすさ群（親しみやすさ次元の特性概念を活性化）32名、ニュートラル群（特性概念の活性化を起こさない群）33名とした。ここでは事前情報に該当する行動場面での抽出処理が促進されることが確認され、特性概念を活性化させることが

抽出処理に影響を及ぼすことが示された。

以上の結果から、特性活性化モデルを仮定することがある程度示され、これをもとに第4部ではFigure 11-1-1に見られる連続行動の処理モデルが提示された。

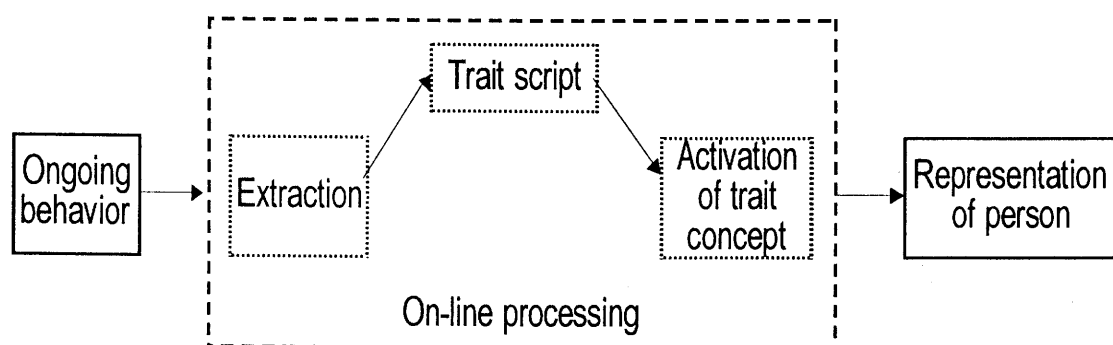


Figure 11-1-1. The process model of ongoing behavior of others in impression formation (Revised version)

本論文の実証的な研究から、少なくとも次の2点が指摘できるだろう。第1に、知覚者は連続行動から印象形成の手がかりとなる行動を主体的に選択していること、第2に選択された行動から、逐次的に特性情報を引き出していることである。

さらに、選択的に抽出された行動から特性情報を引き出す処理プロセスには特性スクリプトが介在した特性活性化モデルからの説明が有効なのではないかということが示唆されたと言える。

## 引用文献

- Abelson, R. P. 1981 The psychological status of the script concept. *American Psychologist*, **36**, 715-729.
- Allen R. B., & Ebbesen E. B. 1981 Cognitive processes in person perception: Retrieval of personality trait and behavioral information. *Journal of Experimental Social Psychology*, **17**, 119-141.
- Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **41**, 258-290.
- Beach, L., & Werthimer, M. 1961 A free response approach to the study of person cognition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 367-374.
- Bobrow, D. G., & Norman, D. A. 1975 Some principles of memory schemata. In D. G. Bobrow & A. G. Collins (Eds.), *Representation and understanding: Studies in cognitive science*. New York: Academic Press, Pp. 131-150.
- Bower, G. H. 1991 Mood congruity of social judgments. In J. P. Forgas (Ed.), *Emotion and social judgments*. Pergamon Press. Pp. 31-53.
- Bower, G. H., Black, J. B., & Turner, T. J. 1979 Scripts in memory for text. *Cognitive Psychology*, **11**, 177-220.
- Brewer, W. F., & Nakamura, G. V. 1984 The nature and functions of schemas. In R. S. Wyer, Jr., & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition*. Vol. 1. Hillsdale,

- New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 119-160.
- Cantor, N., & Mischel, W. 1977 Trait as prototypes: Effects on recognition memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 38-48.
- Carlston, D. E. 1994 Associated Systems Theory: A Systematic Approach to cognitive Representation of Persons. R. S. Wyer (Ed.) *Advances in Social Cognition*. Vol. 7, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 1-78.
- Carlston, D. E., & Skowronski, J. J. 1986 Trait memory and behavior memory: The effects of alternative pathways on impression judgment response times. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 5-13.
- Cohen, C. E. 1981a Goals and schemata in person perception: Making sense from the stream of behavior. In N. Cantor & J. F. Kihlstrom (Eds.), *Personality, cognition, and social interaction*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 45-68.
- Cohen, C. E. 1981b Person categories and social perception: Testing some boundaries of the processing effects of prior knowledge. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 441-452.
- Cohen, C. E., & Ebbesen, E. B. 1979 Observational goals and schema activation: A theoretical framework for behavior perception. *Journal of Experimental Social Psychology*,

- 15, 305-329.
- Collins, A. M., & Quillian, M. R. 1969 Retrieval time from semantic memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **8**, 240-247.
- Dornbusch, S. M., Hastorf, A. H., Richardson, S. A., Muzzy, R. E., & Vreeland R. S. 1965 The perceiver and the perceived: Their relative influence on the categories of interpersonal cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 434-440.
- Ebbesen, E. B. 1980 Cognitive processes in understanding ongoing behavior. In R. Hastie, T. M. Ostrom, E. B. Ebbesen, R. S. Wyer, Jr, D. L. Hamilton, & D. E. Carlston, (Eds.), *Person Memory: The cognitive basis of social perception*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 179-225.
- Fiske, S. T., & Cox, M. G. 1979 Person concepts: The effect of target familiarity and descriptive purpose on the process of describing others. *Journal of Psychology*, **47**, 136-161.
- Fiske, S. T., & Linville, P. W. 1980 What does the schema concept buy us? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **6**, 543-557.
- Gordon, S. E., & Wyer, R. S. 1987 Person memory: Category set-size effects on the recall of a person's behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**,

648-662.

- Hamilton, D. L. 1988 Causal attribution viewed from an information-processing perspective. In D. Bar-Tal & A. W. Kruglanski (Eds.), *The social psychology of knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press, Pp. 359-385.
- Hamilton, D. L., Katz, L. B., & Leire, V. O. 1980 Cognitive representation of personality impressions: Organizational processes in first impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 1060-1063.
- Hastie, R. 1980 Memory for behavioral information that confirms or contradicts a personality impression. In R. Hastie, T. M. Ostrom, E. B. Ebbesen, R. S. Wyer, Jr., D. L. Hamilton, & D. E. Carlston (Eds.), *Person memory: The cognitive basis of social perception*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 155-177.
- Hastie, R. 1981 Schematic principles in human memory. In E. T. Higgins, C. P. Herman, & M. P. Zanna (Eds.), *Social cognition: The Ontario Symposium*. Vol. 1, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 39-88.
- Hastie, R., & Kumer, P. A. 1979 Person memory: Personality traits as organizing principles in memory for behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 25-38.
- Hastie, R., & Pennington, N. 1988 Notes on the distinction between memory-based versus on-line judgments. In J. N.



- Bassili (Ed.), *On-line cognition in person perception*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp1-17.
- 林文俊 1978 対人認知の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.
- 林文俊 1976 対人認知構造における個人差の測定(1) -認知的複雑性の測度についての予備的検討- 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 23, 27-38.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- Jones, E. E., & Davis, K. E. 1965 From acts to disposition: The attribution process in person perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 2. New York: Academic Press.
- Jones, E. E., & Harris, V. A. 1967 The attribution of attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 3, 1-24.
- Jones, E. E., & McGillis, D. 1976 Correspondent inferences and the attribution cube: A comparative reappraisal. In J. H. Harvey, W. J. Ickes, & R. F. Kidd (Eds.), *New Directions in attribution research*. Vol. 1. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Jones, E. E., Worchel, S., Goethals, G. R., & Grumet, J. F. 1971 Prior expectancy and behavioral extremity as determinants of attribution. *Journal of Experimental*

- Social Psychology*, 7, 59-80.
- Kahneman, D. 1973 *Attention and effort*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
- 川西千弘 1993 対人認知における顔の影響 心理学研究, 64, 263-270.
- Kelly, H. H. 1967 Attribution theory in social psychology. In D. Levine (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*. Vol. 15. Lincoln: University of Nebraska Press. Pp. 192-240.
- 海保博之・原田悦子(編) 1993 プロトコル分析入門 新曜社
- Kelly, H. H. 1972 Causal schemata and the attribution process. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelly, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the cause of behavior*. Morristown, New Jersey: General Learning Press. Pp. 151-174.
- Klein, S. B., & Loftus, J. 1990 Rethinking the role of organization in person memory: An independent trace storage model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 400-410.
- Lassiter, G. D. 1988 Behavior perception, affect, and memory. *Social Cognition*, 6, 150-176.
- Lassiter, G. D., & Stone, J. I. 1984 Affective consequences of variation in behavior perception: When liking is in the level of analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 253-259.

- Lassiter, G. D., Stone, J. I., Rogers, S. L. 1988 Memorial consequences of variation in behavior perception. *Journal of Experimental Social Psychology*, 24, 222-239.
- Livesley, W. J., & Bromley, D. B. 1973 *Person perception in childhood and adolescence*. London: Wiley.
- Markus, H., Smith, J., & Moreland, R. L. 1985 Role of the self-concept in the perception of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1494-1512.
- McArthur, L. Z. 1980 Illusory causation and illusory correlation: Two epistemological accounts. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6, 507-519.
- Newton, D. 1973 Attribution and the unit of perception of ongoing behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 28, 28-38.
- Newton, D. 1976 Foundation of attribution: The perception of ongoing behavior, In J. Harvey, W. Ickes, & R. Kidd (Eds.), *New directions in attribution research*. Vol. 1. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 223-247.
- Newton, D., & Engquist G. 1976 The perceptual organization of ongoing behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 436-450.
- Newton, D. A., Engquist, G., & Bois, J. 1977 The objective basis of behavior unit. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 847-862.

- Newton, D., Hairfield, J., Bloomingdale, J., & Cutino S. 1987 The Structure of action and interaction. *Social Cognition*, 5, 191-237.
- Newton, D., Rinder, R., Miller, R., & LaCross, K. 1978 Effects of availability of feature changes on behavior segmentation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 379-388.
- Norman D. A., & Bobrow, D. G. 1975 On data-limited and resource-limited processes: *Cognitive Psychology*, 7, 44-64.
- Reeder, G. A. 1985 Implicit relations between dispositions and behaviors: Effects on dispositional attribution. In J. H. Harvey, & G. Weary (Eds.), *Attribution: Basic issues and applications*. New York: Academic Press. Pp. 87-116.
- Reeder, G., & Brewer, M. B. 1979 A schematic model of dispositional attribution in interpersonal perception. *Psychological Review*, 86, 61-79.
- Rumelhart, D. E., & Ortony, A. 1977 The representation of knowledge in memory. In R. C. Anderson, R. J. Spiro, & W. E. Montague (Eds.), *Schooling and the acquisition of knowledge*. Hillsdale, New Jersey: Laurence Erlbaum Associates. Pp. 99-136.
- 坂元章 (印刷中) 人物表象の形成と使用 一 体制化と接近可能性一 山本真理子・外山みどり (編) 「社会的認知」 誠心書房

- 坂元章 1987 人物表象が印象評定に及ぼす影響 心理学研究, 58, 166-173.
- Schank, R. C., & Abelson, R. P. 1977 *Script, plans goals and understanding: An inquiry to human knowledge structures*. Hillsdale, New Jersey: Laurence Erlbaum Associates.
- Smith, E. R., & Miller F. D. 1983 Mediation among attributional inferences and comprehension processes: Initial findings and a general method. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 492-505.
- Snyder, M. L., & Jones, E. E. 1974 Attitude attribution when behavior is constrained. *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 585-600.
- Srull, T. K. 1981 Person memory: Some tests of associative storage and retrieval models. *Journal of Experimental Social Psychology: Human Learning and Memory*, 7, 440-463.
- Stephan, W. G. 1989 A cognitive approach to stereotyping. In D. Bar-Tal, C. F. Graumann, A. W. Kruglanski, & W. Stroebe (Eds.), *Stereotyping and prejudice: Changing conceptions*. Springer-Verlag. Pp. 3-34.
- Sternberg, S. 1966 High speed scanning in human memory. *Science*, 153, 652-654.
- Sternberg, S. 1969 Memory-Scanning: Mental processes revealed by reaction-time experiments. *American Scientist*, 57, 421-457.
- 鈴木高士 1989 既有知識と文章理解 鈴木宏昭・鈴木高士・村山功・

- 杉本卓 (著) 教科理解の認知心理学 第4章, Pp. 153-229.
- Taylor, S. E., & Crocker, J. 1981 Schematic bases of social information processing. In E. T. Higgins, C. P. Herman, & M. P. Zanna (Eds.), *Social cognition: The Ontario Symposium*. Vol. 1. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 89-134.
- Taylor, S. E., & Fiske, S. T. 1984 *Social Cognition*. McGraw-Hill.
- Taylor, S. E., & Fiske, S. T. 1991 *Social Cognition*. 2nd edition. McGraw-Hill.
- 外山みどり 1991 帰属研究の発展 蘭千壽・外山みどり (編) 帰属過程の心理学 第2章, ナカニシヤ出版, Pp38-62.
- Winter, L., & Uleman, J. S. 1984 When are social judgments Made? Evidence for the spontaneousness of trait inferences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 237-252.
- Wyer, R. S., & Carlston, D. E. 1979 *Social cognition, inference and attribution*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wyer, R. S., & Carlston, D. E. 1994 The cognitive representation of person and events. In R. S. Wyer, Jr., & K. S. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition*. Second Edition. Vol. 1. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 41-98.
- Wyer, R. S., & Gordon, S. E. 1982 The recall of information

- about persons and groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 128-154.
- Wyer, R. S., & Srull, T. K. 1989 *Memory and cognition in its social context*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wilder, D.A. 1978a Effect of predictability on units of perception and attribution. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 281-284.
- Wilder, D.A. 1978b Predictability of behaviors, goals, and unit of perception. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 604-607.
- 山本真理子 1987 矛盾する対人情報が統合されるとき - 外見的特徴と所属集団に関するくい違う手がかりをもとにつくられる印象 - 東京都立大学人文学部人文学報, 189, 55-80.
- Yandrell, B., & Insko, C. A. 1977 Attribution of attitudes to speakers and listeners under assigned-behavior condition: Does behavior engulf the field? *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 269-278.

## 謝 辞

---

本論文は、1991年3月に筑波大学に提出した修士論文「行為情報を手がかりとした印象形成に関する基礎的研究 —印象形成事態と記憶事態の比較—」をもとに、その後の4年間に収集した実証データを加え、学位論文にまとめたものである。本論文をまとめるにあたり多くの方々からご指導・ご鞭撻を賜った。

堀洋道教授からは、決して優秀な学生ではなかった私が、大学院進学を希望した筑波大学人間学類在学中から、かれこれ8年、ご指導いただいた。不出来な学生の取り上げる研究テーマに最後まで耳を傾け、決して頭ごなしに否定することなく、さまざまな視点から有益な助言をいただいたことが、本論文の研究に結びついた。

本論文のテーマとして「連続行動情報」の研究を最初に示唆して下さったのは、山本真理子助教授であった。山本先生が執筆された論文を大学4年生の時に目にし、対人認知という研究分野に触れ、卒業論文を作成して以来、やはり8年近くご指導いただいた。対人認知という研究分野では、学界を代表される碩学の先生に、丹念に自分の研究をお読みいただき、ご指導いただけたことは、私にとっては貴重な体験であった。と同時に、この先、同じ研究分野の研究者として研究を続けていかななくてはならない自分が、まだまだ未熟であることを痛感させられる。本論文の研究1を投稿論文としてまとめる時、本当にこんな研究が論文になるのか、と一時はあきらめかけたこともあったが、あたたかくも厳しい先生のご指導により、論文が受理されたときには真っ先にその喜びをお伝



えしたのを覚えている。

また吉田富二雄助教授の情熱あふれるご指導には、いつしか自分も吉田先生のような研究者になりたいと思うような不思議な魅力がある。お忙しいにもかかわらず、貴重な時間を割いて私の研究の相談にのっていただき、多くの議論の中から、本研究の内容についてのご批判と御提言を賜った。

堀先生、山本先生、吉田先生の真摯な学問的御姿勢と深い思いやりに接することができ、研究者の卵としてこの上なく贅沢な経験であった。諸先生方には衷心よりお礼申し上げます。

本論文の研究の多くが、プロトコルデータを用いたこともあり、その分類や判定に際し多くの方々の協力を得た。特に本学研究科で学問を共にしてきた原奈津子氏、久保田健市氏、泊真児氏、湯川進太郎氏には、労多い評定を何度も依頼し、ご迷惑をかけた。諸氏の協力なしには本論文が完成しなかったといっても過言ではない。

もちろん学外の諸先生からも多大なるご援助をいただいた。聖心女子大学の松井豊助教授には、修士論文研究の内容について貴重な御示唆をいただいたことが、本研究の礎のひとつとなった。また本年3月、私よりも一足先に学位論文を提出された東京女子大学の上瀬由美子氏とは、同じ時期に学位論文の研究を進めたこともあり、論文作成のための貴重なアドバイスを受けることができた。本論文の完成の陰には上瀬さんの心温まる励ましがあったことを記しておきたい。本論文の執筆の草稿を練っている段階では、岡本浩一助教授（東洋英和女学院大学）、黒沢香助教授（千葉大学）、萩原滋教授（慶応義塾大学新聞研究所）、川上善郎教授（文教大学）から貴重なご意見を賜った。感謝申し上げます。

もちろんこのほかにも多くの方々のご援助とご理解があったからこそ、

本論文を完成することができた。にもかかわらず、本論文の不十分な点については、ひとえに私の責任であり、今後未長く研究を続けていく上での反省材料としたい。そしてようやく研究者としての第1歩を踏み出すことができたのではないかという気持ちのこみ上げる中、ここに本論文の筆を置くことにする。

1996年6月

宮本聡介

## Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 2 者 一 致
7	おおざっぱ	サッサッサと物事を片づける	3	1	1	-	1
7	おおざっぱ	なんでも間でも放り投げる	4	1	1	-	1
30	おおざっぱ	言葉が荒く、要点しか言わない	2	1	1	-	1
6	おおざっぱ	失敗しても放っておく	3	1	1	-	1
30	おおざっぱ	野菜の切り方が大きい	3	1	1	-	1
11	おおざっぱ	野菜を切るとき、大きさをそろえないで適当に切る	3	1	1	-	1
1	おおざっぱ	野菜を大きく切る	3	1	1	-	1
37	おおざっぱ	字を間違えても、消しゴムを使わず、ペンで塗りつぶす	1	1	1	*	1
37	おおざっぱ	失敗しても、まあいいかという	1	1	1	*	1
31	おおざっぱ	髪の毛をブラシを使わずに結ぶ	1	1	1	*	1
22	おおざっぱ	目分量で洗剤を入れる	1	1	1	*	1
33	おおざっぱ	明日の生活費をパチンコで稼ぐ	3	3	5	-	3
12	おおざっぱ	教室掃除を、ほうきで掃くだけで終わった	3	3	3	*	3
22	おおざっぱ	適当に掃除をする	3	3	3	*	3
2	おおざっぱ	「まあいいか」ですませることが多い	4	4	1	-	4
35	おおざっぱ	何事もしっかりしていない	4	4	6	-	4
2	おおざっぱ	細かいことが苦手	4	4	5	-	4
41	おおざっぱ	仕事にせよ何にせよ、ほどほどですませる	4	4	5	-	4
4	おおざっぱ	何をするのも雑	4	4	4	*	4
30	おおざっぱ	何事もいい加減な事をする	4	4	4	*	4
19	おおざっぱ	あつけらかんとしている	5	5	4	-	5
1	おおざっぱ	お金の管理ができない	6	5	5	-	5
10	おおざっぱ	カバンの中がごちゃごちゃ	5	5	4	-	5
19	おおざっぱ	何事も深く考えず、適当にやっている	4	5	5	-	5
32	おおざっぱ	行動が遅い	3	5	5	-	5
29	おおざっぱ	細かいことを言わない	6	5	5	-	5
21	おおざっぱ	細かいところに気を配れない	6	5	5	-	5
13	おおざっぱ	仕事の内容がきちんとしていない	4	5	5	-	5
21	おおざっぱ	他人に気を配れず、自分のことだけ考える	4	5	5	-	5
2	おおざっぱ	物事をくよくよ考えない	4	5	5	-	5
4	おおざっぱ	字が汚い	5	5	5	*	5
38	おおざっぱ	整理が下手	5	5	5	*	5
1	きちょうめん	カーベットの毛並みをいつもきちんとそろえている	2	1	1	-	1
29	きちょうめん	スカートのしわを伸ばす	2	1	1	-	1
9	きちょうめん	スケジュール表に予定をきちんと書き込んでおく	3	1	1	-	1
3	きちょうめん	借りたお金を1円単位で返す	2	1	1	-	1
39	きちょうめん	少しでもいつもと違う場所に物が置いてあるとすぐに直す	2	1	1	-	1
14	きちょうめん	食べ物屋さんで、自分のおしぼりでテーブルを拭く	2	1	1	-	1
41	きちょうめん	線などを引いて、少しでも曲がると書き直す	3	1	1	-	1

Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 一 致 2
32	きちょうめん	脱いだ靴をきちんと並べる	3	1	1	-	1
18	きちょうめん	毎日自分の財布の中身を確認してくる	4	1	1	-	1
27	きちょうめん	1本のきれいな線が引ける	1	1	1	1	1
8	きちょうめん	ちょっとした汚れを気にする	1	1	1	1	1
37	きちょうめん	教科書の折り目をきれいにつける	1	1	1	1	1
37	きちょうめん	玄関の靴の向きをそろえる	1	1	1	*	1
31	きちょうめん	講義のノートに日付を書く	1	1	1	*	1
30	きちょうめん	食べ終わったハンバーガーの包みをきれいにたたむ	1	1	1	*	1
20	きちょうめん	置物の場所がずれると気になる	1	1	1	*	1
10	きちょうめん	筆箱の中のペンの向き、位置が気になり、毎日同じ	1	1	1	*	1
13	きちょうめん	わりかんの時、何十何円まで計算する	2	2	1	-	2
21	きちょうめん	筆箱の中のペンを、小さい方から並べる	2	2	1	-	2
18	きちょうめん	帰宅時、手洗い、うがいをする	2	2	2	*	2
6	きちょうめん	ちょっとした汚れでも気になり、掃除してしまう	3	3	1	-	3
14	きちょうめん	それをまとめてファイルに綴じる	3	3	2	-	3
13	きちょうめん	ノートを隅々まで使う	3	3	1	-	3
37	きちょうめん	ノートを取るとき、色分けして記入する	3	3	1	-	3
11	きちょうめん	家計簿、お小遣いの収入・収支を細かくつける	3	3	4	-	3
33	きちょうめん	家計簿を付けている	3	3	4	-	3
42	きちょうめん	隅々まで掃除をする	3	3	1	-	3
9	きちょうめん	洗濯物などきちんとアイロンがけしてある	3	3	1	-	3
9	きちょうめん	洗濯物がきれいにたたんで収納してある	3	3	1	-	3
16	きちょうめん	洗濯物をきちんとたたむ	3	3	1	-	3
38	きちょうめん	洗濯物をしわ一つなくきちんとたたむ	3	3	1	-	3
1	きちょうめん	日記をつける	3	3	4	-	3
26	きちょうめん	本を作者別、大きさ別に並べて片づける	3	3	1	-	3
30	きちょうめん	毎日、日記をつける	3	3	4	-	3
1	きちょうめん	毎日小遣い帳を1円単位で細かくつける	3	3	4	-	3
23	きちょうめん	1つのことが終わるまで、それをやり続ける	3	3	3	*	3
6	きちょうめん	やるべきことをきちんと終わらせる	3	3	3	*	3
42	きちょうめん	ノートなどをきれいにまとめる	3	3	3	*	3
32	きちょうめん	物事の順番を狂わさず行動する	3	3	3	*	3
5	きちょうめん	何事にも丁寧	6	4	4	-	4
16	きちょうめん	いつもきちんと部屋を掃除してある	4	4	5	-	4
26	きちょうめん	物をおく場所を必ず決めている	1	4	4	-	4
25	きちょうめん	机の上がきちんとしている	4	4	5	-	4
32	きちょうめん	机の上が整理されている	4	4	5	-	4
21	きちょうめん	自転車を必ず同じ向きでおく	4	4	1	-	4
2	きちょうめん	自分がやらないと気がすまない	4	4	6	-	4

Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 一 致
21	きちょうめん	毎日同じ時間に起きる	4	4	1	-	4
42	きちょうめん	いつもきちんとした服を着ている	4	4	4	*	4
1	きちょうめん	いつも同じ場所に靴がおいてあって、同じ角度でカバンがおいてある	4	4	4	*	4
12	きちょうめん	毎日部屋の掃除をする	4	4	4	*	4
40	きちょうめん	ノートの整理の仕方	5	5	3	-	5
17	きちょうめん	何もかも自分の思ったとおりに物が置いていないとだめ	2	5	5	-	5
6	きちょうめん	机の上や部屋など常に整理してある	4	5	5	-	5
21	きちょうめん	机の中の教科書とノートを別に置いている	4	5	5	-	5
1	きちょうめん	机や洋服ダンスの引き出しがいつみても整理されている	4	5	5	-	5
5	きちょうめん	部屋が散らかっているのをいやがる	1	5	5	-	5
28	きちょうめん	ノートの字がきれい	5	5	5	*	5
1	きちょうめん	フローリングの床にゴミが一つも落ちてない	5	5	5	*	5
40	きちょうめん	整理整頓がされている	5	5	5	*	5
2	きちょうめん	整理整頓好き	5	5	5	*	5
30	きちょうめん	部屋がいつもきれいに整っている	5	5	5	*	5
4	きちょうめん	部屋にゴミ一つ無い	5	5	5	*	5
22	きちょうめん	本棚のほんの並び方にきまりがある	5	5	5	*	5
18	きちょうめん	本棚の本が、種類、高さによって整理整頓されている	5	5	5	*	5
10	だらしない	後かたづけをしない	6	1	1	-	1
17	だらしない	食事の時ぼろぼろこぼす	4	1	1	-	1
10	だらしない	ガム、タバコを道に捨てる	1	1	1	*	1
23	だらしない	その辺にごみを捨てる	1	1	1	*	1
32	だらしない	トイレのドアを閉めない	1	1	1	*	1
37	だらしない	手を洗って洋服で拭く	1	1	1	*	1
10	だらしない	人前でいきなり靴下を脱ぐ	1	1	1	*	1
5	だらしない	脱いだら脱ぎっぱなし	1	1	1	*	1
21	だらしない	燃える物、燃えない物の区別をしないで捨てる	1	1	1	*	1
19	だらしない	食べ物をそのまま放置する	3	3	1	-	3
13	だらしない	すぐ忘れ物をする	1	4	4	-	4
8	だらしない	何でもやるのがだらだらしている	3	4	4	-	4
21	だらしない	期限を守らない	4	4	6	-	4
1	だらしない	時間が守れない	4	4	5	-	4
39	だらしない	時間にルーズ	4	4	5	-	4
41	だらしない	時間に必ず遅れてくる	4	4	5	-	4
11	だらしない	時間を守らない	4	4	5	-	4
13	だらしない	時間を守らない	4	4	5	-	4
3	だらしない	約束を守らない	4	4	5	-	4
37	だらしない	約束を守らない	4	4	5	-	4
2	だらしない	約束を守れない	4	4	5	-	4

Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 2
28	だらしない	遅刻が多い	4	4	4	*	4
35	だらしない	同じ服を着る	4	4	4	*	4
26	だらしない	忘れ物が多い	4	4	4	*	4
13	だらしない	Yシャツなどアイロンがかかっていない	4	5	5	-	5
16	だらしない	お金を借りて返さない	6	5	5	-	5
11	だらしない	しわしわな洋服を着ている	3	5	5	-	5
15	だらしない	なんでもやりっぱなしで、後かたづけをしない	3	5	5	-	5
16	だらしない	洗い物をしない	6	5	5	-	5
11	だらしない	他人に不快感を与える	4	5	5	-	5
8	だらしない	待ち合わせの時間が守れない	4	5	5	-	5
3	だらしない	遅刻する	4	5	5	-	5
18	だらしない	燃えるゴミ、燃えないゴミを分けずにいっしょくたになっている	5	5	1	-	5
12	だらしない	部屋が汚れているのに何もしない	6	5	5	-	5
23	だらしない	服など脱ぎっぱなし	1	5	5	-	5
1	だらしない	服を脱いだらぬいだまま	1	5	5	-	5
36	だらしない	約束した時間に来ない	4	5	5	-	5
18	だらしない	洋服が脱ぎっぱなしになっている	5	5	1	-	5
32	だらしない	洋服にシミをつけている	1	5	5	-	5
13	だらしない	洋服をきちんと着ていない	6	5	5	-	5
25	だらしない	洋服を脱いだら脱ぎっぱなし	1	5	5	-	5
22	だらしない	ゴミの散らかった部屋	5	5	5	*	5
5	だらしない	シャツが出ている	5	5	5	*	5
30	だらしない	ズボンからシャツが出ている	5	5	5	*	5
38	だらしない	ズボンからシャツが出ている	5	5	5	*	5
17	だらしない	つめが伸びている	5	5	5	*	5
5	だらしない	汚い	5	5	5	*	5
24	だらしない	外見が汚い人	5	5	5	*	5
28	だらしない	靴が汚い	5	5	5	*	5
17	だらしない	靴下に穴が開いている	5	5	5	*	5
14	だらしない	寝癖がついている	5	5	5	*	5
42	だらしない	寝坊をして髪の毛などぼさぼさ	5	5	5	*	5
42	だらしない	身なりが悪い	5	5	5	*	5
25	だらしない	整理整頓ができない	5	5	5	*	5
21	だらしない	髪がぼさぼさ	5	5	5	*	5
30	だらしない	髪の毛がきちんとなっていない	5	5	5	*	5
38	だらしない	髪の毛がきちんと整えられていない	5	5	5	*	5
14	だらしない	髪の毛が汚い	5	5	5	*	5
29	だらしない	髪の毛が汚れている	5	5	5	*	5
1	だらしない	部屋が汚い	5	5	5	*	5

Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 2 者 一 致
5	だらしない	部屋が汚い	5	5	5	*	5
26	だらしない	部屋が汚い	5	5	5	*	5
29	だらしない	部屋が汚い	5	5	5	*	5
36	だらしない	部屋が汚い	5	5	5	*	5
42	だらしない	部屋が汚い	5	5	5	*	5
7	だらしない	部屋が散らかっている	5	5	5	*	5
6	だらしない	部屋などが散らかっている	5	5	5	*	5
21	だらしない	部屋の中が整理されていない	5	5	5	*	5
14	だらしない	服がしわしわ	5	5	5	*	5
11	だらしない	服にゴミが付いている	5	5	5	*	5
34	だらしない	服の襟足が汚れている	5	5	5	*	5
26	だらしない	服の脱ぎっぱなし	5	5	5	*	5
4	だらしない	服装が乱れている	5	5	5	*	5
4	だらしない	髪型が乱れている	5	5	5	*	5
7	だらしない	服装がきちんとしていない	5	5	5	*	5
40	だらしない	服装がだらしない	5	5	5	*	5
19	だらしない	服装が乱れている	5	5	5	*	5
29	だらしない	洋服がしわしわ	5	5	5	*	5
28	だらしない	洋服にしわが寄っている	5	5	5	*	5
23	だらしない	洋服の襟が、片方はきちんとしているが片方が立っている	5	5	5	*	5
7	まめ	細かいことに気がつく	4	1	1	-	1
41	まめ	どんな記念日でも忘れずに祝ってくれる	4	3	3	-	3
22	まめ	よく手芸をする	3	3	4	-	3
18	まめ	家計簿にレシートまではって整理する	3	3	1	-	3
9	まめ	手紙などの返事はきちんとする	4	3	3	-	3
26	まめ	星形の人参や、たこウインナーの弁当を作る	3	3	1	-	3
42	まめ	旅行の計画を綿密にたてる	6	3	3	-	3
26	まめ	ハンカチやワイシャツのアイロンがけをする	3	3	3	*	3
28	まめ	家族や友人のために料理を作る	3	3	3	*	3
10	まめ	関心のある物をデータや表にまとめる	3	3	3	*	3
30	まめ	自分の予定表を作ったりする	3	3	3	*	3
9	まめ	食事を作るときインスタント物を使わないで手作りする	3	3	3	*	3
15	まめ	毎日、庭の盆栽いじりをしている	3	3	3	*	3
2	まめ	いつもちょこちょこ動いている	3	4	4	-	4
23	まめ	なんでも自分でする	4	4	6	-	4
41	まめ	何気ないところまで気を使う	4	4	1	-	4
41	まめ	人のことまで面倒を良く見る	4	4	6	-	4
35	まめ	日記をつける	3	4	4	-	4
27	まめ	日記を毎日つける	3	4	4	-	4

Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 2 者 一 致
13	まめ	部屋を掃除する事が多い	4	4	3	-	4
13	まめ	面倒くさがらないでやる人	4	4	3	-	4
35	まめ	良く気がつく	4	4	1	-	4
21	まめ	何度も同じことを言う	4	4	4	*	4
34	まめ	定期的に友人, 知人に手紙や電話をする	4	4	4	*	4
37	まめ	年賀状, 見舞いなどを必ず出す	4	4	4	*	4
8	まめ	毎日同じぐらいの時間に電話をかけてくる	4	4	4	*	4
18	まめ	毎日夫のお弁当を作る	4	4	4	*	4
5	まめ	一つのことこつこつと取り組む	3	5	5	-	5
5	まめ	煙たがられても, 一生懸命にがんばる	3	5	5	-	5
30	まめ	野菜の切り方が細かい	5	5	1	-	5
38	まめ	いつも部屋の中がきれい	5	5	5	*	5
19	まめ	細かく整理できている	5	5	5	*	5
19	気が散りやすい	1つのごことに集中できない	3	1	1	-	1
30	気が散りやすい	1つのごことに集中できない	3	1	1	-	1
28	気が散りやすい	1つのごことをしててまわりが気になる	3	1	1	-	1
25	気が散りやすい	1つのごことをしているとき, 別のごことに手を出す	2	1	1	-	1
8	気が散りやすい	いつもキョロキョロしている	3	1	1	-	1
2	気が散りやすい	キョロキョロする	2	1	1	-	1
14	気が散りやすい	キョロキョロする	2	1	1	-	1
21	気が散りやすい	すぐに, キョロキョロする	2	1	1	-	1
37	気が散りやすい	すぐ別のごことに興味を示す	2	1	1	-	1
23	気が散りやすい	まわりを気にする	3	1	1	-	1
14	気が散りやすい	映画館で, 見ているとき何度も座りなおす人	3	1	1	-	1
39	気が散りやすい	人が話をしてると, 自分のごことを言われているようにちらちら見る	3	1	1	-	1
14	気が散りやすい	人と話をしてると, 相手の目を見ない	3	1	1	-	1
2	気が散りやすい	人の目ばかりを見る	3	1	1	-	1
13	気が散りやすい	目をきよろきよろさせる	3	1	1	-	1
1	気が散りやすい	目をきよろきよろする	3	1	1	-	1
7	気が散りやすい	落ちつきがない	5	1	1	-	1
27	気が散りやすい	落ちつきが無く, じっとしてられない	3	1	1	-	1
24	気が散りやすい	話をしていてもキョロキョロする	3	1	1	-	1
9	気が散りやすい	テレビなどのチャンネルをすぐリモコンでかえたりする	1	1	1	*	1
30	気が散りやすい	CDを聞いていても, テレビが気になる	3	3	1	-	3
19	気が散りやすい	いらいらして八つ当たりをする	3	3	1	-	3
31	気が散りやすい	テレビがついていると勉強できない	3	3	5	-	3
4	気が散りやすい	テレビやラジオをつけて勉強ができない	3	3	5	-	3
9	気が散りやすい	音楽を聴きながら勉強をする	3	3	5	-	3
23	気が散りやすい	何かしながらテレビを見る	3	3	5	-	3



## Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 一 致 2
30	気が散りやすい	細かい作業を長時間できない	3	3	4	-	3
41	気が散りやすい	仕事をしていると、すぐにタバコを吸ったり違うことをする	3	3	1	-	3
21	気が散りやすい	長く勉強をしていられない	3	3	4	-	3
32	気が散りやすい	物音が気になる	3	3	1	-	3
15	気が散りやすい	物事に集中できない	3	3	5	-	3
17	気が散りやすい	勉強しているとき、まわりで話をしている	3	3	5	-	3
32	気が散りやすい	勉強しているとき他人のおしゃべりが気になる	3	3	1	-	3
18	気が散りやすい	1つのことを終わりまでできない	3	3	3	*	3
35	気が散りやすい	1つの物事が終わらない	3	3	3	*	3
26	気が散りやすい	1冊の本を最後まで読めない	3	3	3	*	3
26	気が散りやすい	一定時間1つのことをやり通せない	3	3	3	*	3
10	気が散りやすい	物事を最後までやり通せない	3	3	3	*	3
2	気が散りやすい	すぐ怒る	4	4	1	-	4
42	気が散りやすい	いつもせっかち	4	4	4	*	4
28	気が散りやすい	授業中に他のことを考えている	3	5	5	-	5
6	気が散りやすい	小さな音でも気になって眠れない	3	5	5	-	5
23	気が散りやすい	手元に他のものがある	5	5	5	*	5
8	無邪気	ゲームに勝ただけではしゃぐ	1	1	2	-	1
30	無邪気	ささいなことでも喜ぶ(悲しむ)	1	1	3	-	1
23	無邪気	シャボン玉を見て喜ぶ	1	1	3	-	1
14	無邪気	思ったことをすぐに口にする	4	1	1	-	1
36	無邪気	雪が降ったら喜ぶ	1	1	2	-	1
23	無邪気	みんなと楽しそうに駆け回っている	2	3	3	-	3
5	無邪気	一つのことに熱中している	3	3	5	-	3
12	無邪気	何もかも忘れて思いっきり遊ぶ	4	3	3	-	3
5	無邪気	何も考えずに遊びまくる	4	3	3	-	3
40	無邪気	子どもと戯れている	3	3	2	-	3
5	無邪気	子供と一緒に遊ぶ	3	3	2	-	3
27	無邪気	遊園地で遊ぶ	3	3	5	-	3
38	無邪気	元気に外で遊ぶ	3	3	3	*	3
42	無邪気	公園で友達と遊んでいる	3	3	3	*	3
25	無邪気	高校生ぐらいの子が幼児と遊んでいる	3	3	3	*	3
6	無邪気	何にでも好奇心を示す	2	4	4	-	4
13	無邪気	何に対しても、真剣に取り組む	3	4	4	-	4
33	無邪気	人目を気にせずやりたいことをやる	4	4	5	-	4
32	無邪気	何に対しても感動する	4	4	4	*	4
10	無邪気	キャラクターが好き	5	5	6	-	5
33	無邪気	悪気がない	5	5	6	-	5
20	無邪気	歳に関係なく、いつも元気ではつらつとしている	4	5	5	-	5

## Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 一 致
27	無邪気	子どもの笑顔	6	5	5	-	5
9	無邪気	子供と一緒に遊んでも無理がない	5	5	2	-	5
31	無邪気	周囲の雰囲気は暗くても笑ってられる	4	5	5	-	5
28	無邪気	辛いこと、悲しいことを知らずに笑ってられる	4	5	5	-	5
19	無邪気	悩み事のなさそうな明るい人	3	5	5	-	5
10	無邪気	楽しさが表情や態度にあらわれる	5	5	5	*	5
17	無邪気	寝ているとき	5	5	5	*	5
18	無邪気	寝顔	5	5	5	*	5
23	用心深い	カギなどを閉めたが何度も確認する	3	1	1	-	1
31	用心深い	カギやガスの元栓を何度も確認する	3	1	1	-	1
14	用心深い	でがけに鍵や、電気の消し忘れを1度確認する	2	1	1	-	1
35	用心深い	何回もカギをかけたかを確認する	3	1	1	-	1
7	用心深い	何事に対しても確認をする	4	1	1	-	1
29	用心深い	何度もカギを確かめる	3	1	1	-	1
40	用心深い	何度も確認する	4	1	1	-	1
9	用心深い	家などを出るときに必ず、ガスのもとや電気などを2回確認する	3	1	1	-	1
13	用心深い	家を出る前に、何回もいろいろチェックする	3	1	1	-	1
27	用心深い	外出するとき、何度も戸締まり、ガスなどをチェックする	3	1	1	-	1
32	用心深い	外出時に何度も部屋を確認する	3	1	1	-	1
6	用心深い	鍵の確認を何度もする	3	1	1	-	1
3	用心深い	鍵をかけたことを何回も確認する	3	1	1	-	1
15	用心深い	戸締まり、カギのチェックを何度もする	3	1	1	-	1
22	用心深い	戸締まり、ガス栓を5回確認する	3	1	1	-	1
21	用心深い	戸締まりの確認を何度もする	3	1	1	-	1
4	用心深い	戸締まりを何度も確認する	3	1	1	-	1
41	用心深い	戸締まりを何度も確認する	3	1	1	-	1
25	用心深い	寝る前に何度も、カギ、ガスなど点検する	3	1	1	-	1
11	用心深い	真夜中の電話はイタズラ電話かも知れないので出ない	2	1	1	-	1
39	用心深い	同じことを何回も何回も確認する	3	1	1	-	1
10	用心深い	同じことを何度か確認する	3	1	1	-	1
42	用心深い	必ず何事も確認をする	3	1	1	-	1
30	用心深い	ちょっと出かけるにしてもカギをかける	1	1	1	*	1
37	用心深い	でがけに火の元、電気を確認する	1	1	1	*	1
18	用心深い	のぞき窓で相手を確認してからドアを開ける	1	1	1	*	1
16	用心深い	家に人が来たとき、ドアの穴から相手を確認する	1	1	1	*	1
2	用心深い	家を出るとき、鍵、ガス、電気を確認する	1	1	1	*	1
28	用心深い	外出の時、火の元やカギの確認をする	1	1	1	*	1
12	用心深い	鍵の締め忘れ、ガスの元栓などをしっかりチェックする	1	1	1	*	1
17	用心深い	戸締まり、火の元栓をもう一度確認する	1	1	1	*	1

Appendix 9-4-1 Scripts of trait (Used in study 9)

ID	Trait	Contents	評 定 者 A	評 定 者 B	評 定 者 c	全 者 一 致	3 者 中 2 者 一 致
7	用心深い	戸締まりをきちんとする	1	1	1	*	1
20	用心深い	出かける前に、カギや火の元栓を確認する	1	1	1	*	1
5	用心深い	寝る前にガスの元栓や玄関の鍵などあらゆるところをしめる	1	1	1	*	1
34	用心深い	人が来たとき、まず誰か確認してからチェーンを外す	1	1	1	*	1
28	用心深い	友人の誘いに、すぐに返事はしない	3	2	2	-	2
28	用心深い	学校のテストで何度も見直しをする	3	3	4	-	3
18	用心深い	人を疑って、探りを入れる	3	3	1	-	3
5	用心深い	部屋の中をあらされないように、物の位置など確認する	3	3	1	-	3
3	用心深い	毎日自分で料理する	3	3	4	-	3
33	用心深い	口が堅い	5	4	4	-	4
2	用心深い	人に答えを求めすぎる	3	4	4	-	4
42	用心深い	何かあったときのために用心している	4	5	5	-	5
38	用心深い	家のカギなどたくさんのキーホルダーを身につけている	3	5	5	-	5
11	用心深い	災害に備えて、非難用品を用意しておく	3	5	5	-	5
30	用心深い	自転車のカギを3つぐらいつけている	3	5	5	-	5
10	用心深い	予備を持っている	3	5	5	-	5